国立大学法人お茶の水女子大学
ジェンダー研究所

2018年度
事業報告書

Institute
for
Gender Studies
Ochanomizu
University

IGS
Institute for Gender Studies
Ochanomizu University

ジェンダー研究所
2018年度事業報告書によせて

グローバル女性リーダー育成研究機構長／理事・副学長　　佐々木　泰子

ジェンダー研究所は、40年の歴史を持つお茶の水女子大学の代表的な研究所です。優れた研究者を擁し、常に日本のジェンダー研究を牽引する先端的研究に取り組んでまいりました。2018年度もまた、時宜に適った研究プロジェクトを遂行し、国際シンポジウムや学術セミナー、特別招聘教授プロジェクト、学術雑誌の刊行、教育プログラムの実施、研究所成果の発信等に精力的に取り組んできました。

加えて、2018年度は、ジェンダー研究所のこれまでの成果を生かし、グローバル女性リーダー育成研究機構を構成するもう一つの研究所であるグローバルリーダーシップ研究所との共同企画運営による国際シンポジウムも開催いたしました。2018年6月30日開催の「女性政治リーダーはいかにして『育つ』か？」と、2019年1月12日開催の「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」の２つの国際シンポジウムです。会場には、研究者のみならず、学生や女性リーダーの養成に取り組んでいる多くの方々の参加があり、熱心な議論が交わされました。

また更に、グローバルな学術雑誌を目指し『ジェンダー研究』を刷新したほか、国際共同研究も進めました。特に、ノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターとの共同プロジェクトは、ノルウェー・リサーチカウンシルの助成金に採択されるなど、従来の国際共同研究にとどまらず、国際研究拠点としての本学の役割と貢献が期待される契機となりました。

ところで、2018年度は、グローバル女性リーダー育成研究機構が設立されて4年目となり、事業活動のひとつの節目となる中間評価を実施いたしました。学内委員に加えて、学外から江原由美子先生（横浜国立大学教授）とリンダ・グローブ先生（上智大学名誉教授）を評価委員としてお招きし、これまでの事業成果を評価するコメント及び今後に向けたご提言をいただきました。委員の先生方からいただいたジェンダー研究所へのご期待を励みとして、所員一同、2019年度も意欲的に研究を展開させていく所存です。

年度末に、発足以来機構長を務めてきた猪崎弥生先生が退職されました。この場を借りて先生に感謝申し上げ、微力ながら、ジェンダー研究所が積み重ねてきた実績をさらに発展させ、なお一層社会に資するよう取り組んでいく決意です。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

ジェンダー研究所2018年度の活動を振り返って

ジェンダー研究所長　　石井クンツ　昌子

研究所設立4年目である2018（平成30）年度も、所長以下、専任教員、研究員、研究系スタッフ、事務系スタッフが協力して研究プロジェクト推進や国際シンポジウム等開催に積極的に取り組みました。ジェンダー研究所は、安定した組織運営を基盤に、多くの事業成果を挙げており、2018年度に実施された中間評価でもポジティブなコメントをいただくことができました。

本研究所のメインの事業である特別招聘教授プロジェクトでは、ノースカロライナ大学のバーズレイ教授とジュネーブ大学のガルディ教授をお招きして、非常に有意義な国際シンポジウムやIGSセミナーを開催していただきました。バーズレイ教授には本学の大学院生の授業も担当していただき、論文指導や英語の指導をしていただき、大変好評でした。ジェンダー研究センター時代からタイトルを引き継ぎ刊行している『ジェンダー研究』は、質の高い学術雑誌転換後の第1号を発刊し、国内外から高い評価を得ることができました。

新しい国際的連携関係の構築のためにノルウェーリサーチカウンシルに申請していたノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターとの共同研究プロジェクト「ジェンダー平等/ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」が採択され、研究と教育に関する交流が本格的に始まりました。本学のジェンダー研究所からは石井クンツ（所長）、申キヨン准教授（専任教員）、小玉亮子教授（運営委員）がコアメンバーになり、大橋准教授、仙波・吉原RF、佐野講師（グローバルリーダーシップ研究所）、松田RF（国際教育センター）の計8名がプロジェクトに参加します。2019年9月には本研究所のメンバーがNTNUを訪問してワークショップなどに参加する予定です。これらの事業の他にも、昨年度から始まったジェンダー研究所の前身である女性文化資料館創設（1975年）以来の事業記録の電子化も着実に進んでいます。研究所の歴史の記録を財産として保存し活かしていくことも、拠点形成のための重要な事業と言えると思います。

グローバルリーダーシップ研究所との協働活動実績も、2018年度は2つの大規模な国際シンポジウム企画・開催を通して、着実に積み重ねられました。6月に開催されたシンポジウムでは女性の政治参加に注目して、韓国の現職国会議員の陳善美氏と野田聖子議員をお招きして政治面での女性参画の必要性について学びました。また、2019年1月にはグローバル女性リーダー像について、韓国の金惠淑梨花女子大学学長、アンネ・ボルグNTNU副学長、本学の室伏きみ子学長の講演とパネルディスカッションを通して女性のリーダー像についての知識を深めました。これらのシンポジウムは本学の学生をはじめ、他大学の学生や一般の方々にもご参加いただきましたが、とても貴重なシンポジウムであったことは、参加者からいただいた感想コメントから明らかです。

本報告書を通して、これらの研究所事業の詳細をご理解いただけることと思います。研究所事業の充実は、所員の努力のみによってではなく、学内そして学外の各方面からの協力を得て実現されています。ここに、心からの感謝の意を表します。

【目　次】

1．ジェンダー研究所 2018（平成 30）年度事業概要……7
ジェンダー研究所概要
2018 年度事業概要

2．研究プロジェクト……13
2018 年度研究プロジェクト成果報告
（Ⅰ）政治・思想とジェンダー
（Ⅱ）生殖・身体とジェンダー
（Ⅲ）経済・移動とジェンダー
2018 年度外部資金獲得状況
学会等活動一覧

3．国際シンポジウム・セミナー……41
2018 年度 国際シンポジウム・セミナー概要
主催国際シンポジウム詳細
アラブ世界の女性と逸脱：グッドとバッドの境界で
議員になれるのは誰なのか？：フランスの政治と議会史からみる立法府のジェンダー化
グローバル女性リーダー育成研究機構主催（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同）国際シンポジウム詳細
女性政治リーダーはいかにして「育つ」か？
ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像
主催・共催 IGS セミナー詳細
合評会：倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー：90 年代保守言説のメディア文化』／近代日本のファッション文化を再考する：女性・近代化・対抗文化／ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考／代理出産をめぐる世界の現状：商業的代理出産から利他的代理出産へ／地政学、安全保障、女性の身体／フランスにおける LGBT と生殖医療、および性別の表記変更／主体、社会運動、民主主義：ジュディス・バトラーによる理論構築の検討／ミレニアル舞妓さん：日本のポピュラーカルチャーにおける舞妓像／フランス啓蒙の女性論／近代日本の女性の移動と再生産：「からゆきさん」の生涯をめぐって／性同一性障害とトランスジェンダーは「水と油」か／フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション：サスキア・サッセンとの対話
主催研究会詳細
IGS 研究協力員　研究報告会／ノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターとの研究会
協力シンポジウム
育児期親子の IT とソーシャルメディア活用：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較

4．特別招聘教授プロジェクト……87
2018 年度特別招聘教授プロジェクト概要
1）ジャン・バーズレイ特別招聘教授
2）デルフィーヌ・ガルディ特別招聘教授

5．国際研究ネットワーク……95
2018 年度国際研究ネットワーク構築概要
1）海外研究交流
2）国際共同研究プロジェクト
3）JAWS・AIT
4）海外研究者フェローシップ受入
5）国内外招聘研究者一覧

6．教育プロジェクト……117
1）専任・特任教員担当講義
2）2018 年度博士前期課程修了者･修士論文要旨

7．学術成果の発信……121
1）学術雑誌『ジェンダー研究』
2）プロジェクト報告書 IGS Project Series による成果刊行

8．文献収集と公開･史料電子化･ウェブ発信……127
1）文献・資料の収集と公開
2）IGS 史料電子化プロジェクト
3）ウェブサイトでの情報発信

9．社会貢献……131

【資料】
①構成メンバー……136
②研究プロジェクト一覧……149
③協力研究者一覧……155
④国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧……161
⑤2018 年度新規収蔵図書・資料……166
⑥史料電子化プロジェクト電子化イベント一覧……168
⑦国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則……173
⑧国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則……175
⑨『ジェンダー研究』編集方針・投稿規程……176
⑩ジェンダー研究所ウェブサイト　プライバシー・ポリシー……178

1. ジェンダー研究所 2018(平成 30)年度 事業概要

ジェンダー研究所概要

2018 年度事業概要

▶ジェンダー研究所概要

グローバルなジェンダー研究の拠点としての活動を伸展

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、国際的な学術ネットワークの構築を主要目的とし、高水準の国際的研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム等の開催、国際的教育プログラムの実施、学術雑誌の刊行、研究教育成果のグローバルな発信と社会還元を推進している。

ジェンダー研究所の創立は 1975（昭和 50）年の女性文化資料館設立に遡る。以降、女性文化研究センター（1986（昭和 61）年)、ジェンダー研究センター（1996（平成 8）年）と改組を重ね、日本のジェンダー研究の発展に貢献してきた。そして、お茶の水女子大学が創立 140 周年を迎えた 2015（平成 27）年、「ジェンダー研究所」と名称を改め、「グローバルリーダーシップ研究所」と共に、「グローバル女性リーダー育成研究機構」構成研究所となった。ジェンダー研究所は、これまでに培ってきたジェンダー研究・教育および国際的学術ネットワーク構築の実績を資源に、グローバル女性リーダー育成研究機構における中核的な研究機関として、学際的かつ先駆的な研究をより推進し、グローバルな研究成果発信と学術ネットワーク構築に務める。 ［参照:本報告書 173～174 頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」］

ジェンダー研究所（Institute for Gender Studies（IGS））の沿革と本学ジェンダー研究教育の動き

1875	東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）開校
1949	お茶の水女子大学設立
1975	**女性文化資料館設立**
1986	**女性文化研究センター設立**
1993	大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達学専攻「女性学講座」を創設
1996	**ジェンダー研究センター（IGS）設立（国内大学初の「ジェンダー研究」を目的とする研究施設）**
1997	大学院人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」設置
1998	大学院人間文化研究科博士後期課程「女性学講座」を人間発達科学専攻「ジェンダー論講座」に改組
2003	**21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」採択**
2004	国立大学法人 お茶の水女子大学設立
2005	大学院人間文化研究科博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」設置
2006	大学院人間文化研究科博士前期課程「ジェンダー社会科学専攻」設置
2007	大学院人間文化研究科を人間文化創成科学研究科に改組
2015	**グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所設立**

▶ジェンダー研究所 2018 年度事業概要

先端的ジェンダー研究の充実と国際的な発信へ

2018 年度も、研究活動が活発に行われ研究成果も充実している。主な成果としては、1)『ジェンダー研究』21 号の刊行、2）ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターとの組織間連携による共同研究の採択、3）研究所史料電子化プロジェクトの進捗が挙げられる。

研究プロジェクトは今年度から内容的に関連する 3 分野にまとめ、より有機的に遂行できるように再構成した。国際シンポジウムと特任講師・特任リサーチフェローによるセミナーは、さらに充実しており、企画テーマも多様であったことから、聴衆の層も広げている。相当数のシンポジウムやセミナー運営の傍ら、研究プロジェクト成果の論文や学会報告による発表も、積極的に行われている。新たな外部資金の獲得もあった。研究面においても運営面においても、前年度までの 3 年間で下積みされたものから、着実に成果が挙げられており、それが研究力と社会的発信を向上させている。

また、「グローバルリーダーシップ研究所」との共催国際シンポジウムも 2 件開催した。

構成メンバー

年度内に特任リサーチフェロー1 名の交代があったが、事業活動の中心となる所長、専任教員、特任講師、特任リサーチフェロー、アカデミック・アシスタントの人数は前年体制継続。新任の特任リサーチフェローは、本学のジェンダー学際研究専攻学位取得者である。本学を巣立った研究者が他の研究機関で力をつけた後に、研究所の戦力に加わるということは、研究所および本学におけるジェンダー研究教育に活力をもたらす循環であるといえ、組織の歴史や成果の面でも意義深い。特別招聘教授は、新規採用 2 名。本学の教員と協働して国際シンポジウムを企画するなど、充実した研究教育交流が展開された。前年度から研究協力員として在籍しているハワイ大学大学院博士課程所属のマウラ・スティーブンス国際基金フェローに加え、前年度末に退官された足立眞理子本学名誉教授を客員研究員に、元ジェンダー研究センター機関研究員・講師の平野恵子氏を研究協力員として受け入れ、研究プロジェクトの拡充が図られた。

［参照：本報告書 173～174 頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」
136～148 頁 資料①「構成メンバー」］

研究プロジェクト

研究所の柱となる研究プロジェクトは、これまでの成果を引き継ぎながら、構成メンバーの変更により研究分野を再構成した。（Ⅰ）政治・思想とジェンダー、（Ⅱ）生殖・身体とジェンダー、（Ⅲ）経済・移動とジェンダー、の各分野は、独自性を維持しながら有機的につながり、総合的な研究成果を達成することを目的としている。このプロジェクトの中で、2018 年度は 3 件の外部資金（科学研究費）新規獲得があった。研究資金別にみると、IGS 研究プロジェクトとして所属研究者それぞれが進めている共同研究・個人研究が 7 件、研究代表者または分担者として外部資金を獲得しての研究プロジェクトが 12 件、これに、2 名の特別招聘教授それぞれのプロジェクトが加わり、合わせて 21 件となった。それぞれのプロジェクト活動をコアとした、研究会やシンポジウム開催への活動展開が活発に行われた。学会発表や投稿論文、書籍刊行による成果発信も積極的に進められている。また今年は、申琪榮准教授が世界政治学会でジェンダーと政治分野の最優秀論文賞を受賞したことも大きな成果である。

［参照：本報告書 13～40 頁「研究プロジェクト」］

国際シンポジウム等の開催

主催国際シンポジウム 2 件、合同国際シンポジウム 2 件、主催 IGS セミナー11 件、共催セミナー 1 件、主催 IGS 研究会 2 件、協力国内シンポジウム 1 件を開催した。IGS セミナーは、招聘教授、特任講師・リサーチフェローによる企画が中心で、テーマやゲストスピーカーの顔ぶれは多様性に富んでいる。一覧からは、ジェンダー研究の学際性や、研究と社会のつながりのありようが見て取れる。また、学内外から相当の参加者数を得る成果を挙げている。

女性の政治参画や生殖医療、トランスジェンダーなど多くの最新時事問題が取り上げられたことに加え、バトラーの社会理論や舞子の表象の変遷、洋裁文化における女性の生存戦略、ブリテンにおける功利主義フェミニズムの再発見、近代日本における女性の移動の問題など、過去や現在の問題を検討吟味して、未来へと繋げていくような企画が並ぶのは、本研究所ならではの成果である。

シンポジウムやセミナーの開催は、研究発表や事業成果の社会還元のみならず、研究者同士の交流、共同研究機会の構築および研究ネットワーク拡充の機会ともなっており、2018 年度も国内外から 30 名を超えるゲストスピーカーを迎えて、活発な交流活動を展開することが出来た。

［参照：本報告書 41～85 頁「国際シンポジウム・セミナー」］

特別招聘教授プロジェクト

ジャン・バーズレイ氏（米・ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）、デルフィーヌ・ガルディ氏（スイス・ジュネーブ大学教授）の 2 名を招聘した。特別招聘教授には、研究所事業全般に渡っての、先進性および国際性の向上への寄与が期待されているが、両氏とも、その期待に十分に応える貢献をしてくれた。バーズレイ氏は表象研究、ガルディ氏は歴史・文化研究と、人文科学領域の研究者であるが、それぞれの研究成果に基づくセミナーや国際シンポジウム等の企画は、領域横断的かつ文化横断的で、本研究所が目指すジェンダー研究の方向性に沿ったものである。研究プロジェクトも精力的に推進し、学内の研究者たちとの交流を積極的に行う姿勢は、院生や研究者たちに知的刺激を与え、本学におけるジェンダー研究に活力を与えている。

［参照：本報告書 175 頁 資料⑧「国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則」
および 87～94 頁「特別招聘教授プロジェクト」］

国際研究ネットワーク

2018 年、IGS の研究者は、韓国、台湾、インドネシア、タイ、フィリピン、インド、アメリカ、イギリス、ノルウェー、フランス、スイスの計 12 か国の研究者らと研究交流を深めた。そして、2018 年度は 5 つの国際共同研究プロジェクトを展開し、海外からシンポジウムやセミナー等のために IGS が招聘した研究者も 16 名にのぼった。

国際共同研究プロジェクトをみると、「東アジアにおけるジェンダーと政治」では、2018 年は特に国内外での成果発信に力を入れた。また、IGS とノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターが共同申請したノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金（INTPART）が 2018 年 12 月に採択され、2019 年度から始まる共同研究プロジェクトの準備として、NTNU の研究者らとの交流が活発に行われた。

「日本―アメリカ女性政治学者シンポジウム」（JAWS）と「AIT ワークショップ」では、2018 年度も次世代ジェンダー研究者の養成のための国際研究交流を推進し、ネットワーク構築におおいに貢献している。

［参照：本報告書 95～116 頁「国際研究ネットワーク」］

教育プロジェクト

例年同様、所属教員による学部・大学院等での講義、特別招聘教授等による大学院生対象英語セミナーが実施された。講義科目は学部向けに「比較ジェンダー論」「グローバル化と労働」「グローバル経済とジェンダー」、大学院向けに「比較政治論・演習」「ジェンダー基礎論」「フェミニズム理論の争点・演習」「国際社会ジェンダー論演習」「フィールドワーク方法論」が開かれ、またサマープログラムでの申琪榮准教授による英語講義 Special Lectures in Humanities and Sciences Ⅰ「Gender and Political Representation」も行なわれた。

バーズレイ特別招聘教授は、2018 年度後期から大学院講義「男女共同参画国際演習 II」を担当し、『蝶々夫人』を素材にしたジェンダー表象についての演習が行なわれた。研究所所属教員は、学内各所において教育の国際化に貢献している。

所属教員指導の博士前期課程ジェンダー社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」修了者の修論テーマは、ハリウッド映画における白人男性の表象、女性労働者へのセクハラ、中国のメディアにおけるDV、日本における男性性と身体であった。

［参照：本報告書 117～120 頁「教育プロジェクト」］

情報発信・社会還元

『ジェンダー研究』は、21 号から本格的な学術雑誌に刷新された。新雑誌では、論文投稿資格がジェンダー研究所関係者に限らない一般に広げられことから投稿数が飛躍的に増大し、また世界各地域より投稿がみられた。21 号は、「ジェンダーと政治的リーダーシップ」と題する特集を組み、その他特別寄稿論文、投稿論文、書評により構成されている。版型、デザインも一新された本号は、2018 年 6 月に刊行された。

文献収集・資料整理分野では、寄贈図書・資料の受入のほか、所属研究者らの著書や、主催シンポジウムやセミナーの関連書籍の購入を進めた。また、昨年度より開始された、ジェンダー研究所創立以来の事業記録の電子化プロジェクトも引き続き実施されている。本プロジェクトはデジタルアーカイブの構築を目標としており、完成後には、本学における女性学・ジェンダー研究の歴史を一望できるようになる。加えて、学術雑誌『ジェンダー研究』の刷新に伴い、専用サイト新設に取り組んだ。本特設サイトの公開は 2019 年度前期を目指している。

社会貢献の面では、一般公開のシンポジウム等開催による事業成果社会還元のほか、所属研究者は、行政機関や非営利団体からの講演依頼等を積極的に引き受け、またその成果が新聞ほかメディアに多数掲載されるなどして、各々の研究成果の社会還元に努めている。

［参照：本報告書 121～126 頁「学術成果の発信」、127～130 頁「文献収集公開・史料電子化・web 発信」、131～134 頁「社会貢献」］

2. 研究プロジェクト

2018 年度研究プロジェクト成果報告

（Ⅰ）政治・思想とジェンダー

（Ⅱ）生殖・身体とジェンダー

（Ⅲ）経済・移動とジェンダー

2018 年度外部資金獲得状況

学会等活動一覧

▶ 2018 年度研究プロジェクト成果報告

学際的、先駆的ジェンダー研究を目指して

ジェンダー研究所は「グローバル女性リーダー育成研究機構」の中核的な研究機関として先端的ジェンダー研究に取り組んでいる。

ジェンダー研究所は、21 世紀 COE プログラム『ジェンダー研究のフロンティア』(2003〜2007 年度)成果を含む、過去の優れた業績とその後の研究成果を発展させ、伝統的な学問分野に縛られない学際的で先駆的なジェンダー研究を志しており、これからも日本のジェンダー研究の発展へ貢献することを目指している。また、アジアにおけるジェンダー研究の拠点を目指し、国際的な共同研究と、その成果発信を積極的に進めており、蓄積された研究成果は広く社会へ還元していく。

3 分野の先端研究領域の発展と国内・国際共同研究をリード

研究所の構成メンバーの退任と新規着任により、研究領域が 5 分野から 3 分野へと再構成された。(Ⅰ)政治・思想とジェンダー、(Ⅱ)生殖・身体とジェンダー、(Ⅲ)経済・移動とジェンダーである。3 分野は、独自性を維持しながら有機的につながり、総合的な研究成果を達成することを目的としている。これらの研究分野で活躍している海外研究員受け入れも継続して実施している。今後も、学内研究員、客員研究員、研究協力員の協力を得ながら、研究成果をあげていきたい。各研究分野における今年の成果として、研究会の実施、IGS セミナー実施、成果出版物の刊行、国際共同研究の実施、国際ネットワークの構築、国際学生交流を実施したほか、研究所メンバーらの論文執筆、学会発表、講演なども活発に行われた。個々のプロジェクトの研究成果については、本書 17〜37 頁を参照していただきたい。

国際シンポジウム、IGS セミナー、研究会を開催及び学術雑誌『ジェンダー研究』の刷新

各研究分野における質の高いシンポジウムやセミナーの開催と、『ジェンダー研究』21 号の刊行により、ジェンダー研究の成果発信に力を入れた。

研究者及び一般市民を対象として、時宜にかなうテーマの国際シンポジウムやセミナーを複数開催し、聴衆との議論の場も設けることで、研究成果の社会還元に努めた。加えて、特別招聘教授の企画によるセミナーや国際シンポジウムも開催し、ジェンダー研究の国際的な成果を共有することができた。

本年度から本研究所の年報『ジェンダー研究』21 号が 1 年の準備期間を得て刊行された。創刊以来 20 年の成果を持って、昨年度から新しい雑誌体制に移行し、事務局を拡大し、学外編集委員を追加した。21 号は、国際シンポジウムでの研究交流の成果である特集論文 4 本と、研究論文 2 本、特別寄稿 1 本、そして書評を大幅に増やす構成になり、2018 年 6 月発行した。(本報告書 122〜125 頁参照)。『ジェンダー研究』の刷新により、ジェンダー研究のさらなる発展を図りたい。

2018 年度研究プロジェクト　3 分野別一覧

（Ⅰ）政治・思想とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究
科学研究費基盤研究 B 女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査
韓国研究財団一般共同研究 議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析
IGS 研究プロジェクト リベラル・フェミニズムの再検討
IGS 研究プロジェクト 「東アジアの越境的女性運動」研究

（Ⅱ）生殖・身体とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 生殖医療とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究
科学研究費基盤研究 C 諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究
公益財団法人トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム（B）個人研究助成 生殖補助技術で形成される家族についての研究
科学研究費基盤研究 C AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究

（Ⅲ）経済・移動とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 資本と身体のジェンダー分析
科学研究費基盤研究 B 新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー：インド・フィリピン・中国の国際比較
IGS 研究プロジェクト 日比間の在留資格「興行」をめぐる言説編成の解明：入国管理のジェンダー分析を目指して
科学研究費基盤研究 B 日比間の人の移動における支援組織の役割：移住女性と JFC の経験に着目して
国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）） グローバル性労働と人身取引の狭間にあるもの：聞き取りとネットワーク分析から
科学研究費基盤研究 C 人身売買／取引をめぐる市民活動の変遷：ネットワーク再構築に向けて
科学研究費基盤研究 C 現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容
科学研究費基盤研究 C インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合

研究プロジェクト分野別事業報告

（Ⅰ）政治・思想とジェンダー

「政治・思想とジェンダー」研究では、東アジア地域における民主主義の有り様と政治代表性の関係について国際比較研究を行う他、国境を越えて連帯する女性運動、及びイギリスの自由主義フェミニズム思想の発祥について考察する。国家、市民社会、思想という異なる次元からジェンダー秩序に基づく既成権力の在り方を明らかにするとともに、それに対抗する思想や運動を総合的に研究する。

2018 年度は、新規研究プロジェクト（科学研究費 B）が採択されこれまでの研究をさらに進化させることができた。引き続き、関連研究会やセミナーも実施した他、成果物も刊行した。

政治・思想とジェンダー　研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】申琪榮（IGS 准教授）

【概要】

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本、韓国、台湾の民主主義の有り様と政治代表性の関係について、ジェンダー視点に立脚した国際共同研究により比較分析する。議員を対象としたアンケート調査、政党、議員、市民社会関係者へのインタビューや現地でのフィールドワークを実施するほか、定期的な国際シンポジウムや研究集会を開き、研究交流を促進する。東アジア地域において、政治代表性の男性優位性が続くメカニズムを明らかにし、政治制度におけるジェンダー公平性・多様性を実現させる政策も検討する。2018 年は成果をまとめつつ、国内外で成果発表に力を入れた。

【研究内容・成果】

論文掲載	2018,“Gender, Election Campaigns and the First Female President of South Korea,” *The Journal of Gender Studies*, No. 21, pp. 71-86. 2018,“Introduction for the Special Section,” *The Journal of Gender Studies*, No. 21, pp. 5-8. 2018,“South Korean Views on Japan’s Constitutional Reform under the Abe Government,” *The Pacific Review*, Vol. 31, Issue. 2, pp. 256-266 (with EJ Cho) DOI: 10.1080/09512748.2017.1397731 2019,「女性政治リーダーをどう育てるか？——政治分野における男女共同参画推進法の活かし方」『都市問題』110 巻 1 月号、83〜91 頁　（三浦まり共著）
学会発表	2018,“Are Women Legislators More Peace-oriented?” World Social Science Conference, Fukuoka, Japan, Sep. 25-28. 2018,“Does “Constituency Facetime” Reproduce male Dominance: Insights from Japan’s Mixed-Member Majoritarian Electoral System,” International Political Science Association, Brisbane, Australia, July 21-25 (With Mari Miura and Jackie Steele).
報告書刊行	『台湾におけるジェンダー･クオータ：その経験と影響分析』東アジアにおけるジェンダーと政治ブックレットシリーズ No.1（著者：Chang-ling Hwang、シリーズ編集者：申琪榮）2019 年 3 月（本報告書 126 頁参照）
国際シンポジウム登壇	福岡県国際女性シンポジウム『Cast Your Shell 殻を破れ』コメンテータ、2018 年 9 月 8 日. 「韓国のクオータ制度は定着したのか」 釜山大学　女性研究所　３０周年記念シンポジウム『政治代表性のジェンダー格差と制度』2018 年 9 月 14 日 釜山市 「MeToo から女性政治まで: 社会の周辺から政治的主体へ」市民政治フォーラム(홍익표, 이정미, 진선미의원 공동대표) 2018 年 8 月 24 日、ソウル市　韓国国会委員会館
IGS セミナー開催	「地政学、安全保障、女性の身体」を開催（2018 年 11 月）。（本報告書 65 頁参照）

政治・思想とジェンダー　研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 B（課題番号：18H00817）

女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査

【研究代表者】三浦まり（上智大学教授）

【研究分担者】申琪榮（IGS 准教授）、Noble Gregory（東京大学教授）、
スティール若希（東京大学准教授）、MCELWAIN KENNETH（東京大学准教授）

【期間】2018～2020 年度

【概要】

女性の政治参画に対する障壁を国会議員および主要政党の都道府県支部への調査を通じて明らかにする。国際的な研究成果に基づいて、とりわけ「政党の候補者リクルートメントと公認決定過程」に焦点をあて、郵送調査と政党関係者にインタビュー調査を組み合わせ、政治参画に関する男女差、政党差、地方差はどのように見られるかを考察する。

【研究内容・成果】	
公開研究会実施	Wan-ying Yang（台湾政治大学政治学科教授）「The Gender Implication of the 2018 Local Elections and Referendums in Taiwan」 2018 年 2 月 12 日上智大学
国会議員アンケート調査票	2018 年度は、第 2 次国会議員アンケート調査のため調査票の質問について研究プロジェクトメンバー間で議論を重ねて完成した。第 1 次の反省を踏まえ質問数を大幅に減らし、主に「政治分野における男女共同参画を推進する法律」と制度改革に対する意見を聞く質問を中心に構成した。
学会発表	2018.“Does “Constituency Facetime” Reproduce male Dominance: Insights from Japan’s Mixed-Member Majoritarian Electoral System,” International Political Science Association, Brisbane, Australia, July 21-25 (With Mari Miura and Jackie Steele).

政治・思想とジェンダー　研究プロジェクト

韓国研究財団一般共同研究（課題番号：NRF-2016926559）

議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析

【研究代表者】Ah-ran Hwang（釜山大学教授）

【研究分担者】申琪榮（IGS 准教授）

Jinock Lee（韓国ジェンダー政治研究所研究委員）

Soo-hyun Kwon（韓国ジェンダー政治研究所研究委員）

【期間】2016～2018 年度

【概要】

２年間の研究助成による韓国調査の研究プロジェクトであり、最終年度の 2018 年には、主に成果のまとめと執筆に専念した。メンバーらによる韓国語、英語の成果発表がなされた。

【研究内容・成果】

学会発表	メンバーらは、世界政治学会（IPSA）共通パネルを形成し研究発表を行った。
国際シンポジウム	「韓国のクオータ制度は定着したのか」 釜山大学　女性研究所 30 周年記念シンポジウム『政治代表性のジェンダー格差と制度』 2018 年 9 月 14 日 釜山市
海外講演会	「MeToo から女性政治まで: 社会の周辺から政治的主体へ」市民政治フォーラム（2018 年 8 月 24 日）、韓国国会委員会館、韓国ソウル市

【論文受賞】

世界政治学会（International Political Science Association, 2018 年 7 月ブリスベン開催）にて、「ジェンダーと政治」分野の最優秀論文賞（Wilma Rule Best Award 2018: IPSA Best Research on Gender and Politics）を受賞。（世界政治学会 HP　https://www.ipsa.org/awards/wilma-rule）

論文タイトル

Does "Constituency Facetime" Reproduce Male Dominance? Insights From Japan's Mixed-Member Majoritarian Electoral System

Author：Prof. Ki-Young Shin

Co-Authors：Prof. Jackie F. Steele, Prof. Mari Miura

政治・思想とジェンダー　研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

リベラル・フェミニズムの再検討

【研究担当】板井広明（IGS 特任講師）

【概要】

本研究プロジェクトの目的は、ベンサムやウルストンクラフト、J.S.ミルといった第 1 波フェミニズムあるいはリベラル・フェミニズムの思想・運動を再検討することにある。リベラリズムの公私二元論を前提にしたリベラル・フェミニズムは乗り越えの対象でしかないという捉え方が一般的だが、リベラリズムにおいて、「公」に対する「私」の領域は単に個人的自由の空間であると放任されるのではなく、不正義が存在すれば介入が正当化される空間でもあった。本研究では、ベンサムの女性論に関する草稿研究と、J.S.ミルの *The Subjection of Women*, 1869 のテクスト読解と『女性の隷従』新訳の作業を進め、リベラル・フェミニズム再検討の機運を盛り上げることを狙う。

【研究内容・成果】

訳文検討会	隔週でオンライン訳文検討会を開き、第 1 章の一文一文の原意を汲み取り、当時の社会的背景や他の思想家との関連などをチェックしつつ読み進め、訳文を完成させた。
IGS セミナー開催	2018 年 10 月 1 日（月）「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」と題する、6 人の報告者と 2 人のコメンテーターからなるセミナーを開催した。（本報告書 61 頁参照） 梅垣千尋（青山学院女子短期大学）「ウルストンクラフトのフェミニズム：理性・徳・知識における平等」 板井広明（お茶の水女子大学 IGS）「ベンサム功利主義における女性・結婚・両性の平等」 土方直史（中央大学・名誉教授）　「1820 年代のイギリス・フェミニズムと功利主義」 山尾忠弘（慶應義塾大学・院）「J.S.ミルとウィリアム・トンプソン: リベラルフェミニズム概念の批判的再検討にむけて」 舩木惠子（武蔵大学）「ヴィクトリア時代の経済発展とフェミニズムの理論化」 討論者　：後藤浩子（法政大学）、小沢佳史（九州産業大学）

政治・思想とジェンダー　研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

「東アジアの越境的女性運動」研究

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【概要】

今日の女性運動は、路上や広場、公共交通機関、大学キャンパス、議場、ジャーナリズム、サイバー空間など、さまざまな場で実践され、課題解決に向けた国際的連帯とアクションを生み出している。本研究は東アジアにおけるそのような越境的女性運動の展開について考察するものである。具体的には（1）ILO「家事労働者のためのディーセント・ワークに関する条約」（第 189 号条約）に関連する労働運動、（2）反軍事化をめぐる女性たちの運動、（3）中国の女権主義者たちのトランスローカル/トランスナショナルな運動に目を向ける。

【研究内容・成果】	
論文	大橋史恵「『寄る辺のなさ』を越える―中国の都市社会に生きる農村女性たち」、川端浩平・安藤丈将編『サイレント・マジョリティとは誰か―フィールドから学ぶ地域社会学』、ナカニシヤ出版、2018 年。

（Ⅱ）生殖・身体とジェンダー

これからの日本社会の持続的な発展のためにも、女性の社会進出に期待がかかり、実際に様々な方面で活躍する女性が増えてきている。しかし、その一方で女性の初婚年齢や第一子の出産年齢が高くなり、それに伴って不妊治療を受けるカップルの数も急増している。第三者の精子や卵子を利用した不妊治療や代理出産を求めるカップルも年々増加傾向にあるが、日本産科婦人科学会によって実質禁止されている卵子提供や代理出産、またドナー不足のために調達が難しい精子を求めて、不妊カップルが外国へ渡る生殖医療ツーリズムも活発化しつつある。

生殖医療は、少子化問題とも相まって、近年では社会的にも注目され、その是非が議論の的となっている。「生殖とジェンダー」の分野では、生殖医療に関連するさまざまな問題に焦点を当て、倫理的・社会的側面、ならびにジェンダーの視点から研究をすすめてきた。特に 2018 年度は、人口政策と不妊治療支援の関係性や、精子や卵子のドナーの匿名性と生まれた子どもの出自を知る権利をめぐる問題、第三者のかかわる生殖補助技術で形成された家族に関する研究を中心に、プロジェクトに取り組んだ。

生殖・身体とジェンダー　研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

生殖医療とジェンダー

【研究担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【概要】

生殖医療の進歩はめざましく、第三者の精子や卵子、代理出産を利用した生殖医療技術の是非について、社会や専門家集団の間で検討が不十分なまま、一般社会での利用が広まっている。こうした状況は、産む性である女性たちに、より大きな影響を及ぼしている。本研究では、国内外を問わず、生殖医療の普及が女性たちに及ぼしている影響を明らかにする。

【研究内容・成果】	
IGS セミナー（生殖領域）の開催	10 月 29 日、金沢大学の日比野由利氏を招いて IGS 公開セミナーを開催。日比野氏からは『代理出産をめぐる世界の現状～商業的代理出産から利他的代理出産へ』と題して、アジアにおける生殖ツーリズムの状況について報告を受け、これについて参加者と議論を重ねた(本報告書 63 頁参照)。
IGS セミナー（生殖領域）の開催	11 月 16 日、大阪大学の小門穂氏を招いて、IGS 公開セミナーを開催。『フランスにおける LGBT と生殖医療および性別の表記変更』と題して、フランスの性的マイノリティーの人々に対する生殖医療の提供の状況について報告を受け、参加者と活発な議論を重ねた(本報告書 67 頁参照)。
白井千晶（静岡大学）主催の研究会への参加	12 月 5 日、インド工科大学の Anindita Majumdar 氏を招いての研究会に参加し、インドの代理出産についての情報提供を受け、日本の研究者からは、日本の代理出産や第三者のかかわる生殖補助医療に関連する状況を提供した。

生殖・身体とジェンダー　研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究

【研究担当者】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）
Yoon Jiso（韓国女性政策研究院研究員）

【概要】

日本も韓国も少子化の進行が社会問題となっているが、両国では生殖補助技術が少子化対策に利用されるようになってきている。本研究では、両国の政府が少子化対策として策定した不妊治療をサポートするためのプログラムや政策に焦点を当て、この不妊治療支援政策の効果、および少子化社会での社会的圧力による患者たちのストレスをジェンダー視点から検証する。

【研究内容・成果】	
論文の投稿準備	2017 年に IAFFE で報告した内容をベースに、2018 年度はジャーナルの投稿を試みたいが、まだ掲載とはなっていない。
研究交流	2018 年 3 月に国立台湾大学の Chia-Ling Wu 氏が調査のために IGS を訪れたのをきっかけに、2015 年にはじまった台湾の不妊治療支援事業と日本の最新の不妊治療支援事業の内容について、メール等で情報交換。また 9 月にはオーストラリアのシドニーで再会し、さらに情報交換した。
研究交流	9 月のオーストラリア調査時に 4 S コンファレンス（シドニー）に参加していた韓国の Ha Jung-Ok 氏(大韓民国近代歴史博物館)と会い、韓国の不妊治療支援の情報について提供してもらった。Ha 氏は韓国の不妊治療支援についての論文を数多く発表している。

生殖・身体とジェンダー　研究プロジェクト

科学研究費基盤研究Ｃ　（課題番号：18K00034）

諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究

【研究代表者】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【期間】2018～2020 年度

【概要】

日本の精子提供はこれまで匿名で実施されてきた。近年、卵子提供にも注目が集まる中、ドナーの匿名性の是非について議論される機会が増えると予測される。本研究は国内での議論に向けて、出生者の出自を知る権利を法で保障する国について、法制定までにどのような議論があったか、および法施行後の状況を明らかにするものである。

【研究内容・成果】	
オーストラリア調査	8 月下旬から 9 月上旬にかけて、オーストラリアのヴィクトリア州を訪れ、VARTA の Kate Bourne 氏、モナシュ大学の Karin Hammarberg 氏、スウィンバーン工科大学准教授の Deborah Dempsey 氏などから、Victoria 州で 2016 年から施行されている Assisted Reproductive Treatment Amendment Act 2016 (Vic)が承認されるまでの経緯や問題点を聞き取り調査した。また精子提供で生まれた当事者にも、この法律に関する考えをインタビューした。
文献収集	2019 年度に実施する予定の Norway 調査のための文献収集、および文献調査を実施中。

生殖・身体とジェンダー　研究プロジェクト

公益財団法人トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム（B）個人研究助成

生殖補助技術で形成される家族についての研究

【研究担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【期間】2017 年 5 月～2019 年 12 月

【概要】

近年、日本でも、生殖補助医療がますます一般化し、技術の需要も技術での出生児数も年々増加している。本研究では特に、第三者が介入する生殖技術で形成された家族について、国内外の家族へのインタビューを通して、家族の成り立ちを子どもたちとどのように共有し、家族関係を構築しているのかを探る。

【研究内容・成果】	
文献調査	オーストラリアの当事者に連絡をとり、紹介してもらった文献や Youtube を見ながら、研究を実施。
依頼講演	日本科学未来館公開セミナー『卵子提供・代理出産で家族をつくる』で、「提供精子・提供卵子でつくられた家族―ニュージーランド・イギリスの事例から」というタイトルで講演。（5 月 12 日、日本科学未来館。参加者約 40 名）
学会報告	第 30 回日本生命倫理学会年次大会　一般口演 V で「理想的な配偶子ドナーとはどのような人か――ニュージーランドと英国でのドナーへのインタビューから――」というタイトルで報告（2018 年 12 月 8 日-9 日、京都府立医科大学）
論文の投稿	第 30 回日本生命倫理学会年次大会で報告した内容をもとに、日本生命倫理学会の学会誌『生命倫理』に投稿中。
報告書の作成	2017 年に行った英国や日本でのインタビューデータをまとめ、報告書原稿を作成中。

生殖・身体とジェンダー　研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C　（課題番号：16K12111）

AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究

【研究代表者】清水清美（城西国際大学教授）

【研究分担者】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【期間】2016〜2018 年度

【概要】

日本では提供精子による人工授精が 60 年以上も実施され、精子提供者は匿名を原則としてきた。しかし諸外国では、子の福祉を考慮し、ドナーの匿名性を廃止する動きが広がっている。本研究は精子提供の利用や精子ドナーになることを検討している人が、出生者の出自を知る権利の保障の重要性を理解できるような情報を提供する資料の作成を最終目的とする。

【研究内容・成果】	
ニュージーランドの精子ドナーにインタビュー調査	2019 年 1 月東京医科大学がセミナー開催のために招聘したニュージーランドの精子ドナー、Gerard Dunne さんとミーティングを持ち、出自を知る権利についての意見を求める。
文献調査	教材作成のための諸外国の文献について、調査を実施。

（Ⅲ）経済・移動とジェンダー

「経済・移動とジェンダー」研究では、グローバル化の下での生産領域・再生産領域・金融領域のマクロな変容を見据えつつ、人びとの経済的営為や移動と滞留をめぐる主体的意識といったミクロ次元での変化、ローカルな法秩序や制度、人びとのネットワークといったメゾレベルでの変化がどのように起きているかをジェンダー視点から分析する。

2018 年度は「資本と身体のジェンダー分析」「新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー」の二つのプロジェクトの連携においてサスキア・サッセン氏を招いたワークショップを実施し、グローバル化の下での〈放逐〉をめぐって積極的な議論がおこなわれた。またマイグレーション・スタディーズの領域で研究をおこなう大橋史恵（IGS 准教授）と大野聖良（特任リサーチフェロー）がメンバーとして新たに加わったことをきっかけに、移動に関するさまざまな制度やネットワークについての新しい研究プロジェクトが複数立ち上げられた。

経済・移動とジェンダー　研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々

【研究担当】足立眞理子（IGS 客員研究員）

【メンバー】大橋史恵（IGS 准教授）、板井広明（IGS 特任講師）

【概要】

本プロジェクト「資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々」は、グローバル金融危機以降の資本の中枢機能の変化を分析する。サスキア・サッセンの「放逐 expulsions」概念に着目して、従来の身体の断片化や排除／包摂の概念では把握不能な「放逐」の「常態化」をジェンダー分析の視点から行う。

【研究内容・成果】	
IGS セミナー	2018 年 10 月 15 日（月）、IGS セミナー「フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション：サスキア・サッセンとの対話」（Globalization and Dislocation from Feminist Perspective: Dialogues with Saskia Sassen）を開催した。第 1 部は、サスキア・サッセン氏が「包摂、排除、放逐」のテーマにおいて講演をおこなった。第 2 部ではワークショップ形式をとって「サスキア・サッセンとの対話」を実施した。3 名のディスカッサント（堀芳枝（獨協大学）大野聖良（お茶の水女子大学）本山央子（お茶の水女子大学））による問題提起とサッセン氏からの応答を中核としたインテンシブな討論がおこなわれた(本報告書 79 頁参照)。なお、このセミナーは科研費プロジェクト「新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー」との共催によって実施された。
論文	足立眞理子「アベノミクスにおける金融緩和とジェンダー」フェミニスト経済学会『経済社会とジェンダー』(3)、pp. 43-57, 2018 年。 大橋史恵「『逃げ恥』考――再生産労働は『夫婦を超えてゆけ』るか」、『女性労働研究』(68)、pp.198－205, 2018 年。ほか

経済・移動とジェンダー　研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 B（課題番号：17H02247）

新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー：インド・フィリピン・中国の国際比較

【研究代表者】堀芳枝（獨協大学教授）

【研究分担者】大橋史恵（IGS 准教授）、足立眞理子（IGS 客員研究員）
長田華子（茨城大学准教授）、落合絵美（岐阜大学特任助教）

【期間】2017〜2019 年度

【概要】

本研究は 2000 年代に入ってフィリピン、インド、中国でサービス部門の国際分業として展開し始めているビジネス・プロセス・アウトソーシング（BPO）の国際資本移転の動向と女性の労働、社会変容についての国際比較をおこなう。最終的には新興アジアのサービス部門の国際分業論の構築をめざす。

【研究内容・成果】	
研究会	6 月 8 日（金）、7 月 20 日（金）、2 月 23 日（土）の 3 回、各国・地域の BPO 産業の状況について検討する研究会をおこなった。
IGS セミナー	10 月 15 日（月）セミナー「フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション：サスキア・サッセンとの対話」（Globalization and Dislocation from Feminist Perspective: Dialogues with Saskia Sassen）を共催した（前掲）。
論文	長田華子「作り手が報われる社会を目指して ： 安価な衣服の生産拠点バングラデシュの労働実態から」、『連合総研レポート』（336）pp.4-8, 2018 年。 落合絵美「経済成長と家族のはざまで生きる女性 ： シンガポールにおける高齢者福祉政策のジェンダー分析」フェミニスト経済学会『経済社会とジェンダー』（3）pp.121-135, 2018 年。ほか

経済・移動とジェンダー　研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

日比間の在留資格「興行」をめぐる言説編成の解明：入国管理のジェンダー分析を目指して

【研究担当】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）

【概要】

本研究は在留資格「興行」の制度化と規制を取り巻く日本とフィリピンの複数のアクターの言説に注目し、それらが移住女性のセクシュアリティをいかに規定しながら、女性たちの来日・就労の有様を形成してきたのかを明らかにするものである。このような考察を通じて、入国管理のジェンダー分析の理論構築を目指す。

【研究内容・成果】	
学会発表	日本移民学会 2018 年大会にて、「招聘業界における在留資格「興行」の問題構成. －招聘業界誌『入国ジャーナル』をてがかりに」を発表した（6 月 24 日南山大学）。
学会発表	27th International Association for Feminist Economics Annual Conference にて、“Gendered Immigration in Japan: Entertainment Visas Reconsidered” を発表した（6 月 19 日、米国）
ワークショップ講演	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院・東アジアメディア研究センター・メディア・ツーリズム研究センター・科研（C）「森崎和江の越境する連帯の思想」主催ワークショップ「森崎和江の越境する連帯の思想――『からゆきさん』の近代と現代」にて、「『ジャパゆきさん』とは誰か――日本の女性運動の視点から」というテーマで講演した（8 月 8 日北海道大学）
IGS セミナー開催	IGS セミナー「近代日本の女性の移動と再生産：「からゆきさん」の生涯をめぐって」を企画開催した。（2019 年 2 月 21 日）（本報告書 75 頁参照）。
海外調査の実施	フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学附属図書館のアーカイブセンターにて、エンターティナーとしての「出稼ぎ」に関する現地主要新聞・雑誌記事等の資料収集を 3 月・8 月に実施した。

経済・移動とジェンダー　研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 B（課題番号：17H02600）

日比間の人の移動における支援組織の役割：移住女性と JFC の経験に着目して

【研究代表者】小ケ谷千穂（フェリス女学院大学教授）

【研究分担者】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）、原めぐみ（和歌山工業高等専門学校助教）

【期間】2017～2019 年度

【概要】

過去 20 年以上にわたって、日比間の人の移動を大きく特徴づけてきた、在留資格「興行」での女性エンターティナーの流入と、その帰結としての日比国際児（Japanese Filipino Children：JFC）の誕生・成長、そして日本への新たな流入がみられる。本研究はこの一連の現象が日比双方の社会において「社会問題」視されてきた過程の中で、日比双方における支援組織がアクターとして果たしてきた役割について、複合的な視点から明らかにすることを目的とする。

【研究内容・成果】

学会発表	4th Philippines Studies Conference in Japan にて、“The Movement against “Entertainment Visas” by NGOs in the Philippines: Between Human Trafficking and Migration (Three Decades of Trajectory of Research and Action for Migrant Women and Japanese-Filipino Children)”を発表した（11 月 18 日、広島大学）
ワークショップ開催	NGO Maligaya House と共催で、「フィリピン・マリガヤハウス設立 20 周年記念会」を開催し、JFC のパネルディスカッションや人身取引問題に関するレクチャーを企画・実施した。
フィールドワーク実施	フィリピンを拠点とする NGO・DAWN と Maligaya House、日本を拠点とする JFC ネットワークにおいて、資料収集およびインタビュー調査、イベント参加を通じた参与観察を 3 月・8 月・12 月に実施した。

経済・移動とジェンダー　研究プロジェクト

国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））（課題番号：18KK0056）

グローバル性労働と人身取引の狭間にあるもの：聞き取りとネットワーク分析から

【研究代表者】青山薫（神戸大学教授）

【研究分担者】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）、熊田陽子（首都大学東京客員研究員）
中村文子（山形大学准教授）

【期間】2018～2022 年度

【概要】

本研究は、グローバル化がもたらした国境を越える性取引とは何かを、当事者の経験を通して、また、当事者と仲介者の接触を軸としたネットワークを通して明らかにすることをめざす。そのために本研究は、1）性取引に携り「脱法/不法就労者」とされる人々および人身取引対策等によって「被害者」とされる人々へのライフストーリー聞き取り調査、2）当事者と性風俗産業をつなぐ仲介者あるいは人身取引トラフィッカーの関係を中心とするネットワーク分析を行う。

【研究内容・成果】

文献調査等	次年度の調査準備として、文献調査とインタビュー調査設計を実施した。特に、次年度 4 月に実施するイギリス・ケンブリッジ大学、エセックス大学、サセックス大学での文献調査や研究者とのワークショップ開催に向けての準備を実施した。

経済・移動とジェンダー　研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K04196）

人身売買／取引をめぐる市民活動の変遷：ネットワーク再構築に向けて

【研究代表者】佐々木綾子（千葉大学講師）

【研究分担者】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）、島崎裕子（早稲田大学准教授）

【期間】2017〜2019 年度

【概要】

本研究は、「人身売買/取引」という現象が日本の市民活動にもたらした意義とその変遷を、同問題解決のための市民運動を担ってきた人々に焦点を当てて明らかにする。「人身売買/取引」をめぐる市民活動の求心力はどこにあり、それがどのように変遷したのかを考察することで、「人身売買/取引」概念を再考し、それに取り組むことのできる市民活動ネットワークを再構築することを研究の副次的目標とする。

【研究内容・成果】	
学会報告	国際ジェンダー学会 2018 年大会で、佐々木綾子氏と共に「日本におけるトラフィッキング概念の形成と運動の検討 ——アメリカとの比較から」を発表した（9 月 2 日聖心女子大学）。
インタビュー調査	人身取引の被害者支援に携わってきた民間シェルター（元）スタッフにインタビューを 2 月（栃木）・8 月（神奈川）で実施した。支援に携わるようになった経緯や支援活動における問題点や課題について意見交換を行った。

経済・移動とジェンダー　研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K02067）

現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容

【研究代表者】平野恵子（IGS 研究協力員）

【期間】2017～2020 年度

【概要】

本研究は、インドネシアにおける「移住・家事労働者」の変容を、移民政策および国内家事労働者の派遣形態の変化から検討する。今年度は、特にジャカルタ首都圏における新中間層台頭を受けた居住形態の変化と、それに伴う家事労働者の派遣形態の変化の現状を把握し、従来の住み込み型との権利保障の差異を考察する。

【研究内容・成果】	
論文掲載	平野恵子, 2018,「書評　安里和晃編『国際移動と親密圏――ケア・結婚・セックス』京都大学学術出版会、2018 年」『日本フェミニスト経済学会誌――経済社会とジェンダー』3: 137-9.
学会発表（国際）	国際フェミニスト経済学会（IAFFE）2018 年度大会において、インドネシアにおけるギグ・エコノミー型派遣家事労働の現状について報告した。 Hirano Keiko, 2018, “Gig-economy and domestic workers in Indonesia” The 27th International Association for Feminist Economics (IAFFE) 2018 Annual Conference at SUNY New Paltz (New Paltz, NY), Panel on Women’s initiative to policy and practice in empirical studies: in qualitative research in the field of labor, activity and support, Oral Presentation, 19th June 2018.
学会発表（国内）	日本フェミニスト経済学会（JAFFE）2018 年度大会において、インドネシア、ジャカルタ首都圏におけるギグ・エコノミー型家事労働者の派遣について、ジャカルタ首都圏の経済変容および都市化の観点から報告した。 平野恵子, 2018, 「ジャカルタ首都圏におけるギグ・エコノミーと家事労働者」日本フェミニスト経済学会 2018 年度大会於ウィングス京都、2018 年 7 月 7 日

経済・移動とジェンダー　研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K02051）

インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合

【研究代表者】中谷潤子（大阪産業大学准教授）

【研究分担者】平野恵子（IGS 研究協力員）、北村由美（京都大学准教授）

【期間】2017～2019 年度

【概要】

本研究は、インドネシア人移住労働者の再統合について、帰還後のライフステージ構築の過程を、本人や家族、コミュニティメンバーへの聞き取り調査をもとに明らかにする。分担者（平野）は特に、ジャカルタ首都圏における家事労働者組合で、移住家事労働を経験する組合員に帰還後の職業選択につき聞き取りをおこない上記課題を明らかにする。

【研究内容・成果】	
現地調査、研究会等	研究課題に基づき、ジャカルタ首都圏において現地調査を実施した。 年度末の 3/27 研究会にて、調査研究の進捗状況を各自報告するとともに、最終年度である次年度に国際学会 SEASIA にて報告予定の各々の原稿を検討した。 研究会翌日 3/28 には、講演者に長津一史氏（東洋大学）をお招きして、「海辺に住まうことの地域間比較――東北とインドネシアにおける津波経験と復興のかたち」と題した公開研究会を、代表者である中谷潤子氏の所属先（大阪産業大学）において開催し、帰還移民と地域研究の接合について考察する機会を得た。

▶ 2018 年度 外部資金獲得状況

国内外における競争的研究資金の高い獲得実績

国際的研究拠点形成のための共同研究や連携プロジェクトの実施のための研究資金は、ジェンダー研究所の研究基盤形成のために欠かせない。お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構や研究所の共通課題に加え、研究所所属の教員及び研究者は、独自に個別研究課題を設定し、多くの外部資金を獲得して研究活動を行っている。日本学術振興会科学研究費基盤研究 A「IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」（研究代表者：石井クンツ昌子）ほか多数の外部資金を得ており、2018 年は新規採択が 3 件あった。海外の研究資金により国際共同研究にも積極的に参加している。韓国研究財団による一般共同研究「議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」（研究分担者：申琪榮）は、ジェンダー研究所の研究プロジェクトと共同研究を進めるために韓国で獲得したものである。

2018 年度の新たな実績を具体的に見ると、国内最大の科学研究支援機構、日本学術振興会（JSPS）の研究助成による新規採択が 3 件あった。科学研究費基盤研究 B（課題番号：18H00817）「女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査」（研究分担者：申キヨン）、科学研究費基盤研究 C（課題番号：18K00034）「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」（研究代表者：仙波由加里）、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））（課題番号：18KK0056）「グローバル性労働と人身取引の狭間にあるもの：聞き取りとネットワーク分析から」（研究分担者：大野聖良）である。

継続採択として、研究所教員等研究者が研究代表を務める課題として、科学研究費基盤研究 A（課題番号：26242004）「IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」（研究代表者：石井クンツ昌子）、基盤研究 C（課題番号：17K02067）「現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容」（研究代表者：平野恵子）、公益財団法人トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム（B）個人研究助成「生殖補助技術で形成される家族についての研究」（研究代表者：仙波由加里）がある。そのほか、基盤研究 B（課題番号：17H02247）「新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー　インド・フィリピン・中国の国際比較」（研究分担者：大橋史恵、足立眞理子）、基盤研究 C（課題番号：16K12111）「AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究」（研究分担者：仙波由加里）、基盤研究 B（課題番号：17H02600）「日比間の人の移動における支援組織の役割：移住女性と JFC の経験に着目して」（研究分担者：大野聖良）、基盤研究 C（課題番号：17K04196）「人身売買／取引をめぐる市民活動の変遷：ネットワーク再構築に向けて」（研究分担者：大野聖良）、基盤研究 C（課題番号：17K02051）「インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合」（研究分担者・平野恵子）には、研究所メンバーが 2018 年度も研究分担者として参加した。

外部資金の獲得は、研究所が質の高い研究を行うために欠かせないが、単なる研究資金を調達すること以上の意味を持つ。競争的資金への挑戦は、研究所のメンバーらが各自専門領域で優れた成果を目指す動機を付与するとともに、分担者として研究所共通のプロジェクトや国内外の研究ネットワークに参加し、先端研究者らとの交流を進める機会を提供する。

総じて、今年度研究所構成メンバーによる優れた外部資金獲得状況は、そのような好循環に基づき、研究所の研究活動が高く評価された結果と捉え、来年度につなげたい。

競争的外部資金による研究プロジェクト一覧

プロジェクト名称	期間（年度）	担当
科学研究費基盤研究 A（課題番号：26242004） IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から	2014～2018	石井
科学研究費基盤研究 B（課題番号：17H02247） 新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー　インド・フィリピン・中国の国際比較	2017～2019	大橋 足立 （分担者）
科学研究費基盤研究 B（課題番号：18H00817） 女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査	2018～2020	申 （分担者）
科学研究費基盤研究 C（課題番号：18K00034） 諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究	2018～2020	仙波
公益財団法人トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム（B）個人研究助成 生殖補助技術で形成される家族についての研究	2017～2019	仙波
科学研究費基盤研究 C（課題番号：16K12111） AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究	2016～2018	仙波 （分担者）
科学研究費基盤研究 B（課題番号：17H02600） 日比間の人の移動における支援組織の役割：移住女性と JFC の経験に着目して	2017～2019	大野 （分担者）
国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））（課題番号：18KK0056） グローバル性労働と人身取引の狭間にあるもの：聞き取りとネットワーク分析から	2018～2022	大野 （分担者）
科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K04196） 人身売買／取引をめぐる市民活動の変遷：ネットワーク再構築に向けて	2017～2019	大野 （分担者）
科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K02067） 現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容	2017～2020	平野
科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K02051） インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合	2017～2019	平野 （分担者）
Social Science Korea East Asian International Relations Theory	2015～2018	申 （分担者）
韓国研究財団　一般共同研究（課題番号：NRF-2016926559） 議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析	2016～2018	申 （分担者）

▶学会等活動一覧

石井クンツ昌子（所長）

日本家族社会学会（会長）、日本学術会議／連携会員／統計データアーカイブ分科会（会長）／ウェブ調査の課題に関する検討分科会（幹事）、日本社会学会（理事）／社会学教育委員会（副委員長）／国際発信強化特別委員会、日本家政学会家族関係部会（役員）、福井県男女共同参画審議会（会長）、National Council on Family Relations

申琪榮（准教授）

International Political Science Association、American Political Science Association、European Conference on Gender and Politics、International Feminist Economics Association、日本政治学会（分野別研究会「ジェンダーと政治研究会」）、日本フェミニスト経済学会、日本社会政策学会、ソウル大学日本研究所『日本批評』海外編集委員、韓国ジェンダー政治研究所理事・研究委員、ソウル大学（Social Science Korea）東アジア地域秩序研究会共同研究員、日本比較政治学会（編集委員）、「女性・戦争・人権」学会、European Association for Japanese Studies

大橋史恵（准教授）

International Association for Feminist Economics、日本社会学会、関東社会学会、日本フェミニスト経済学会（幹事会役員）、ジェンダー史学会（常任理事）、現代中国学会

板井広明（特任講師）

経済学史学会（幹事、編集委員、編集委員会事務局）、日本イギリス哲学会、社会思想史学会、政治思想学会、日本フェミニスト経済学会（幹事）、日本有機農業学会、経済理論学会（分野別ジェンダー分科会コアメンバー）

仙波由加里（特任 RF）

日本医学哲学・倫理学会（国際誌編集委員）、日本生命倫理学会（評議委員）、日本生殖看護学会、European Society of Human Reproduction and Embryology (ESHRE)

大野聖良（特任 RF）

国際ジェンダー学会（評議員・編集委員）、日本女性学会、ジェンダー法学会、日本フェミニスト経済学会、国際政治学会、日本移民学会

3. 国際シンポジウム・セミナー

2018 年度 国際シンポジウム・セミナー概要

主催国際シンポジウム詳細

グローバル女性リーダー育成研究機構主催国際シンポジウム詳細

主催 IGS セミナー詳細

共催 IGS セミナー詳細

主催 IGS 研究会詳細

協力シンポジウム

▶ 2018 年度 国際シンポジウム・セミナー概要

専門性の高い学際的なイベントを広く一般に公開

2018 年度も、IGS では精力的にシンポジウム、セミナーを開催した。シンポジウムではアラブ世界の女性規範と女性の政治的代表性を中心に多彩な登壇者を迎えた。2 回に及ぶグローバルリーダーシップ研究所との合同シンポでは、政治領域における女性リーダーの在りようと、グローバルな世界でのあるべき女性リーダー像をめぐって議論が行なわれた。セミナーでは、招聘教授によるバトラーの社会理論や舞子の表象文化について、生殖領域シリーズのセミナーでは代理出産や LGBT と生殖補助医療について、専門性の高い報告が行なわれた。「ジェンダーと政治」シリーズでは、歴史修正主義、近代日本のファッション史における洋裁文化、トランスジェンダーと性同一性障害を取り上げたセミナーがあり、7 人の登壇者によるブリテンのフェミニズム再考、からゆきさんに関する歴史的考察といったセミナーもあり、学内外から多くの参加者を集めた。男女共同参画社会の実現に資する本研究所の事業はしっかりと社会的貢献が出来たと実感している。国際シンポジウムや理論・歴史・実証の諸分野にまたがるセミナー企画は、国内外の研究ネットワークの構築とジェンダー研究の発展に確実に貢献しているといえる。

IGS 主催 国際シンポジウム

	イベント名	参照
	国際シンポジウム（特別招聘教授プロジェクト） アラブ世界の女性と逸脱：グッドとバッドの境界で Arab Women and Transgression: At the Boundary of Good and Bad	45 頁
	国際シンポジウム（特別招聘教授プロジェクト） 議員になれるのは誰なのか？：フランスの政治と議会史からみる立法府のジェンダー化 Who can be a Representative? Engendering Legislative Bodies: Lessons from the French Historical and Political Context	48 頁

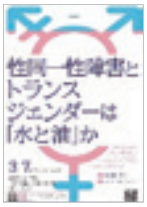
グローバル女性リーダー育成研究機構主催 国際シンポジウム

	イベント名	参照
	国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同） 女性政治リーダーはいかにして「育つ」か？ Promoting Future Women Leaders in Politics	51 頁
	国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同） ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像 Women’s Global Leadership from Gender Perspectives	54 頁

IGS 主催 IGS セミナー

	イベント名	参照
	IGS セミナー（東アジアにおけるジェンダーと政治研究プロジェクト①） 合評会：倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー：90 年代保守言説のメディア文化』	57 頁
	IGS セミナー（東アジアにおけるジェンダーと政治研究プロジェクト②） 近代日本のファッション文化を再考する：女性・近代化・対抗文化	59 頁
	IGS セミナー ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考	61 頁
	IGS セミナー（生殖領域シリーズ 1） 代理出産をめぐる世界の現状：商業的代理出産から利他的代理出産へ 〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕	63 頁
	IGS 英語セミナー（東アジアにおけるジェンダーと政治研究プロジェクト③） Geo-politics Security and Women’s Body （地政学、安全保障、女性の身体）	65 頁
	IGS セミナー（生殖領域シリーズ 2） フランスにおける LGBT と生殖医療、および性別の表記変更 〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕	67 頁
	IGS 英語セミナー（特別招聘教授プロジェクト） Bodies, Collective Action and Democracy Engaging with Judith Butler’s Work （主体、社会運動、民主主義：ジュディス・バトラーによる理論構築の検討）	69 頁
	IGS 英語セミナー（特別招聘教授プロジェクト） Millennial Maiko The Geisha Apprentice in Japanese Popular Culture （ミレニアル舞妓さん：日本のポピュラーカルチャーにおける舞妓像）	71 頁

IGS 主催 IGS セミナー

	イベント名	参照
	IGS セミナー フランス啓蒙の女性論	73 頁
	IGS セミナー 近代日本の女性の移動と再生産：「からゆきさん」の生涯をめぐって	75 頁
	IGS セミナー 性同一性障害とトランスジェンダーは「水と油」か	77 頁

IGS 共催 IGS セミナー

	イベント名	参照
	IGS 共催セミナー Globalization and Dislocation from Feminist Perspective Dialogues with Saskia Sassen （フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション：サスキア・サッセンとの対話）	79 頁

IGS 主催 IGS 研究会

イベント名	参照
IGS 研究協力員　研究報告会	82 頁
ノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターとの研究会	84 頁

IGS 協力 シンポジウム

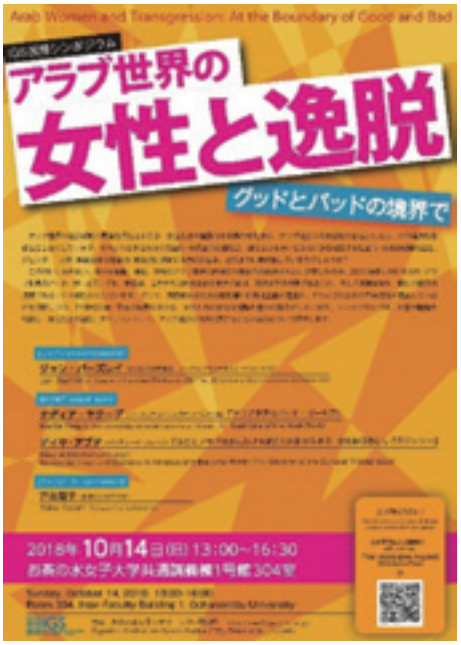
	イベント名	参照
	シンポジウム 育児期親子の IT とソーシャルメディア活用：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較	85 頁

▶ 2018 年度 主催国際シンポジウム詳細

IGS 国際シンポジウム（特別招聘教授プロジェクト）

アラブ世界の女性と逸脱

グッドとバッドの境界で



【日時】2018 年 10 月 14 日（日）13:00〜16:30

【会場】共通講義棟 1 号館 304

【コーディネーター／司会】
ジャン・バーズレイ（IGS 特別招聘教授／ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）

【趣旨説明】
ジャン・バーズレイ
「日本のバッド・ガールズ：逸脱とリーダーシップ」

【研究報告】
ナディア・ヤクーブ（ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）
「アラブ世界のバッド・ガールズ」
ディヤ・アブド（ギルフォード大学准教授）
「米国とアラブ社会における愛情と逸脱を生きる：文化越境者としてのジレンマ」

【コメンテーター】
戸谷陽子（お茶の水女子大学教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】59 名

【趣旨】

アラブ世界の社会規範に異議を唱えるような女性たちの逸脱的な言動や考え方は、アラブ社会に不安感を引き起こしたり、公的議論を巻き起こしている。そのような女性たちの意図的・非意図的な逸脱は、適切なふるまいとはなにかを規定する社会的・文化的規範構造と、ジェンダー・人種・階級区分を社会的・政治的に統制する力の存在を、どのように暴き出しているのか？ 国際的な社会文化的影響も考慮しつつ、女性たちの逸脱、アイデンティティ、アラブ社会の内外に属することの政治について探求する。

【開催報告】

本シンポジウムの基調報告は、2017 年に刊行された『Bad Girls of the Arab World』に基づいている。本書は、バーズレイ氏の共編著書『Bad Girls of Japan』（2005 年）に触発されての企画である。バーズレイ氏による趣旨説明では、その社会のジェンダー規範に基づく「グッド」の定義が、女性たちのクリエ

イティビティに限界を設定してしまうが、「グッド・ガール」の定義からあえて逸脱することを選んだ「バッド・ガール」たちが、女性たちによる新しい創作表現を生み出してきたとの解説がなされた。

ナディア・ヤクーブ氏の報告「アラブ世界のバッド・ガールズ」は、アラブ社会の女性たちの「逸脱」が、個々の女性たちにとって、彼女たちが所属する社会の人々にとって、そしてそれを目にする西洋社会の人々にとって、何を意味するかの広範な分析であった。自らの裸体を写真作品として発表した女性アーティストは、女性に身体を覆い隠すことを要求する社会規範への挑戦を、そのような逸脱によって表現した。その一方で、デモに参加し兵士から暴力を受けたある女性のイメージは、本人の希望や選択をよそに、活動家の女性たちからヒーロー像として利用され、ジェンダーと暴力に関する議論のきっかけを作ることになった。反イスラム傾向のある西洋社会では、これらのイメージは一絡げにされて、アラブ社会の家父長制構造への抵抗という、極端に単純な解釈で受け止められた。デジタルメディアの発達は、女性たちによる新しい表現を、アラブ社会全体、そして国境をこえてグローバルに広めることを可能にし、かつ、多種多様な解釈や議論を生み出している。

それらの解釈や議論からは、逸脱の基準は固定的でも明確でもないことがわかる。基本的には規範を作り出しているのは社会である。しかし、その社会を構成する個々人がある行為を逸脱とみなすかどうかは、個人間、共同体間などの動的な相互作用が影響する。例えば、男性だけが女性の逸脱を定義するわけではなく、女性がその境界の線引きをすることもあり、また、西洋のフェミニズムについての学びが、それに変化をもたらすこともある。逸脱は、時には、抵抗や挑戦を意図するものでは全くなく、生き残りの手段として選択されることもある。女性の行為、行動、表現が厳しく規制されることは、人権侵害として国際的な非難の対象となる。しかし、だからとって、アラブ社会の女性たちが、自分自身をアラブの文化的構造の被害者とみられることを良しとしている訳ではない。逸脱の多様な形態を検証することで見えてくるのは、伝統の継承と新しい変化が共存する社会の中で、独創的な試みや挑戦を続ける女性たちの営みのありようなのだ。

ディヤ・アブド氏の報告「米国とアラブ社会における愛情と逸脱を生きる：文化越境者としてのジレンマ」は、ディヤ自身の逸脱の経験の物語である。パレスチナ出身で米国で教育を受けたディヤは、9.11の同時多発テロ以降、米国に住むフェミニストであることと、アラブ・イスラム社会への帰属意識を持つことの折り合いをつけることに困難を感じるようになったという。いずれの文化圏においても「逸脱」

した存在になってしまうのだ。その後、ヨルダンの大学に就職した際も、大学の学長や学科長が一番気にしているのは彼女の服装の適切さであった、執筆した論文が反イスラムとみなされた、といった経験をした。ヨルダンでも同じく、意図した訳ではないのに「逸脱」のレッテルを貼られることになったのだ。ギルフォード・カレッジに移ってからは、それなりの心地よさは感じながらも、米国社会への適応の困難を引きずり続けた。

ディヤが難民支援プロジェクト「すべてのキャンパスに難民を」をスタートしたのは、地中海で溺れる幼いシリア難民の姿が世界中で報道された 2015 年である。アラビアでキャンパスを意味する単語には「避難所」の意味もあることから、大学キャンパスというコミュニティで難民を受け入れることを思いついた。グリーンズボロでは、これまでに、シリア、イラク、ウガンダ、コンゴ民主共和国から 42 名の難民を受け入れ、定住のサポートをしているという。ディヤにとって、この活動は、自分が帰属する異なる 2 つの社会、米国とアラブ社会を自らの手でつなぐプロジェクトにもなった。ディヤは、仕事や子育てなどの日々の営み、そして「すべてのキャンパスに難民を」の活動を通して、ようやく、どの社会においても「グッド」であることの不可能さを受け入れられるようになったという。それは、いつも完璧な「良い娘」でいなくてはいけないというプレッシャーからの解放であり、「逸脱」の罪悪感からの解放なのだ。

ふたつの報告に続く戸谷陽子氏のコメントは、米国の演劇とパフォーマンスを研究する視点から述べられた。1960 年代の米国のフェミニズム運動のスローガンは「個人的なことは政治的なこと」であり、「ハーストーリー」が語られること、伝えられることが重要視された。その流れの中で生み出された、女性アーティストたちが自身の裸体をさらす作品は、ハーストーリーの語りであると同時に、「バッド・ガール」による行為として、文化的規範を撹乱する役割を果たした。創作行為は男性のものであり、女性の身体は男性の欲望に応じる「美しい」ものであるべきとする人びとからの、批判を浴びたのである。ヤクーブ氏が紹介したアラブ社会の女性たちの表現は、これに続くものである。しかし、21 世紀の現代、「ポストポストコロニアル」な社会環境や、技術革新がもたらした情報のトランスナショナルな拡散などを考慮すると、アラブ社会の女性たちの「ハーストーリー」の発信と受容の状況はより複雑になっているといえる。アブド氏のハーストーリーの背景には、そのグローバルな情報や人の移動がある。海外から自国文化を見直すことには、客観的な視点の獲得という利点があるが、異なるふたつの文化を生きる主体にとっては、相反する「グッド」の価値観の折り合いをどう付けたらよいかのジレンマをもたらすことになる。戸谷氏は、このような葛藤の経験は、ふたつの文化の立場や考え方の相違を深く理解することにつながると指摘し、そうした経験を持ったアブド氏のハーストーリーが、米国の高等教育の実践に活かされていることには、大きな意義があると述べた。

これに続く質疑応答では、#Mee too 運動の日本における盛り上がりがさほどでなかった点や、セクハラや痴漢被害の女性が声を上げたり、被害者の状況への理解を得たりすることが難しいという現状についての意見交換がなされた。そうした状況は、男女の力の差を容認する社会構造によりもたらされているが、その改革を目指す上での大学の役割について言及もあった。女性の高等教育への進学についてはもとより、その教室や、本シンポジウムのような一般公開の議論の場で、文化表象におけるジェンダーバイヤスを分析する視点を育むことは、日本やヨルダン、米国に限らず、いずれの文化圏においても重要である。活発な討論の様子から、今日この場での議論が、学内外から参集した参加者にとって、価値ある学びの機会であったことを確信している。

記録担当：吉原公美（ジェンダー研究所特任リサーチフェロー）

IGS 国際シンポジウム（特別招聘教授プロジェクト）

議員になれるのは誰なのか？

フランスの政治と議会史からみる立法府のジェンダー化

【日時】2019 年 1 月 21 日（月）18:15〜20:20

【会場】人間文化創成科学研究科棟 604

【コーディネーター】
デルフィーヌ・ガルディ（IGS 特別招聘教授／ジュネーブ大学教授）

【司会】申琪榮（IGS 准教授）

【研究報告】
エレオノール・レピナール（ローザンヌ大学准教授）
「代表性のジェンダー化とは？：ジェンダー・クオータの可能性を評価する」
デルフィーヌ・ガルディ
「議会の文化とジェンダー化の秩序：フランス国会史研究に基づく比較分析」

【コメンテーター】
三浦まり（上智大学教授）
村上彩佳（日本学術振興会特別研究員 PD／上智大学）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳）

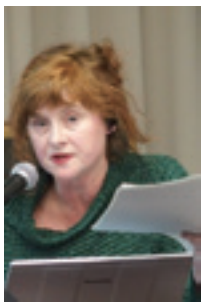
【参加者数】49 名

【趣旨】

ヨーロッパの近代国家は、市民に選ばれた代表が統治する議会制民主主義という政治システムを生み出した。しかし、市民に選ばれる「代表」とは誰なのか？ なぜ女性は民主主義の象徴である「代表」から事実上排除されてきたのか？ 20 世紀末から議会に女性を増やすために導入されたクオータ制度はヨーロッパ議会を脱男性化することに成功したのか？ ヨーロッパ議会の歴史とクオータをめぐる議論から探る。

【開催報告】

2019 年 1 月 21 日（月）、お茶の水女子大学にて、国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか？：フランスの政治と議会史からみる立法府のジェンダー化」が開催された。本シンポジウムは、デルフィーヌ・ガルディ特別招聘教授の企画によるものである。基調報告には、スイス・ローザンヌ大学のエレオノール・レピナール准教授に加えて、ガルディ氏も登壇。コメンテーターには、三浦まり上智大学教授と村上彩佳日本学術振興会特別研究員（PD）を迎え、司会はジェンダー研究所の申琪榮准教授が務めた。議会政治への女性の参加について、フランスの事例を中心に議論が交わされた。



18 世紀末の革命後から発展を続けるフランスの共和政は、普遍的な個人の人権と平等を基本としているにもかかわらず、20 世紀半ばに女性の普通選挙権を認めるまでに 150 年を要した。ガルディ氏の研究報告は、その歴史的経緯と、女性の排除を可能にさせている「普遍性」の原理の矛盾、排除の構造がドレスコードや建物の構造、ジェンダーによる役割分担など、可視化された区分で永らえてきたことを分析している。

普遍的な個人という抽象概念は、ジェンダーによる差別をしない平等性の高い理念ではある。しかし、そこですでに平等が規定されていることを前提に、実態として存在する具体的な男女差別の是正が否定されるというパラドックスを内包している。平等であるはずなのに、政治の場に参加するという権利は、共和政初期から男性だけに限られた権利であり、女性は、長らく、議場への立ち入りが許されていなかった。一般傍聴席への入場は可能だったが、女性が就くことのできた国会での仕事は、洗濯や裁縫の職であった。初の女性議員の誕生は 1945 年。本会議場での速記係への就職が認められるようになったのは 1972 年。議場内で儀式の進行を補佐する廷吏の役を女性が務められるようになったのは 1990 年代初頭のことである。儀式や規則、慣例などの非公式なルールなどにより、排除の構造が文化として維持されてきたのである。国会におけるドレスコードはその一例である。2012 年、地域間平等・住宅大臣のセシル・デュフロ氏は、議会で答弁に立った際に花柄のワンピースを着ていたことで非難された。歴史を遡ると、1897 年に、スーツの上に労働者が着る青い上着を着用した労働者階級出身の議員が議場から退去させられたという事例もある。いずれも、スーツを着る男性を「正統」とし、そこから外れる行為や「身体」を除外しようとする議会文化の表れと言える。

レピナール氏の報告の主題は、ジェンダー・クオータ制度である。ヨーロッパ 13 カ国を比較して、ジェンダー平等実現におけるクオータ制の可能性を検証し、また、フランスにおいて、クオータ推進に活用されたパリテ（均等）という概念について、批判的な分析がなされた。

ジェンダー・クオータ制が機能するか否かは、その国の社会政治的背景により異なっており、4 つの分類が示された。北欧諸国では、ジェンダー・クオータ制度の発達以前から社会的平等という価値観が高く、女性の社会進出や政治参画も進んでいたことから、クオータ制はあくまでも「補助的」施策である。フランス、ベルギー、スロベニア、スペインでは、同様に女性の社会進出が進んでいるといえるが、政治面での存在感は薄い。クオータ制は、ジェンダー規範を改めるための「変革的」戦略として、トップダウンで政策導入され、政治以外の領域へも拡大している。保守的な傾向があるイタリア、ギリシャ、ポルトガル、ポーランドでは、クオータを「象徴的」に導入してはいるものの、その推進に本腰を入れてはいない。同じく保守傾向が強く男性稼ぎ手モデル社会のドイツとオーストリアは、政治面のクオータ導入は政党に任せているが、行政機関へはトップダウン式で実施をしている。着実な進捗はあるものの急進的な変化は目指さず、クオータを「矯正的」なツールとして利用している。こうした違いをもたらす原因には、国の機関にいる男性エリートによる抵抗がどの程度であるかや、その国の女性運動の強弱がある。

「パリテ」は、議会の議員の男女比率を均等にすることを定める制度である。これによって、フランスは、憲法などで形式的に定められていた男女の平等を、「均等に存在する」という形に可視化して実現することに成功したといえる。前述したように、フランスの普遍主義は、ジェンダー・クオータ導入への反対の論拠となった。パリテの概念は、その普遍の定義に、「男女が均等に存在することは普遍」であると加えて、クオータを正当化させるものであった。大統領直下に設置された女性政策機関による、トップダウンの推進施策は効果を発揮し、クオータは、政治代表性に限らず、民間企業や大学、労働組合や産業組合などの意思決定機関に至る広がりをみせている。その一方で、平等が数の問題に限定されてしまった面があることも否定できない。また、男女の均等に集中した議論が行われたため、階級や人種による社会排除の課題は置き去りにされてしまった。そして、パリテの唱導者たちが目指したジェンダー規範の変革が、本当に実現したのかどうかが明らかになるのは、まだ先のことである。

三浦まり氏のコメントでは、まず、「政治分野における男女共同参画推進法」が制定されて間もない日本の状況についての説明がなされた。現時点での日本の国会の女性議員比率は 10%であり、これは、パリテ導入直前のフランスの値とほぼ同じである。フランスにおける 20 年間の歩みは、日本はこれから何をしなくてはいけないかを示唆してくれている。レピナール氏が示した 4 つの分類を応用すると、日本における同法の制定は「象徴的」なものに近く、その成立を可能にした要因のひとつは、強制力を持たせなかったことにある。これにいかに実効力を持たせて行くかは、大きな課題である。三浦氏自身、パリテの概念に刺激を受け、これを民主主義の原則として位置付けることを提唱しているという。社会は男女半々なのだから、意思決定をする機関も男女半々で構成されるべき、という論理に納得する人は多い。しかし、それが当たり前のこととして社会に浸透するまでには、まだ多くの努力が必要であろう。

議会が女性の「身体」を排除する例は、日本でもみられている。2017 年の熊本議会で、乳児を連れて本議会に出席しようとした議員が排除された件は記憶に新しい。また、現在の国会には保育園もあるが、昔は女性トイレが整備されていなかった。日本の国会のドレスコードはジャケットと議員バッジの着用であるが、これは比較的ジェンダー中立な規範であるといえる。

これに続く村上彩佳氏のコメントでは、フランス共和国の理念を象徴する女性像「マリアンヌ」の存在についての疑問が提示された。フランスのどの議会にも、このマリアンヌの像が据えられているが、女性を排除する構造を持ちながら、女性の像を象徴として抱くということに「トラブル」はなかったのであろうかとの指摘である。また、パリテが、新たなジェンダー分業を生み出している可能性も示唆された。フランス県議会選挙では、男女のペアを 1 組の候補として当落が争われる。その選挙運動での主張をみると、女性候補はケアについて、男性候補は経済についての政策をアピールするといった役割分担がされているようである。男女の補完性のイメージが強調されるようなこの状況についての疑義が示された。

終了時間を延長して質疑応答が進められ、充実した議論が持たれた。また、平日夕刻の開催にもかかわらず、学外からの参加者も多く、女性の政治参画という課題への関心の高さが伺われた。

記録担当：吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）

▶ 2018 年度グローバル女性リーダー育成研究機構主催国際シンポジウム詳細

国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同）

女性政治リーダーはいかにして「育つ」か？

【日時】2018 年 6 月 30 日（土）13:30〜17:00

【会場】講堂（徽音堂）

【基調講演者】
野田聖子（総務大臣、女性活躍担当大臣、内閣府特命担当大臣、衆議院議員）
陳善美（韓国国会議員、弁護士）

【パネリスト】
円より子（元参議院議員　女性のための政治スクール校長）
ヨハンナ・ウッカマン（独・社会民主党常任理事、元党青年局全国代表）
陳善美（韓国国会議員、弁護士）

【パネル司会】
申琪榮（IGS 准教授）

【総合司会】
大木直子（グローバルリーダーシップ研究所特任講師）

【主催】グローバル女性リーダー育成研究機構　グローバルリーダーシップ研究所　ジェンダー研究所

【言語】日韓英（同時通訳）

【参加者数】451 名

【趣旨】

女性の政治リーダー育成は、日本に限らず世界各国・地域で大きな課題となっている。高校生や大学生を含む若い世代の政治参加を促し、その中からリーダーとなる人材を育成することは、解決の一手となるだろう。本シンポジウムの第 1 部の基調講演では、日本と韓国の現職国会議員から、女性政治家としての現在に至るまでのキャリアパスについて伺う。第 2 部では、日本における女性政治リーダー育成の実績とこれからの課題、ドイツの政党における若手リーダーシップ育成などについて、パネリストから報告を受け、政治分野における女性リーダー育成の課題について議論する。

【開催報告】

2018 年 6 月 30 日（土）、お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構主催による国際シンポジウム「女性政治リーダーはいかにして『育つ』か？」が開催された。ジェンダー研究所（IGS）とグローバルリーダーシップ研究所（IGL）は、2015（平成 27）年の改組により新設された本機構下に設置されて以来、それぞれが主催するシンポジウムやセミナー、研究会への相互参加や協力、日常的な情

報交換などの形での協働を続けてきた。その協働関係をさらに深化させ、両研究所のこれまでの事業成果が交差する企画を実現させる目的で、本シンポジウムの準備は進められてきた。

世界経済フォーラムが毎年発表している「グローバル・ジェンダー・ギャップ・レポート」が明示するとおり、女性の政治参画の推進は、世界各国において重要な課題となっている。草の根レベルで女性たちの政治に対する関心を高めることと合わせて、特に取り組みが必要とされているのは、国会および地方議会議員の女性割合の増加、すなわち女性政治リーダーの増加である。関連テーマの研究に取り組んでいる研究者が両研究所に所属していること、本学が女性リーダー育成をミッションとしていること、そして女性の政治参画の推進が喫緊の社会課題であることを総合し、シンポジウムの主題は「女性政治リーダー」に決定された。そして、カレン・シャイア IGL 特別招聘教授（ドイツ デュースブルク・エッセン大学教授）、申琪榮 IGS 准教授、大木直子 IGL 特任講師の尽力により、国内外から、現役閣僚、国会議員、政党幹部、女性政治家育成スクール代表らをゲストスピーカーとして招聘し、また、本学講堂（徽音堂）に 400 名を超える聴衆を集めて、充実した内容のシンポジウムを開催することができた。

野田聖子氏（総務大臣、女性活躍・男女共同参画担当大臣・衆議院議員）の講演では、冒頭で、女性活躍・男女共同参画担当大臣に志願した動機が述べられた。「女性活躍」は以前から政策としてうたわれてはいるものの、「輝く」というようなイメージ作りばかりが前面に出され、十分な実効性のある政策が立案実施されていなかった。男性中心の世界である国会で 25 年間議員を続けて来た、女性議員としての経験を生かしてこの問題に取り組みたい、という気持ちがあっての大臣就任だという。衆議院の女性議員割合は 10%と低い水準である。状況打開のためには、まず女性たちが、女性議員が少ない事により不利益をこうむっていると理解することが重要と指摘された。また、地方議会においては、人口規模が小さくなるほど女性議員割合が低くなる傾向があり、市町村レベルのより身近であるはずの政治からも、女性は遠ざけられている。2018 年 5 月の「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律」の成立は、野田氏をはじめとする超党派の国会議員による、3 年に渡る議論と立案努力の成果である。この法の成立が、女性たちが女性議員を応援したり、または自ら立候補しようという行動のきっかけになればという期待が述べられた。

続いて登壇した陳善美氏（韓国国会議員）からは、弁護士から政治家への転身の経緯、韓国における女性の政治参画の状況とジェンダー・クオータ制度の説明、そして女性政治家増員のための提言が述べられた。韓国の国会議員の女性割合は 17%であり、日本よりは高いものの、世界平均の 23.8%には及ば

ず、世界順位でも低いレベルに留まっている。世界各国で、ジェンダー・クオータ制が女性議員増加の成果をもたらしていることから、韓国でも 2000 年にクオータ制を導入している。法改正を重ね、現在は国会議員選挙の比例代表候補の 50%、そしてその名簿の奇数番号を女性にするという義務規定があるものの、女性議員数の伸びは芳しくない。その原因としては、全議席数に対する比例代表議席数が 2 割未満と低いこと、義務規定に強制力がないこと、比例選出女性議員が再選されて政治家キャリアを継続するチャンスが限られていることが挙げられた。課題解決の方法として特に強調されたのは、人材育成の重要性、特に政党が積極的に人材発掘、教育、登用に取り組むことと、女性政治家たちのネットワーク形成の重要性であった。長期的な視点を持って社会変化の実現を目指すことが必要との指摘で、講演は締めくくられた。

第 2 部のパネルディスカッションは、女性政治家育成の実践が論題となった。円より子氏（女性のための政治スクール校長、元参議院議員）の報告では、女性が政治の世界に入ること、選挙に立候補することの困難が述べられた。未だに性別役割分業の意識が根強い日本社会では、政治は女性の仕事とは思われておらず、そのため、政治家として有望と思われる女性に立候補を勧めても、まずは家族から反対される。校長を務める女性のための政治スクールでは、政治教育やディベートなどのスキルのトレーニング、ネットワーク構築などに取り組んで、女性の政治参画推進の成果をあげているが、やはり、女性議員増加の障害となっている選挙制度の見直しや、議員としての仕事と育児の両立が可能になるような議会運営の見直しを含めた、制度的、社会的変化が必要であるとのことである。

ヨハンナ・ウッカマン氏（ドイツ社会民主党常任理事）の報告では、2005 年に女性首相を誕生させているドイツの政治界においても、いまだに女性を軽視する傾向が続いていることが示されたうえで、ドイツ社会民主党が取り組む女性政治家育成プログラムが紹介された。特に強調されたのは、女性たちが持続的に政治に関与できる、またはそこでの活動を続けたいと思えるような組織づくりの必要性である。そのためには、構成員の自発的な協力に期待するだけでは不十分で、クオータ制の導入や討論会で男女に等しく発言機会を与えること、集会への託児サービスの提供などを、公式なガイドラインを設けて実行していかなくては目標は達成されない。結びとして、「ジェンダー平等は、あらゆる政治の核心である」という力強い表明がなされた。

続いて、来日のかなわなかったハーヴァード大学ケネディスクール「女性と公共政策プログラム」事務局長ヴィクトリア・バドソン氏からの、大学における女性のリーダーシップ養成プログラム実施の意義を述べたビデオメッセージが上映された。

その後のパネルディスカッションでは、日韓独の選挙制度の比較や、それぞれの女性政治家としての経験、女性政治家育成プログラムの詳細、女性議員増加の重要性などについての、活発な議論が展開された。質疑応答でも、多くの参加者からの質問があり、議論をさらに掘り下げることができた。

以上のとおり、本シンポジウムでは、現役の政治家そして女性政治家育成と支援にあたる実務家たちの話を聞き、それぞれの現場での、これまでの成果や困難、そしてこれからの課題について学ぶことが出来た。大学という場でこの企画を実現させることの意義は、本シンポジウムでの議論を、「では大学では何ができるのか」という議論に発展させ、今後の本学および両研究所における研究教育にこれを活かすことにある。かつ、そうして生み出された、優れた教育プログラムや先進的な研究などの成果が、ジェンダー平等社会の実現に資するものとなることであろう。両研究所では、そのような成果に向けた努力が続けられている。

記録担当：吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）

国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同）

ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像

【日時】2019 年 1 月 12 日（土）13:30〜17:00

【会場】共通講義棟 2 号館 201

【学長講演】

「ジェンダー平等と女性のリーダーシップ」

キム ヘスク（韓国・梨花女子大学校総長）

アンネ・ボルグ（ノルウェー科学技術大学副学長）

室伏きみ子（お茶の水女子大学長）

【パネルディスカッション】

「グローバル女性リーダー：多様性とネットワーク」

ソン イェラン（梨花女子大学校リーダーシップ開発院研究員）

キム・アイン・ズオン（ベトナム女性学院副学長）

石井クンツ昌子（お茶の水女子大教授・ジェンダー研究所長）

小林誠（お茶の水女子大教授・グローバルリーダーシップ研究所長）

チョ ソンナム（梨花女子大学教授・リーダーシップ開発院長）

【パネル司会】

大木直子（グローバルリーダーシップ研究所特任講師）

【総合司会】

小林誠（グローバルリーダーシップ研究所長）

【主催】グローバル女性リーダー育成研究機構　グローバルリーダーシップ研究所　ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】170 名

【趣旨】

お茶の水女子大学は、女性リーダー育成の先駆的な実績を持つ梨花女子大学校およびノルウェー科学技術大学と連携して、ジェンダーと女性リーダーシップの共同研究を開始した。本シンポジウムは、それぞれの社会、大学における女性リーダー育成の課題を明らかにし、相互に解決の手法を学び、実践につなげる知見の基盤づくりを目的とする。第 1 部では、各大学での女性リーダー育成の取り組みを紹介し、今後の大学の課題を明らかにする。第 2 部では、韓国、ベトナム、日本のそれぞれの社会において必要とされるジェンダー視点に基づいた女性リーダー像とはどのようなものか、また、女性リーダー育成のための国境を越えたネットワークをどのように作り上げることができるか、多面的な議論をする。

【開催報告】

2019 年 1 月 12 日（土）、お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構（GWL）主催国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」が開催された。ジェンダー研究所（IGS）とグローバルリーダーシップ研究所（IGL）協働の国際シンポジウム企画第 2 弾である。それぞれの研究所の研

究パートナーである、ノルウェー科学技術大学（NTNU）、韓国の梨花女子大学、そして、交流が進められているベトナム女性学院からゲストスピーカーが招かれ、170 名の参加者を集めた。

第 1 部学長講演「ジェンダー平等と女性のリーダーシップ」には、金ヘスク梨花女子大学総長、アンネ・ボルグ NTNU 副学長、室伏きみ子お茶の水女子大学長が登壇した。金総長は、まず、韓国の女子大学は他国のものと比べて規模が大きい、という点を述べた。これは儒教の道徳観にある男女の区分が、女性に特化した教育を必要とし、女性たちによる自律的な空間を存在させてきたことに起因する。それが発展してきた結果、工学や医学といった女子学生が少なくなりがちな専攻も擁する女子対象の総合大学が存在し、現在も、女子大生の 30%以上が女子大学に在籍するという人気になっている。金総長は、この女性が集まる知的空間という環境が、新たな知的基盤、新しい理論的パラダイムを構築するプラットフォームとなるという期待を示し、それこそが、女子大学の存在意義であると強調した。

続くアンネ・ボルグ NTNU 副学長の講演は、ノルウェーという男女平等先進国においても、科学技術分野の研究者、特に教授職位に女性が少ないままである現状説明から始められた。NTNU では、その状況改善を目指して、ノルウェー・リサーチ・カウンシルからの助成金を受けての「バランス・プロジェクト」を実施した。まず、ボトムアップの方策としては、女性教員対象の教授昇格資格奨学金やメンター制度など、女性研究者がリーダーシップをとるための力をつける施策がなされた。そして、トップダウンの方策として着目したのは、科学・工学系の学部文化の変革である。学部長などリーダー職位にある者を対象とするワークショップで採用したアクション・リサーチのアプローチが、関係者のモチベーションを向上させ、成果につながったということである。トップダウンとボトムアップ双方向のアプローチと長期的な取り組みが不可欠であるという、NTNU の経験に基づく示唆がなされた。

室伏きみ子お茶の水女子大学長からは、女性が活躍できる環境整備が遅れている日本の現状について説明がなされた。お茶の水女子大学では全学的な取り組みにより、女性リーダー育成を推進している。学部生対象のキャリア・デザインプログラムや、働く女性対象のビジネスリーダー育成プログラムのほか、学術界での女性活躍推進のために、大学院生を対象とした海外派遣プログラム、女性研究者対象の妊娠・出産・育児支援プログラムなどを実施。それらは、GWL における研究プロジェクト成果に基づく知見により企画運営されている。今後も、国際的な共同研究や、企業と連携しての教育プロジェクトに精力的に取り組み、研究と教育を連携させて女性活躍のための環境を創出するという展望が示された。

第 2 部は「グローバル女性リーダー：多様性とネットワーク」というテーマによるパネルディスカッションである。梨花女子大学リーダーシップ開発院のソンイェラン特任教授は、科学・技術・工学・数学（STEM）分野における女性のリーダーシップについて報告した。STEM 分野における女性の障壁は、目に見えない無意識の部分に存在し、認知されにくいことから解消もされにくい。例えば、研究室内に SF のポスターやビデオゲームといった、男性ステレオタイプの「記号」が存在するだけで、そこは女性にとって居心地の悪い、働きにくい場所になる。また、その環境下で孤立を感じたり、誰からの励ましもなかったりすることが、研究者の道をあきらめる原因となる。梨花リーダーシップ開発院が実施して

いる梨花・ルース国際セミナーでは、女子学生たちに、STEM 分野に存在する女性差別やジェンダー・バイアスについての知識を持たせるとともに、リーダーシップスキルを身に着けさせることで、STEM 分野における男性中心文化を変革できる女性リーダーの育成を目指しているとのことである。

ベトナム女性学院のキム・アイン・ズオン副学長の報告では、ベトナムの大学における女性のリーダーシップに焦点が当てられた。ベトナムでは、学生の女性割合は 50%近くに達するものの、教員の女性割合はそれに比して低く、教授などの高職位の女性割合はさらに低くなる。ベトナム社会におけるジェンダー規範が、女性を従属的な立場に置いていること、家事は女性が担うものとされていること、定年が男性よりも 5 年早いなど、女性の機会を限定する構造的な要因は多い。また、リーダーシップのポジションの求人広告には、「男らしい」特性が強調されているため、女性たちは適性がないと思い込んで応募しない。このような事態の打開には、トップダウンで、クオータ制や女性による女性のメンター制度の導入が効果的であろうという提案がなされた。また、ズオン氏からは、「男女でリーダーシップの典型的なプロファイルが異なる」という考えが示された。

石井クンツ昌子 IGS 所長からは、日本におけるジェンダーとリーダーシップの現状と、その原因の分析が示された。日本で、経済、政治分野での女性の進出が遅れている理由には、伝統的なジェンダー・イデオロギーによる男女間の分業規範が根強く残っていること、いわゆる「ロール・モデル」が十分に存在していないこと、男性からの、そして制度的な家事育児への支援が不足していることがある。このような社会環境を変えていくには、幼児教育や初等教育、特に家庭科教育でジェンダー平等について学ぶことが重要との指摘があった。また、既存の研究報告がリーダーシップ・スタイルに性差はないと示していることからも、限定的に「女性の」リーダーシップの理想を追求することには疑問があると述べ、これについてのディスカッションを持つことが提案された。

小林誠 IGL 所長は、日本政府の女性活躍政策について分析した。首相官邸の主導により、内閣府男女共同参画局や経済産業省などが精力的に進めている女性活躍促進の目的には、女性人材の活用は利潤につながる、といった内容が目立つ。本来重要なのは、女性の活躍を当然とする「フェアネスの高い社会」の実現であり、そのために女性のリーダーシップが必要とされているのだ。昨今の「新自由主義」的な効率優先の考え方は、人権をないがしろにしがちである。大学という場には、「あるべき未来に向けて知的課題を解決していく」という社会的役割があり、女性リーダーシップの育成においてもそれを念頭において、国境を越えた知的交流を進めていくことが有益であると述べた。

総括し、チョソンナム梨花女子大学リーダーシップ開発院長のコメントでは、競争と成功に重きを置く従来の西洋を模範とする男性支配型モデルからの、パラダイムシフトが必要だと強調された。「創造的母性型リーダーシップ」として提案された新しいリーダーシップのパラダイムは、21 世紀のグローバル市民として、共生、分かち合い、平和そして持続可能性を重視するというものである。梨花女子大学とお茶の水女子大学の共同事業では、このような新しいパラダイムを構築し、これに基づく「グローバル女性リーダーモデル」の創出を目指したいと、今後の共同研究の抱負が述べられた。

続くディスカッションでは、司会の大木直子 IGL 特任講師より、男女のリーダーシップ・スタイルに違いはあるか？　アジアにおけるリーダーシップ論とは何か？　国際的なネットワーキングを成功させるために重要なことは何か？　アジア社会において男女格差がなかなか縮まらないのは何故か？という 4 つの質問が出され、今後のリーダーシップ理論構築の基礎となる議論が展開された。お茶の水女子大学と NTNU、梨花女子大学との共同研究への期待が高まるシンポジウムであった。

記録担当：吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）

▶ 2018 年度主催 IGS セミナー詳細

IGS セミナー

合評会：倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー：90 年代保守言説のメディア文化』

〔東アジアにおけるジェンダーと政治研究プロジェクト①〕

【日時】2018 年 6 月 5 日（火）18:00〜20:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 604 室

【司会】
申琪榮（IGS 准教授）
板井広明（IGS 特任講師）

【報告】
倉橋耕平（立命館大学非常勤講師ほか）

【コメンテーター】
富永京子（立命館大学准教授）
本山央子（お茶の水女子大学大学院）

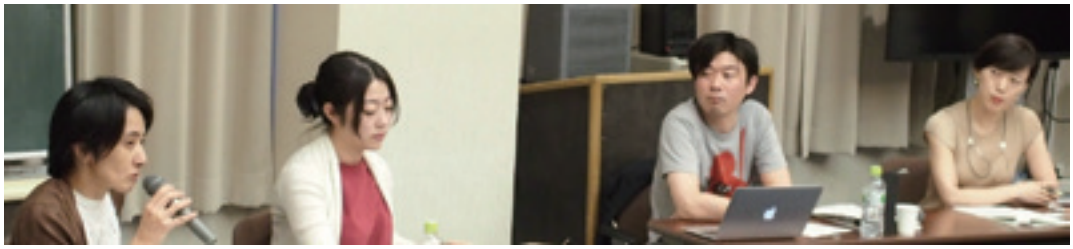
【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】55 名

【趣旨】
1990 年代以降の社会と知の分断状況を、歴史修正主義の台頭とそのサブカルチャー形成という点から鮮やかに描き出した『歴史修正主義とサブカルチャー』（青弓社、2018 年）の合評会を、著者の倉橋耕平氏をお迎えして開催する。

【開催報告】
2018 年 6 月 5 日、『歴史修正主義とサブカルチャー』の著者、倉橋耕平氏をお招きして合評会形式の IGS セミナーを開いた。著者の報告の後に、富永京子氏（立命館大学）と本山央子氏（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）からコメントをもらった。

倉橋氏からは『歴史修正主義とサブカルチャー』出版の背景や出版後の状況などについて報告してもらった。同書のコンセプトとしては、批判が批判として通用しない現状の分析をする際に、「何が語られているか」「誰が行なっているか」「どんなイデオロギーか」ではなく、「どこで／どのように語られているか」「どのような拡散の方法なのか」「どのような知を形成していったのか」という形で問いの転換を行ない、「参加型文化としての歴史修正主義」という特徴をメディア文化の消費者行動という視点から、従来のアカデミアが取り上げてこなかった「文化」を文化として観察・分析するというのが狙いであったという。



出版後の反響としては、twitter で話題になったことやネット書店での反響があったことが分析した結果との関連で興味深いことだった。著書への批判として、「サブカルチャー」概念の扱いや、歴史修正主義が「上から」作られた側面を捨象しているのではないかといった点などが挙げられた。Amazon レビューでは、内容を読まずに書かれた感想が目立ったとのことだった。

課題として、また議論したい問いとしては、以下のものが挙げられた。1990 年代よりも前の状況と比較して、通史的な部分で捉えた時に「歴史修正主義とサブカルチャー」はどのような問題となるのか、1990 年代の自民党を引き継いだ現在の自民党とサブカルチャーと右傾化する政治の共振関係とはどれくらいのものなのか、歴史修正主義がミソジニー的な傾向をもつのはなぜかといった点である。

コメンテーターの本山氏からは、学術界と運動界をつなぎフェミニストのメディアを制作してきた立場からということで、特有の枠組みによって編成される集合知としての歴史修正主義、歴史修正主義のシリアスなファンの存在、政治権力の圧力を受けたメディア文化市場、学術知とアマチュアリズムとが対立的だった知の在りようの変化、「慰安婦」問題に象徴的な、フェミニストの異議申し立てと近代的知に対するパラダイム転換のプロジェクト、歴史修正主義の主体化戦略とネオリベラリズムとの親和性などが指摘された。

もう一人のコメンテーター、富永氏からは各章へのコメントがされつつ、「歴史修正主義」について、政治と社会運動を切り離して論じた稀有な研究であり、また歴史修正主義を支えた雑誌投稿（欄）について、「投稿が読者共同体を作り出す一方で、投稿者同士の競争のもとで編集者に認められるという構造がある、きわめて「マッチョ」な側面を持つ文化でもある」として、ミソジニーの傾向は投稿という活動にも当てはまるのではないかとの示唆があった。

なお、倉橋氏がサブカルチャーを「下位文化」「商業性」と捉えるのに対して、富永氏は「カウンターカルチャー」としてサブカルチャーを捉えているという相違があり、倉橋氏が用いる分析枠組みは当事者らの用法に依拠しており、学術的な文化研究のための概念ではない点で疑問が残るともコメントがあり、倉橋氏の研究のさらなる深化に繋がる重要な指摘もあった。

質疑応答においては、歴史修正主義を支える文化がなぜ、いかにして維持・再生産されているのかについて、また歴史修正主義を支えるディベート文化の派生物とも言える若者の中立ぶりたいというメンタリティーを読み解くことの意義といった論点もあがり、活発な議論が行なわれた。

記録担当：板井広明（IGS 特任講師）

IGS セミナー

近代日本のファッション文化を再考する

女性・近代化・対抗文化

〔東アジアにおけるジェンダーと政治研究プロジェクト②〕

【日時】2018 年 6 月 26 日（火）18:00〜20:30

【会場】共通講義棟 2 号館 101 室

【司会】
板井広明（IGS 特任講師）

【報告】
井上雅人（武庫川女子大学准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】62 名

【趣旨】
『洋服と日本人』（廣済堂出版、2001 年）や『洋裁文化と日本のファッション』（青弓社、2017 年）の著者井上雅人氏をお招きして、セミナーを開催する。男性中心、工業化、政治、有名性を中心に語られて来た歴史において、生活の中で、女性たちがいかにして対抗文化をひっそりと育んだか、洋裁を通した女性の主体的な文化形成、工業化や生活技術の外部化以外の近代化の道、戦争を挟んで変化したこと変化しなかったことなど、現在の歴史学やジェンダー論への反省的な見直しから浮かび上がってくる近代日本のファッション文化を再考する機会をもちたい。

【開催報告】
2018 年 6 月 26 日、IGS セミナー（東アジアにおけるジェンダーと政治②）「近代日本のファッション文化を再考する：女性・近代化・対抗文化」と題して、『洋服と日本人』（廣済堂出版、2001 年）や『洋裁文化と日本のファッション』（青弓社、2017 年）の著者井上雅人氏をお招きしてセミナーを開いた。

井上氏はまず近代日本のファッション史の従来の整理に対して、総動員体制と洋裁文化という視点を付加することで、洋装史、若者文化史（ストリート・ファッション史）、ファッション・デザイナー史と断絶的に語られていたものを一続きの歴史として語ることができると指摘した。

その上で、近代日本のファッション史の「神話」を脱神話化しつつ、報告が行なわれた。以下、当日の配布レジュメに従いつつ、まとめておきたい。

神話その 1「鹿鳴館以降、洋装化（＝衣服の近代化）が始まった」については、「近代化と洋装化は別であり、木綿や下駄の普及、武家風の長着など、洋装化とは別に起きた近代も見るべきだろう」という。

神話その２「白木屋の火災で洋装が広まった」については、「女性の洋装化は、関東大震災と就学率の向上（1923 年生まれが 1943 年に成人）が大きい。洋裁が普及し始めるが、良妻賢母以前から続く自家裁縫の影響がある」とされる。

神話その３「第２次世界大戦によって、洋装化が中断した」については、「貫戦期を一時代として捉え、総動員体制における徹底した「身体の平等化」と、占領軍が持ち込んだ「民主化」という概念の複合した具体的な形として、現在の日本の洋服を中心としたファッションがスタートしている。日本人女性の身体を変えるプロジェクトが進行した」という。

神話その４「『アンアン』によって、衣服は作るものから買うものに変わった」については、「ミニスカート以後、近代産業社会的身体を徹底した既製服の活動的身体が支配的になっていった。日本のファッションが、自家裁縫と大量生産から、少量多品種生産へと変化して行った。／衣服が、作るものから買うものへと変化し、生産するものから消費財へ変わって行った。洋服のデザインは、「正しさ」から「オリジナリティ」へと価値が移って行った」とされる。

神話その５「1980 年代における日本の「ファッション革命」は、劇的に世界のファッションを変えてしまった（Valerie Steele）」については、「日本の社会の「際限なき民主化作用」は、85 年の「コム・デ・ギャルソン論争」において、「『死霊』もコム・デ・ギャルソンも商品として等価であるという徹底した相対主義」という理解を生んだ。結果、誰もがブランドに振り回され、誰もがブランドを持つことができる社会が到来し」、「80 年代のデザイナーたちは、70 年代までの日本のファッション界の延長にある」という。

その上で、これまでファッション史研究で見過ごされてきた洋裁文化を歴史的に位置づけることによって、「洋裁ブームは、「服装革命」と呼ばれた。1955 年『朝日新聞』によれば、和服の着用率は４％まで減少した。洋服＝近代産業社会的身体が家庭の領域にまで浸透した」ということがよく理解できるということであった。

男性中心、工業化、政治、有名性を中心に語られて来た歴史において、生活の中で、女性たちがいかにして対抗文化をひっそりと育んだか、洋裁を通した女性の主体的な文化形成、工業化や生活技術の外部化以外の近代化の道、戦争を挟んで変化したこと変化しなかったことなど、現在の歴史学やジェンダー論への反省的な見直しから浮かび上がってくる近代日本のファッション文化を再考したセミナーとなった。

記録担当 :板井広明（IGS 特任講師）

IGS セミナー
ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考

【日時】2018 年 10 月 1 日（月）13:00〜17:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 604

【コーディネーター／司会】
板井広明（IGS 特任講師）

【報告】
梅垣千尋（青山学院女子短期大学教授）
「ウルストンクラフトのフェミニズム：理性・徳・知識における平等」
板井広明
「ベンサム功利主義における女性・結婚・両性の平等」
土方直史（中央大学・名誉教授）
「1820 年代のイギリス・フェミニズムと功利主義」
山尾忠弘（日本学術振興会特別研究員 DC／慶應義塾大学大学院）
「J.S.ミルとウィリアム・トンプソン:リベラル・フェミニズム概念の批判的再検討にむけて」
舩木惠子（武蔵大学研究員）
「ヴィクトリア時代の経済発展とフェミニズムの理論化」

【討論者】
後藤浩子（法政大学教授）
小沢佳史（九州産業大学講師）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】47 名

【開催報告】

2018 年 10 月 1 日、IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」を開催した。フェミニズムの歴史では、18 世紀末から 20 世紀中葉までを、第一波フェミニズム、あるいはリベラル・フェミニズムと総称することが一般的であった。それは公私二元論に無反省に立脚し、男女同権、すなわち平等な法的権利の獲得を目指す運動と見なされてきた。しかしブリテンに目を転じてみても、その時期の思想家が女性への法的権利付与を要求した根拠や、同時代の女性の隷従状態を批判した内実は、第二波フェミニズムが批判するような、単純な公私二元論を前提にするものではなかった。そこで本セミナーでは、18 世紀末のフェミニズム草創期の思想家から、のちの女性参政権運動へと連なる、フェミニズム思想の多様な諸相を思想史的な視点から丁寧に紐解き、その姿を浮き彫りにするとともに、現代におけるフェミニズム思想への貢献としたいという趣旨で開催した。

第 1 報告の梅垣千尋（青山学院女子短期大学）「ウルストンクラフトのフェミニズム：理性・徳・知

識における平等」では、『女性の権利の擁護』における「根本的な原理」としての「理性と徳と知識」の 3 点から、その平等論を探るものであった。

第 2 報告の板井広明（IGS 特任講師）「ベンサム功利主義における女性・結婚・両性の平等」では、『道徳と立法の諸原理序説』などのテクストから析出されるあるべき夫婦の法的・社会的関係は平等性にあり、いわゆる公私二元論を批判していた点が確認された。

第 3 報告の土方直史（中央大学）「1820 年代のイギリス・フェミニズムと功利主義：Frances Wright と Anna Doyle Wheeler を中心に」ではライトはオウエンからの影響、トンプソンと『人類の半数である女性の訴え』を共同で執筆したウィラーは既存の結婚制度に代替されるべき協同思想の提唱などを行なっていたことが指摘された。

第 4 報告の山尾忠弘（学振特別研究員（慶應義塾大学）)「J.S.ミルとウィリアム・トンプソン：リベラル・フェミニズム概念の批判的再検討にむけて」では、安全という原理を女性にも適用すべきであるという点でトンプソンと J.S.ミルは一致しつつも、「女性解放論の道筋は協働社会、すなわち社会主義の実現と女性の解放を同一視するかどうかという点において著しい対照をなしている」ことが指摘される。

第 5 報告の舩木惠子（武蔵大学）「ヴィクトリア時代の経済発展とフェミニズムの理論化」では、19 世紀中葉以降のブリテンの経済発展と、フェミニズムの観点から政治経済学を実証的に捉えようとしたマーティノーを取り上げ、またフェミニズムの思想的源泉について、ボディションらのフェミニストの思想分析が行なわれた。

コメンテーターの一人、後藤浩子氏（法政大学）は「19 世紀ブリテンの「リベラル・フェミニズム」の歴史的背景」として、18 世紀末のフランスの婚姻制度とアイルランドの女性の就業状況などを素材にコメントし、小沢佳史氏（九州産業大学）からは各報告についてのコメントがあった。5 報告のうち、3 報告が昨今注目され始めている「功利主義フェミニズム」に関することでもあり、功利主義とフェミニズムの捉え返しを中心に質疑応答が行なわれ、19 世紀ブリテンのフェミニズムの多様な姿が浮き彫りになったセミナーであった。

記録担当：板井広明（IGS 特任講師）

IGS セミナー（生殖領域シリーズ 1）

代理出産をめぐる世界の現状

商業的代理出産から利他的代理出産へ

〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕

【日時】2018 年 10 月 29 日（月）18:15〜20:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 604 室

【講師】

日比野由利（金沢大学助教）

「代理出産をめぐる世界の現状―商業的代理出産から利他的代理出産へ」

【ファシリテーター】

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】33 名

【趣旨】

2002 年にインドで商業的代理出産が合法化されたことを皮切りに、新興諸国への代理出産ツーリズムが拡大した。そして様々な問題が起こり、2015 年から 2016 年にかけて、インド、タイ、ネパール、カンボジアが相次いで代理出産ツーリズムを禁止し、外国人に対して門戸を閉ざす方針へと転換した。しかしその後も、一部の国では利他的代理出産を容認する動きがみられる。本セミナーでは、代理出産ツーリズムを経て、諸外国では、どのような法制化がおこなわれているのか、新しい運用状況はどのようなものなのか、また利他的代理出産がもたらす問題についてとりあげた。

【開催報告】

2018 年 10 月 29 日（月）、金沢大学の日比野由利氏を招き、お茶の水女子大学人間文化研究棟の 604 室で、2018 年度第一回目の（生殖領域シリーズ）IGS セミナーを開催した。

日比野氏は『代理出産をめぐる世界の現状―商業的代理出産から利他的代理出産へ』というテーマで報告し、報告の中では、2002 年にインドで合法化された商業的な代理出産が、どのように新興諸国であるタイ・ベトナムへ拡大していったのかを紹介した。そしてこの 3 か国でどのような問題や事件がおこり、それらを通してどのように代理出産に関する法律がつくられ、その後外国人に対する代理出産サービスを禁止する方針へと転換されていったのかについて紹介した。

インドは、Manji 事件（日本人男性が代理母を介して子どもを得たが、インドの法律に従ってその子を養子にできないために、子どもの国籍取得ができず、日本へ連れて帰れなかった事件）等、生まれた

子や代理母に不利益をもたらすような様々な事件がおこり、2015 年に外国人への代理出産サービスの提供を禁止した。しかしその後も、インドは自国の希望者に対しては商業的な代理出産を容認している。一方、タイのように、オーストラリア人による障碍児の受け取り拒否や日本人ビジネスマンが代理母を介してたくさんの子どもを持つなど、商業的代理出産に関してさまざまな事件が起こり、これらをきっかけに、外国人への代理出産サービスを禁止したが、利他的な代理出産については容認している国もある。特に不妊を家族の問題と考えるような文化を持つ国々で無償での利他的代理出産をすすめる場合には、不妊の女性の代わりに家族や親族の妊娠・出産が可能な女性が、代理母になることを押し付けられ、断りにくい雰囲気が形成されることもあり、利他的代理出産がもたらす課題も重い。今回はインド、タイ、ベトナムの代理出産を中心に紹介されたが、今後は外国人がこれらの国で代理出産サービスを受けられないためにさらに周辺の新興諸国に生殖医療ツーリズムが拡大する可能性が高く、注視していく必要がある。質疑応答や討論の時間には、参加者からもこの問題に関して、活発に声があがった。

記録担当：仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

IGS 英語セミナー

地政学、安全保障、女性の身体

〔東アジアにおけるジェンダーと政治研究プロジェクト③〕

【日時】2018 年 11 月 9 日（金）14:00〜17:00

【会場】本館 135 室

【司会】申琪榮（IGS 准教授)

【報告者】
デニス・M・ホーン（シモンズ大学准教授）
リンダ・ハスヌマ（ブリッジポート大学助教授）
メアリー・M・マッカーシー（ドライク大学准教授）

【討論者】
平野恵子（IGS 研究協力員）
本山央子（お茶の水女子大学・大学院）
徐阿貴（福岡女子大学准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】17 名

【開催報告】

11 月 9 日、アメリカからデニス・M・ホーン氏、リンダ・ハスヌマ氏、メアリー・M・マッカーシー氏の 3 人の研究者をお迎えして、「地政学、安全保障、女性の身体」というテーマで二つの報告が行われた。司会はジェンダー研究所の申琪榮准教授が行った。

デニス・M・ホーン氏の報告は、インドネシアにおける人口調整政策の変遷を、グローバルな地政学の観点から分析したもの。共産主義の脅威の封じ込めという冷戦の論理の下、アメリカや日本による人口統制のための開発援助がいかに形成され、インドネシアのナショナリズム政治によって女性たちの身体の上に行使されてきたのか、権力の重層的な作用を緻密に読み解いてみせた。この過程において、オランダ植民地下で家父長制支配に抵抗したカルティニという女性像が母性の象徴として利用されてきた事実も興味深い。

さらに冷戦構造の崩壊後、グローバルな人口政策が「女性のエンパワーメント」を強調するものへと変わり、インドネシアでも民主化が起きてきたにもかかわらず、女性身体への統制が、かたちを変えながら強化されている現状についても指摘し、女性身体に介入するグローバル・ナショナル・ローカルな権力の複雑な関係について、深く考えさせるものであった。

リンダ・ハスヌマ氏とメアリー・M・マッカーシー氏は、アメリカにおける日本軍「慰安婦」を想起する運動について現在行っている研究を報告してくださった。日本政府に謝罪を促す 2007 年の米下院決議の採択以降、アメリカにおける運動は、主に公共の土地における記念碑設置を通したローカルな運

動へとシフトしてきた。各都市における詳細な調査をもとに、お二人は、コリアン・コミュニティの存在感は重要な要素ではあるものの、幅広いアジア系コミュニティとの連帯形成、そして人権や正義といった普遍的な価値への訴えかけこそが、公共空間において「慰安婦」被害者を記念する意義について、人々を説得する鍵となっていることを示した。

さらにこの運動は、多様でクリエイティブな教育・文化プログラムを通して、アジア系にとどまらず、また若い世代を巻き込んでいる。高校生 2 人のイニシアティブによって最近ニュージャージーに建設された碑や、ユネスコ記憶遺産への登録をめざす国際運動は、こうした新たな展開の興味深い事例である。

討論では、インドネシアの移住家事労働者について研究を行っている平野恵子氏が、女性たちに母としての役割を果たすよう求めるナショナリズムの政治が、実際には家事労働者の存在によって支えられている側面について、またこの理想的女性像にムスリムという要素が後から持ち込まれていることについて指摘した。

在日朝鮮人女性の社会運動について研究を行っている徐阿貴氏は、かつて DV 問題に取り組んでいたカナダのコリアン女性団体がコミュニティからの支持を得られていなかったことや、アメリカにおいて「慰安婦」記憶運動に関わった在日コリアン女性の経験を挙げながら、必ずしも均一ではないマイノリティ・コミュニティの中において、「マイノリティ中のマイノリティ」である女性たちがいかに自身のアイデンティティやフェミニスト課題と向き合ってきたのかという問いを提起した。

また、国際安全保障分野におけるジェンダー主流化について研究を行っている本山央子は、普遍的価値を強調する「慰安婦」運動が、一方において、冷戦下でこれらの記憶を抑圧してきたアメリカの役割を不可視化しかねず、また冷戦後に出現している新たな地政学において、普遍的な価値が脱政治化され、権力によって利用されている側面を不可視化してしまう危険を指摘した。

他の参加者からも多くの質問が寄せられ、活気あふれる議論となった。

報告：本山央子（お茶の水女子大学大学院）

IGS セミナー（生殖領域シリーズ 2）

フランスにおける LGBT と生殖医療、および性別の表記変更

〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕

【日時】2018 年 11 月 16 日（金）18:30〜20:30

【会場】本館 126

【報告者】

小門穂（大阪大学大学院助教）

「フランスにおける LGBT と生殖医療、および性別の表記変更」

【ファシリテーター】

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】39 名

【趣旨】

近年、日本でも、子どもを持つことを希望する同性カップルやトランスジェンダーの方たちが見られるようになってきたが、生殖医療を利用できるのはヘテロセクシュアルのカップルに限られ、同性やトランスジェンダーのカップルが生殖医療で子どもを持つことはまだまだむずかしいのが現状である。フランスでも、ヘテロセクシュアルのカップルだけが生殖医療を受けられると法により定められているが、同性のカップルやトランスジェンダーの方たちによる生殖医療の需要が増えている。そこで本セミナーでは、フランスにおける LGBT の生殖医療の利用の現状と性別表記変更について、近年の動向を報告した。

【開催報告】

2018 年 11 月 16 日（金）、大阪大学の小門穂氏を招いて、2018 年度第二回目の（生殖領域シリーズ）IGS セミナーを開催し、このセミナーで小門氏は、「フランスにおける LGBT と生殖医療、および性別の表記変更」と題して報告した。

日本で子どもを持つために生殖医療を利用できるのは、ヘテロセクシャルカップルに限定されているが、フランスでも同様に、公衆衛生法典第 L.2141-2 条で、独身者や同性カップルの提供精子、提供卵子、提供胚の利用は禁止されている。しかし、同性のカップルやトランスジェンダーの人々による生殖医療への需要は増えつつあり、小門氏はフランスの LGBT の人々の生殖医療の利用と性別の変更に関する最近の動向について紹介した。

フランスでは代理出産は禁止されているが、ヘテロセクシャルカップルは提供精子、提供卵子、提供胚を利用できる。2013 年にフランスでは同性婚法が成立したが、シングル男性や男性カップルは、代理出産を利用しないと子どもを持つことができないため、生殖医療の利用は実質不可能である。一方、シングル女性や女性カップルは、自分で子どもを産めるため、提供精子や提供卵子を得られれば子どもを持つことが可能であり、男性カップルからは、不平等であるとの主張があるものの、レズビアンカップルやシングル女性の生殖医療の利用についてはたびたび検討されてきた。これまでも、提供精子を求めて、国外に行くレズビアンカップルもいたが、2018 年、国務院によりレズビアンカップルやシングル女性の提供精子や提供卵子を利用した生殖医療を認めようという案が浮上している。

また、トランスジェンダーやインターセックスの人々の中には性別表記の変更を求める人もいるが、特に男性として出生しながらも、男性でも女性でもないと自認している人が、「中性」の表記をめぐっておこした裁判では、性の新たなカテゴリー創出は立法者に委ねるという妥当な判決がだされた。

小門氏の報告のあとに、フロアーからも活発な意見等が出され、日本のセクシャルマイノリティーの生殖医療の利用を考える上でも、非常に刺激になるセミナーであった。

記録担当：仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

IGS 英語セミナー（特別招聘教授プロジェクト）

Bodies, Collective Action and Democracy

Engaging with Judith Butler's Work

（主体、社会運動、民主主義：ジュディス・バトラーによる理論構築の検討）

【日時】2018 年 12 月 13 日（木）15:00〜17:00

【会場】本館 135 室

【講師】

デルフィーヌ・ガルディ（IGS 特別招聘教授／ジュネーブ大学教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】30 名

【趣旨】

ジュディス・バトラーは、革新的な著書『ジェンダー・トラブル』（1990 年）において、生物学的な性別あるいは超越論的な主体としての「女」や「女性」といった、アイデンティティのカテゴリーの論拠についての批判を論じた。アイデンティティ政治全般、そして特に、「女性アイデンティティに基づくフェミニズム」に対する批判として論じたのである。バトラーの反本質主義は、アイデンティティ政治に代わる選択肢の理論化の試みに発展する。本セミナーでは、講師がシンシア・クラウスと共に編纂した『Politics of Coalition? Thinking Collective Action with Judith Butler』（2016 年）について解説する。本書は、バトラーによる知的探求をさらに深めるべく、現代における「考える」方法、「政治的になる」こと、新しく変革的な（フェミニズムの内外での）「協調体制（coalition）」について考察している。

【開催報告】

2000 年代以降のバトラーの理論の焦点は、アイデンティティ政治にかわる、社会運動の基軸の選択肢の理論化にある。この論考は、『ジェンダー・トラブル』（1990 年）に代表されるジェンダーとセクシュアリティ、クイアに関する考察における、「パフォーマティヴィティ」の議論の伸展であるといえる。パフォーマティヴィティは、アイデンティティと主体と権力の入り組んだ関係性の分析に有効な概念である。例えば、アイデンティティの一要素であるジェンダーについて、女性「である」身体を生物学的な性に基づくとする規定は、必ずしも社会構成員全員が納得するものではない点を批判的に考察し、女性「になる」ことについての理解を深化させた。本質論的アイデンティティの理解に一石を投じる考察は、次に、「協調体制」のあり方というテーマに発展する。

アイデンティティ政治は、ジェンダー、人種、性的指向、といった特定のアイデンティティに基づく集団形成による政治活動である。それぞれの集団の特性により社会的不公正を受ける人々へのエンパワメントとなる動きであったが、同時に、その集団形成は、排他性と集団間の競争を伴う。そのため、アイデンティティに代わる概念による大きな連帯の形成が必要と考えられてきた。そこでバトラーが提示したのは、社会的弱者を包括することができる、「プレカリティ（生のあやうさ）」という概念である。「プレカリティ」による連帯とは、社会を構成する個々人が「安定した生存の権利を求める」ことで協調する体制である。性別や人種、性的指向といった「誰であること」に依拠せず、個人の「身体」の参加により構成される。デモなどの社会運動では、「その場に参加している」ことに大きな意義が生まれる。「その場」とは、民主主義の政治活動の場である。政治の場は、弱者が排除されてきた「公的領域」である。アイデンティティから身体に焦点を変えることで、排除ではなく包摂を基本とする政治空間、コミュニティ形成が可能になるのだ。また、この包摂を基本とする社会で個人個人がどのような振る舞いをするかについて、ガルディ氏はジャック・デリダの「歓待（ホスピタリティ）」の議論など、ヨーロッパの論者による考察を紹介した。

講義に続く討論では、様々な角度からバトラーの理論が検討された。バトラーの理論の日本社会への適用可能性についての質問に対して、ガルディ氏は、例えば、「パフォーマンスとしてのジェンダー」といった概念は、どのような文化においても、分析軸として使用可能と考えられると述べた。しかし、バトラーの論考そのものは、完全にアメリカ社会の状況に基づいてなされているとのことである。そうした文化的背景が思想には含まれているということだ。理論の普遍性という点については、バトラーは哲学という分野の出身であることへの留意が示唆された。哲学的考察においては、「一般論」の存在が常に前提とされ、多様な現象から共通点を見出すことでそれが導き出される。よって、「普遍的」と受け止めるのではなく、そのような考察の手法を理解して読み込んでいく必要がある。合わせて、フランスの学術界の文化についての説明もなされた。歴史学や哲学、社会学といった学問領域区分の伝統が根強く残るフランスの学会では、カルチュラル・スタディーズやジェンダー研究はほとんど評価されないとのことである。

学問的知識の普遍性を考えるに当たり、学問領域の特徴や学術界文化の地域性に話がおよぶのは、まさに、歴史学、人類学、社会学などを横断する形で、学際的にジェンダー研究に取り組むガルディ氏ならではのことであろう。セミナー内では、ガルディ氏が所属するジュネーブ大学ジェンダー研究センターについての紹介もなされた。IGS と同様に、学際的かつ国際的にジェンダー研究に取り組む機関であり、今後の機関同士の交流関係の構築が期待される。

記録担当：吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）

IGS 英語セミナー（特別招聘教授プロジェクト）

Millennial Maiko

The Geisha Apprentice in Japanese Popular Culture

（ミレニアル舞妓さん：日本のポピュラーカルチャーにおける舞妓像）

【日時】2019 年 2 月 8 日（金）14:30〜16:00

【会場】本館 125 室

【報告者】

ジャン・バーズレイ（IGS 特別招聘教授／ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】20 名

【趣旨】

舞妓のイメージは、京都のあちこちで、日本の古都を訪れる観光客を歓迎している。キュートな舞妓のイラストは、地図やメニュー、ポスターを飾り、ポストイットやハンドタオル、カプチーノデコレーションのデザインにも使われており、写真スタジオでの舞妓のコスプレは、世代を問わず、国内外からの観光客に人気がある。クール・ジャパンの要素である舞妓そして「カワイイ」京都のイメージは、「古の日本」とどう組み合わさってキャラクター商品となったのだろうか？芸者からより若い舞妓に、ファンタジー女性の表象が入れ替わったのはなぜか？戦後と現在の映像作品を比較しながら、イメージの変遷をたどる。

【開催報告】

2019 年 2 月 8 日、ジャン・バーズレイ IGS 特別招聘教授による IGS セミナー「Millennial Maiko: The Geisha Apprentice in Japanese Popular Culture（ミレニアル舞妓さん：日本のポピュラーカルチャーにおける舞妓像）」が開催された。バーズレイ氏の研究分野は、日本の近現代の女性表象分析である。本セミナーでは、1950 年代と 2000 年代の映像作品に描かれた舞妓像を比較して、舞妓のイメージの変遷をたどった。題材として取り上げられた作品は 1953 年の映画『祇園囃子』、1955 年の映画『ジャンケン娘』、そして 2008 年の NHK 朝の連続テレビ小説『だんだん』である。

21 世紀の現在、舞妓は、京都を彩る可愛らしいキャラクターとして人気を集めている。京都で舞妓として働く若い女性の数は 75 人と決して多くはないが、華やかな着物に日本髪姿の舞妓のイメージは、観光ポスターから舞妓姿のハローキティ人形などのグッズにまで、さまざまな形で描き出され、文化的

にも商業的にも、その存在感は大きい。そういった現代の舞妓のイメージの重要な特徴は、身売りや売春といった暗い影がみえないことである。

1950 年代の映画作品において、舞妓になることは、経済的な苦境を理由にやむなく選ぶ、生存のための手段である。富裕層の男性の遊興の相手をし、「旦那」というスポンサーに依存する、そして身請けされて愛人か妻となる、つまり「買われる」ことを当然とするのが、花柳界の内外で共有する常識なのだ。踊りやお茶や生花などの技能を高めることは、自分の商品価値を上げることにつながる。

『祇園囃子』では生け花の先生が舞妓たちを、「あなた方も・・・日本の美しさの象徴としての誇りと自尊心を持って毎日勉強するんですよ」と鼓舞する。『ジャンケン娘』では、元芸者の母親が、娘の高校の女性教師の「不潔極まる花柳界」という発言に対し、皮肉たっぷりに反論する。「芸者をまるで家庭の主婦の敵のようにみなさんおっしゃいますけど、どこかに魅力があるんどっしゃろな。旦那さんがお通いになること思いますと。だから私、女がマネていいところはマネてよろしと思います。」舞妓や芸妓が一般女性を上回る女性としての魅力を持つという誇り、より高い価値があるという自信を持つことは、性的商品であることを認めつつも、単なるそれ以上の存在であるという自尊心の表明である。

これに対して 2008 年のドラマでは、舞妓になることは、「自分らしさ」を追求する過程のキャリア選択のひとつであり、日本舞踊などの伝統芸能の技能を極めるという目標により正当化される。お座敷に来る客は、そこで披露される芸の質を理解する教養のある人たちであり、性的な要素は存在しないかのようである。ドラマに登場する舞妓の祖母である年配女性は、1950 年代の映画で描かれているような花柳界のありようを前提に、置き屋もお座敷も穢れた場所だと思い込んでいたが、お座敷で披露された素晴らしい舞を目にして、認識を改める。花柳界のイメージの脱性化を象徴するシーンであり、それは祇園の関係者が望むところであるという。性的な要素が除かれたことにより、ミレニアル世代の舞妓のイメージは、日本のポピュラーカルチャーのキーワードのひとつとも言える「カワイイ」と組みになり、かつて外国人観光客に持て囃された「Geisha」像を脇に押しやって、京都のイメージ・キャラクターになったのだ。

研究報告に続く質疑応答では、多くの質問やコメントが出され、時間を延長して議論が続けられた。本セミナーは、参加者にとって知的刺激の多いものとなった様子であった。バーズレイ氏は、本報告内容を含む舞妓研究の成果をまとめた書籍を執筆中で、この場での議論が原稿の内容を充実させることに繋がったという。その書籍の刊行がとても楽しみである。

記録担当：吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）

IGS セミナー
フランス啓蒙の女性論

【日時】2019 年 2 月 15 日（金）15:00〜17:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 604

【コーディネーター／司会】
板井広明（IGS 特任講師）

【講師】
森村敏己（一橋大学教授）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】31 名

【趣旨】

功利主義フェミニズムの誕生はフランス啓蒙の思想抜きでは語れない。エルヴェシウスの功利主義などの研究で著名な森村敏己氏（一橋大学教授）に報告いただき、ブリテンの功利主義に影響を与えたフランス啓蒙の思想、就中女性論について検討する機会としたい。

【開催報告】

2019 年 2 月 15 日に、森村敏己氏（一橋大学教授）を報告者としてお招きし、IGS セミナー「フランス啓蒙の女性論〜エルヴェシウスを中心に」を開催した。イギリスの功利主義者ベンサムに影響を与えた重要な思想家の一人、エルヴェシウス（Claude-Adrien Helvétius, 1715-1771）は女性や男女平等を主要な問題として取り上げたことはないが、彼の「女性」論は、感覚論的認識論に立脚した独特な環境決定論（＝知的・道徳的能力の先天的平等論）から導かれる論理的帰結であったというのが報告の骨子である。

とりわけ『精神論』（*De l'esprit,* 1751）でディドロから批判を浴びた認識論と環境決定論は『人間論』（*De l'homme,* 1773）において再論され、彼の女性論に重要な視座を与えつつ、その思想体系全体にとっても要の位置を担っていることから、他の論者との比較を通して、その独自な意義が明らかになった。

エルヴェシウスの思想の特徴として、第 1 にロックおよびコンディヤックを継承した感覚論的認識論、第 2 に人間は快を求め、不快を避けようとする本質的傾向（利害関心）を持つという快苦原理、第 3 に感覚受容能力は特定の構造を持つ物質＝身体が有する特性であり、身体から独立した霊魂を想定する必要はないという唯物論、第 4 に社会における最大多数者の利害関心に適うこと＝公共善こそが正義と道徳的正しさの規準であるという功利主義、第 5 に生まれつきの知的才能や道徳的資質は存在せず、人間の知的・道徳的能力の差異はすべて教育の違いに由来するという環境決定論が挙げられた。同時代人によるエルヴェシウス批判の詳細は割愛する。

エルヴェシウスが女性について論じた部分を再構成すると、第 1 に女性が男性に媚びるといった依存的な存在であるのはその教育の結果であり、とりわけ修道院での女性教育の改善が必要であること、第 2 に多産を尊ぶ社会では一夫一婦制や貞節に合理的根拠はなく、女性が夫を自由に選択でき、離婚も自由な国では不貞は起こらないこと、第 3 に男女は先天的に平等にあるにもかかわらず、女性が受ける教育が劣悪なために、女性は劣っているとみなされていること、このような状況で、女性は男性以上に知的・道徳的向上への見返りを期待できない社会となっていることへのエルヴェシウスの批判が位置づけられた。

さらにプーラン・ド・ラ・バール（François Poullan de la Barre, 1647-1723）『両性平等論』に見られる心身二元論や男性支配の構造、アントワーヌ・レオナール・トマ（Antoine-Léonard Thomas, 1732-1785）『女性についてのエッセイ』（1772 年）での女性の隷属状態の告発、心身組織の差異から男女の差異を論じ（むろん差異の存在は女性の劣悪な境遇を正当化しないとも論じた）、エルヴェシウスを批判したディドロ（Denis Diderot, 1713-1784）の女性論、そしてデピネ夫人（Louise Florence Pétronille Tardleud'Esclavelles d'Épinay, 1726-1783）の『ガリアーニへの手紙』が取り上げられ、以下の点の指摘があった。啓蒙期フランスにおける男女平等論は少数派であり、男女の精神機能の差異については、身体組織の差異を精神機能の差異の根拠としないための理論、すなわち心身二元論に立つか、あるいはエルヴェシウスのように教育が原因とする環境重視説かという二つの方向性があったのではないかという指摘である。

その後の質疑応答においては、フランス啓蒙期の男女平等に関する議論のイギリスでの受容の仕方や、エルヴェシウスのテクストの特徴、啓蒙期と現代とをつなぐ視点について活発な質疑応答が行なわれた。

記録担当：板井広明（IGS 特任講師）

IGS セミナー

近代日本の女性の移動と再生産

「からゆきさん」の生涯をめぐって

【日時】2019 年 2 月 21 日（木）15:00〜16:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 604

【司会】
大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）

【報告】
嶽本新奈（日本学術振興会特別研究員 PD／明治学院大学）
「近代日本の女性の移動と再生産――『からゆきさん』の生涯をめぐって」

【討論者】
大橋史恵（IGS 准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】35 名

【趣旨】
「からゆきさん」は一般に、明治以降に「外国（唐＝中国、転じて海外）で売春に従事していた女性」を意味する。従来「からゆきさん」については、主に売春に従事していた（させられていた）という部分にのみ関心が寄せられてきた。しかしそうした観点は、ともすれば「からゆきさん」の生涯を売春に従事していたという出来事や時期のみに収斂させてしまい、その時代においてさまざまな社会関係を生きてきた女性たちの主体的実践を見落とす危険性をはらんでいる。今回のセミナーでは、1960〜70 年代に「からゆきさん」についての著作を残した森崎和江のテクストを手がかりに、女性たちの移動と再生産という側面から「からゆきさん」の主体位置を再検討する。日本女性にとっての移動やそこでの経験が女性の生涯に何をもたらしたのかを具体的に考えたい。

【開催報告】
2019 年 2 月 21 日（木）、日本学術振興会特別研究員（明治学院大学）の嶽本新奈氏を招いて、ＩＧＳセミナー「近代日本の女性の移動と再生産―『からゆきさん』の生涯をめぐって」を開催した。
「からゆきさん」は一般に、明治以降に「外国（唐＝中国、転じて海外）で売春に従事していた女性」を意味する。従来「からゆきさん」については、主に売春に従事していた（させられていた）という部分にのみ関心が寄せられてきた。しかしそうした観点は、ともすれば「からゆきさん」の生涯を売春に従事していたという出来事や時期のみに収斂させてしまい、その時代においてさまざまな社会関係を生きてきた女性たちの主体的実践を見落とす危険性をはらんでいる。
今回のセミナーでは、性売買の経験が女性の人生に具体的に何をもたらしたのかを明らかにする試みとして、1960〜70 年代に「からゆきさん」についての著作を残した森崎和江のテクストを手がかりに、複

数の女性たちの具体的な記述から「からゆきさん」にとっての「子をもつこと」をはじめとした「再生産」の意味について報告された。
「からゆきさん」の各々の生涯からは、その生業ゆえの不妊の問題や「養子縁組」という血縁に限らない子どもとの関係性、子を持つ経験が自らのケア、介護・看取り・死を悼むことをめぐるイシューに繋がっていたことがみてとれるという。孤立状態に追い込まれる「からゆきさん」もいた一方で、父・母・こどもという血縁関係のみではとらえきれない、多様な「家族」という関係性をも垣間見ることができた。
本報告の討論者である大橋史恵氏は、「からゆきさん」の生に相通じる、香港における中国系住み込み家事使用人の生について触れた。両者とも老いに直面し自らのケアをどのように確保するのか、その不確実さに直面しつつも、今日のグローバル経済において、自らのケアを期待するが故に家族に送金するという移住女性たちの有り様についても考察がなされた。フロアからは、「からゆきさん」研究の現代的意味や、森崎和江のテクストが書かれた当時の生殖をめぐる規範の影響、また「からゆきさん」と呼ばれた女性間ではぐくまれたネットワークの有無についてなど質問や意見が出され、報告者・討論者との活発な議論が展開された。

記録担当：大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）

IGS セミナー
性同一性障害とトランスジェンダーは「水と油」か

【日時】2019 年 3 月 7 日（金）15:00〜17:30

【会場】本館 306

【コーディネーター／司会】
板井広明（IGS 特任講師）

【講師】
鶴田幸恵（千葉大学教授）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】66 名

【開催報告】

2019 年 3 月 7 日、 セミナー「性同一性障害とトランスジェンダーは「水と油」か」では、千葉大学准教授の鶴田幸恵氏をお招きして、「性同一性障害という概念は、病理概念として理解され使用されており、 人権概念であるトランスジェンダーとは相容れない」という捉え方があるが、そうした捉え方を引き受けない人びともいるのはなぜかを、トランスジェンダーの活動家へのインタビューデータを元に報告いただいた。

まず性同一性障害とトランスジェンダーという概念の相違について、性同一性障害（GID）は病理概念であり、ホルモン投与など医学的介入を可能とするものであったのに対して、トランスジェンダー（TG）は、脱精神病理化を目指した当事者運動から出てきた言葉であったという。その意味で、トランスジェンダーは、アイデンティティの問題と捉え返して自らの尊厳を取り戻すために人権に訴え、差異を認め合う社会へと誘うものであった。

鶴田氏は、エスノグラフィックな分析を通して、GID と TG とがどのように、そしてまたどのような概念と結びついているのかという観点から、両者の差異を論じた。その観点から、GID が性別枠組みを維持する活動であるのに対して、TG は性別枠組みを緩める活動という違いが見えてくるという。

欧米では病理化の概念である GID ではなく、TG が使われる傾向にあるのに対して、日本では、GID がアイデンティティーとして使われる傾向があったという対比も指摘された。欧米では、社会的なアプローチ、すなわち TG の心身の健康のために医療を利用するという、いわば TG が医療を利用する主体として性別移行が捉えられてきたのに対して、日本では、GID という医学的診断に基づいて客体化される形で性別移行が行われてきた点で、医学の役割も大きく異なっていたという。

このようにして、日本における GID 概念の変遷の背後に、利便性に基づいた医療概念のローカル化という特徴がみて取れる。GID は病理概念ではあるのだが、社会的に受容・配慮可能なものへと開く契機として医学を利用するという事態が起きたとも言える。

少数派の身体特性を持った身体が多数者の社会に関わったときに生じる障碍の社会モデルを前提に、日本では GID と TG は水と油という相容れないものであるという捉え方にはなっていないことが、エスノメソドロジーのアプローチから明らかにされた。

したがって、TG の対立概念ではないものとして GID を捉えているということは、それはすでに「性同一性障害」ではなくなっていて、病理概念ではなく、社会モデルによる「性同一性障害」概念になっているという指摘がされた。

質疑応答においては、GID と TG について、運動の当事者からの発言や国際比較など、様々な論点について活発な議論が行なわれた。

記録担当：板井広明（IGS 特任講師）

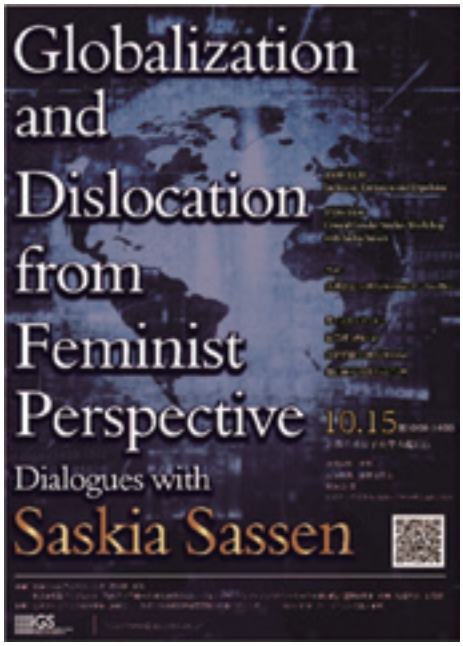
▶ 2018 年度共催 IGS セミナー詳細

IGS 共催 IGS セミナー

Globalization and Dislocation from Feminist Perspective

Dialogues with Saskia Sassen

（フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション：サスキア・サッセンとの対話）



【日時】2018 年 10 月 15 日（月）10:00〜14:00

【会場】本館 135

【司会】
大橋史恵（IGS 准教授）

【講演】
サスキア・サッセン（コロンビア大学教授）
「包摂、排除、放逐」

【ワークショップ　ディスカッサント】
「サスキア・サッセンとの対話：批判的ジェンダー研究」
堀芳枝（獨協大学教授）
大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）
本山央子（お茶の水女子大学大学院）

【共催】
ジェンダー研究所、科学研究費プロジェクト「新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー：インド・フィリピン・中国の国際比較」（基盤研究 B　代表：獨協大学、堀芳枝）

【協賛】日本フェミニスト経済学会（JAFFE）

【後援】経済理論学会問題別分科会「ジェンダー」

【協力】FFU（フェミニスト自由大★学）

【参加者数】25 名

【開催報告】
　最初にサスキア・サッセン氏は、女子大学で開催されるこのセミナーが、自著『グローバル資本主義と〈放逐〉の論理』 (以下『放逐』) と『領土・権威・諸権利』で扱った、しばしば男性に紐付けられ明示的には「女性の」問題とされない主題を議論する重要性を強調した。
　サッセン氏のいう放逐は 1980 年代に始まった変化のなかで、深刻で極端であるがゆえに可視化された、新たな状況を示す概念であるという。不平等や排除というカテゴリーで理解可能な事象は以前から継続しているが、それらの既存概念では不十分な事態があるのだという。放逐概念を理解するために最

初に挙げられた二例は、具体的には米国の状況を念頭においたもので、一つ目は、〈死んだ土地 (dead land)〉や〈死んだ水 (dead water)〉としかいえない、生き返らせることのできない水準にまで、環境が破壊しつくされているという問題である。もう一つの事例は法律や制度の規定するシステムの内部で、人びとが実質的に放逐されている問題である。たとえば雇用されておらず現に生活を支える収入がないが失業者としては法制度上いない人がいる。失業給付を受けけられる期間をこえた後も失業状態であったとしてもその人は統計上失業者のリストから外されてしまうのだ。こうした体制内部の微細な放逐の累積を認識することは、自国を無謬であるかのように振る舞う米国のような国にとって、とくに重要であるという。

セミナーで最も時間をかけて語られたのは、2007-8 年金融危機で多くの人びとが知ることとなった住宅ローン問題についてである。いまや住宅は人間の住む建物としてではなく、マテリアルな資産として認識されそれが担保となってローン契約が証券化され、金融システムの回路に取り込まれ循環するなかで、あまりにも多くの、そこに住む人びとを文字通り外へたたき出してしまった。これは伝統的な銀行が顧客の次世代に続く繁栄を望んで長期ローンを貸付けていた時代とは完全に異なる。住宅ローンの貸付業者はまず契約完了を稼ぎ、そうした契約の束を金融工学のアルゴリズミック的数学が証券化する。その証券はマテリアルな住宅資産に担保されているがゆえに価値を持つが、これまでわたしたちが理解してきたようなミクロ経済学の枠組みとは別次元の、アルゴリズミック的数学が介在する経済だ。

サッセン氏のレクチャー後、三人の研究者からコメントをいただき、活発なディスカッションがおこなわれた。堀芳枝氏 (獨協大学) は、フィリピンでのフィールドワークを踏まえ、企業の本社機能が集中するグローバル・シティ (GC) が特徴とし必要とする生産者サービスが、ビジネス・プロセス・アウトソーシング (BPO) を通じて、GC の外へと拡散する可能性を示唆した。これに対しサッセン氏は、GC を GC ならしめているものは、かつて支配的な存在であった企業群でも、これまでからずっとあった低賃金労働でもなく、ネットワーク化された知識へのアクセスであると強調する。そうした中間的な産業を各企業が自社内に囲いこまないのは、そうした中間セクターが非常に国際的で競争的でありながら、ネットワーク化され GC という場所に集積して存在しているからに他ならない。

大野聖良氏 (お茶の水女子大学 IGS) は、日本の移民政策と人身売買にかんする言説を分析し、移民女性の人身売買被害者が不可視化されてきた歴史を踏まえたうえで、国連の人身売買被害者支援の枠組みが日本国内の政策に翻訳され適用される過程において NGO の「排除」と当事者の「放逐」がみられることを指摘した。また大野氏は、日本語翻訳にある「放逐されたもののスペース (the space of the expelled)」をある種希望のある言葉として読んでいたという。この解釈に対しサッセン氏はその句が、放逐されたあとにも身体が存在することが考慮されていないからこその問題を提議していると述べ、著書『放逐』が冷酷な現実の提示をその使命としている点を明確にした。

本山央子氏 (お茶の水女子大学院) は、自然環境を含め人間と社会の再生産にかんする問題が放逐の起こる場であからさまに置き去りにされている点を指摘し、また国際的な安全保障や軍事的暴力と、政治経済を接続する方法を探していると述べた。議論のなかでサッセン氏は、現状の広範に浸透している監視や権利主体の分解的な所有へ抗う、概念的なプロジェクトとして、再ローカル化 (端的には多国籍企業の力をかりないこと) と〈グラウンド (ground)〉を挙げていた。〈グラウンド〉は実質的な責任と権威的な選択をともない、米国であれば即座に軍事的な含意を想起させる言葉というが、それでもなお、監視されることのない、わたしの〈グラウンド〉といえる場を拡げていく試みには希望を見いだしうるという。

レクチャーの最後で、サッセン氏は、大きな変化が必ずしも可視的とは限らないと述べた。1970-1980 年代、都市は貧困化し荒廃しもう終わりだという言説が支配的であった。しかしグローバリゼーションとデジタル化が進むなかで、偉い専門家たちには見えていない、新しい経済はすでにあったのだ。それは、昼間ウォール街を仕切っていると豪語する人たちには見えずとも、外国人としてニューヨークに来たサッセン氏が清掃労働者たちに案内された真夜中のビルに確かに息づいていた。既存のカテゴリーでは、その多くが女性である当の清掃員たちは存在しないことになっていたにもかかわらず。そこには、サッセン氏がいう、フェミニスト研究に携わる、あるいはフェミニスト的角度から研究の営みに携わるひとたちに通じる、自由とその人自身の経験がもたらす深い知識があるのだ。不可視であってもその存在を見抜き、可視であるものがなぜ見えているのかを探ることの鍵が、そこにあるのかもしれない。

記録担当：janis

▶ 2018 年度 主催 IGS 研究会詳細

IGS 研究協力員　研究報告会

【日時】2018 年 7 月 30 日（月）15:00〜16:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 408

【司会】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【報告】
平野恵子
「『技能化』と組織化：インドネシアにおける移住・家事労働者の権利保護」
マウラ・スティーブンス
「日本における生理に関する医療人類学的研究」

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】11 名

【開催報告】

2018 年 7 月 30 日（月）、ジェンダー研究所研究協力員の研究報告会を開催した。報告者は、2018 年度の IGS 研究協力員である平野恵子とマウラ・スティーブンスである。

最初の報告者の平野研究協力員は、現在、科研費ですすめている研究について、「『技能化』と組織化―インドネシアにおける移住・家事労働者の権利保護」というタイトルで報告した。ILO189 号条約（The International Labor Organization’s Convention #189 (ILO C189)）は、家事労働者のディーセントワーク（働きがいのある人間らしい仕事）に関する世界的に影響力のある条約である。インドネシアはこの条約に批准していないが、平野はこの条約の存在が、インドネシアで起こった家事労働者の権利運動をとおして、家事労働がディーセントワークとなるよう、移住労働者保護法を成立させ、国内の家事労働者の組織化を促したことを紹介した。

その一方で、インドネシアには、まだ家事労働者の保護とそのための規制は存在していないという。今後の改善のためには、家事労働者の組合と家事労働者使用者（雇用主）の団体との社会的な対話が必要だが、そもそも家事労働者使用者団体が存在していないため、社会的な対話は実現しない。そのため、移住家事労働者がインドネシアでの家事労働の経験で培ったスキルを生かして、帰国後に何か（レストランのウエイトレス等）をしたいと思っても、家事労働者や彼女たちのスキルに対する社会的な承認が得られないため、技能を持った人として認可されない。そのため、インドネシアの家事労働者の権利運動にも限界が見えていると述べた。

二人目の報告者であるマウラ・スティーブン研究協力員は、「日本における生理に関する医療人類学的研究」について報告した。

スティーブンスは、米国ハワイ大学から国際交流基金フェローとして、お茶の水女子大学のジェンダー研究所に研究協力員として 10 か月間（2017 年 9 月 14 日～2018 年 8 月 31 日）滞在した。その間に、日本の女子大学生（協力者 20 名）を対象に生理に関するインタビュー調査を実施し、日本人女性の個人的な経験を起点に、月経を通じた女性身体の医療化の問題や生理休暇を含む制度的・政策的対応等を医療人類学の立場から分析した。

報告時、まだ調査の途中段階であるため、明確な結果は示されなかったが、女性たちがどのように生理について習ったのかや、初潮を迎えた時の記憶、生理に関する不安や悩み、生理前と生理中の身体的、感情的、精神的変化、また生理用品について等、興味深いデータが示された。本研究のデータは、ハワイ大学に戻ってから本格的に分析される予定で、最終的には学会での口頭発表や論文、書籍としても公表する予定だという。

記録担当：仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

ノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターとの研究会

【日時】2018 年 11 月 27 日（火）10:00〜13:00

【会場】人間文化創成科学研究科棟 408

【出席者】

Jennefer Branlat（ノルウェー科学技術大学学際的文化研究学部准教授）／Kristine Øygardslia（同　ポスドク研究員）

石井クンツ昌子（IGS 所長）／申琪榮（IGS 准教授）／大橋史恵（IGS 准教授）／板井広明（IGS 特任講師）／仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）／大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）／吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）／佐野潤子（グローバルリーダーシップ研究所（IGL）特任講師）

【オブザーバー参加】

ジャン・バーズレイ（IGS 特別招聘教授）／小林誠（IGL 所長）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【趣旨】

2016 年秋以来、共同研究プロジェクト実施を目指した交流を進めているノルウェー科学技術大学（NTNU）のジェンダー研究センター（SKF）の研究者が来日し、両研究所で実施されている研究プロジェクトについての情報交換を目的とした研究会を開催した。

【開催報告】

2017 年 9 月に石井、吉原、佐野が SKF を訪問した際に持たれたものに続く、2 回目の研究情報交換の研究会である。前回は、ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金（INTPART）申請に向けて、互いの組織について紹介し合うという位置づけであったが、今回は、同助成金の審査結果を待ちながら、具体的な共同研究プロジェクトのテーマについて模索する機会となった。IGS、SKF 双方から、進行中の研究プロジェクトについての報告があり、昼食をはさんでディスカッションが行われた。

研究会後の 2018 年 12 月、共同申請した INTPART 助成金の採択が決定した。プロジェクト名は「Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)」（IGS では「ジェンダー平等／ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」または「INTPART プロジェクト」の呼称を使用する予定）。2019〜2021 年度に渡り、共同研究、互いの大学に滞在しての在外研修、修士・博士院生の共同指導、ワークショップ・セミナーの開催を進め、事業成果を書籍として刊行することを目標としている。

▶ 2018 年度 協力シンポジウム

シンポジウム

育児期親子の IT とソーシャルメディア活用

日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較

【日時】2019 年 2 月 2 日（土）13:30〜17:00

【会場】理学部 3 号館 701 室

【総合司会】
加藤邦子（川口短期大学教授）

【基調講演】
榊原洋一（お茶の水女子大学名誉教授、ベネッセ教育総合研究所常任顧問・チャイルド・リサーチ・ネット所長、日本こども学会会長、小児科医）

【パネリスト】
李秀眞（弘前大学准教授）
根本宮美子（京都外国語大学教授）
高橋美恵子（大阪大学教授）
石井クンツ昌子（お茶の水女子大学教授／IGS 所長）

【パネルディスカッション司会】
牧野カツコ（お茶の水女子大学名誉教授）

【主催】お茶の水女子大学 IT 科研研究会（石井クンツ昌子研究室）

【協力】ジェンダー研究所

【参加者数】103 名

4. 特別招聘教授 プロジェクト

2018 年度特別招聘教授
プロジェクト概要

1) ジャン・バーズレイ特別招聘教授

2) デルフィーヌ・ガルディ
特別招聘教授

▶ 2018 年度　特別招聘教授プロジェクト概要

領域・文化横断的なジェンダー研究の知見の共有

「特別招聘教授プロジェクト」の主な目的は、グローバルな視野から本学のジェンダーに関する教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることである。海外の著名な研究者を招聘し、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウムの企画・登壇を含む国際的な研究ネットワークの構築、大学院生を対象としたセミナー等での講義による国際レベルのジェンダー研究教育プログラムの実施に貢献していただき「国際的研究拠点」としての研究所の総合力を向上させる重要な事業である。2018 年度は、**ジャン・バーズレイ**氏（ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）、**デルフィーヌ・ガルディ**氏（ジュネーブ大学教授）の 2 名を招聘した。

近代以降の日本の女性表象研究を専門とする**バーズレイ**氏は、舞妓表象と冷戦初期の女性表象についての研究プロジェクトを進めている。舞妓表象研究については、その成果の一部を、IGS 英語セミナー「Millennial Maiko: The Geisha Apprentice in Japanese Popular Culture（ミレニアル舞妓さん：日本のポピュラーカルチャーにおける舞妓像）」で発表してくださった。国際シンポジウム「Arab Women and Transgression: At the Boundary of Good and Bad（アラブ世界の女性と逸脱：グッドとバッドの境界で）」では、女性が社会的制約を乗り越えて、身体表象などの形で声を上げることをテーマにした企画をしていただいた。大学院講義「Chasing Madam Butterfly: The Gender of Japonisme（『蝶々夫人』を追いかけて：ジャポニスムのジェンダー）」では、女性表象を研究テーマとする学生に対し、熱心な指導をしてくださった。

歴史、社会学、ジェンダー研究を専門とする**ガルディ**氏の研究プロジェクトは、これまで欧州の事例について進めてきた研究の進展として、日本における議会の女性排除をもたらす文化構造を研究するものである。フランスおよび英国議会についての研究成果については、国際シンポジウム「Who can be a Representative? Engendering Legislative Bodies: Lessons from the French Historical and Political Context（議員になれるのは誰なのか？ フランスの政治と議会史からみる立法府のジェンダー化）」で発表してくださっている。また、IGS 英語セミナー「Bodies, Collective Action and Democracy: Engaging with Judith Butler's Work（主体、社会運動、民主主義：ジュディス・バトラーによる理論構築の検討）」では、2016 年刊行の共編著書の内容を基に、ジェンダー研究分野で特に重要とされているジュディス・バトラーの理論を取り上げた講義をしていただいた。

2018 年度の特別招聘教授プロジェクトにより、特に、ジェンダー研究という学問分野の意義と、日本における国際的研究教育拠点としての本研究所の存在意義を再確認する機会をいただいたと思う。両氏が講師や企画を担当したセミナーやシンポジウムは、いずれも、領域横断的というジェンダー研究の特性や、文化横断的という国際性を備えたものである。そうした特徴は本研究所の事業が目指すものに沿っており、同様の方向性でジェンダー研究・教育に取り組む海外の研究者が、招聘に応じてくれる要因となっていると考えている。

1）ジャン・バーズレイ特別招聘教授プロジェクト

【ジャン・バーズレイ特別招聘教授プロフィール】

ノースカロライナ大学チャペルヒル校アジア研究科アジア学教授（日本史）。カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士（東アジア言語と文化）。研究分野は日本の女性像とその表象である。『冷戦期日本の女性とデモクラシー』（ブルームスベリー学術出版、2014 年、英語）をはじめ、著書多数。『日本の「青鞜」：1911 年から 1916 年までの「青鞜」の新しい女のエッセイとフィクション』（ミシガン大学日本研究センター、2007 年、英語）では、2011 年の平塚らいてふ賞（日本女子大学）を受賞。また、ドキュメンタリー映画 2 本の作成にも携わるなど、広範かつ大変優れた研究実績を有している。また、アジア研究学会（南東部）の会長を務め、多くの学術誌編集に編集長や論文審査員として携わるなど、学術界への貢献度も高い。

【業績および期待されるプロジェクト成果】

ジャン・バーズレイ博士の専門領域は日本学研究で、これまで日本の近現代の文化、社会、女性に焦点を当てた研究を展開し、多くの優れた研究実績を挙げている。特に、近年の日本における女性の表象に関する著書と論文では、日本学研究者のみならず、ジェンダー研究者や社会学者からも、日本社会における女性の活躍についての理解を深めることにつながったという高い評価を得ている。バーズレイ氏は日韓米における研究ネットワークも確立しており、本学においてジェンダー研究所を拠点としたグローバルな共同研究ネットワークの構築に寄与することが可能である。また、バーズレイ氏の研究テーマは、独自の視点を持った大変興味深いものである。バーズレイ氏には 2017 年にジェンダー研究所が主催した国際シンポジウムにおいて基調講演者として登壇していただいた。このシンポジウムに参加した学生・院生及び学内外の研究者に好評を博した講演であったことからも、本学の研究者・院生にとって、多くのことを学ぶ機会をもたらすことが期待できる。

【採用期間】　2018 年 8 月 2 日～2019 年 7 月 31 日

【職務内容およびその支援】

バーズレイ特別招聘教授に依頼した業務は、下記の 5 項目。ジェンダー研究所スタッフが事務業務の支援および研究補助を担当。

1）ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進
2）大学院セミナーでの講義など教育事業への参加
3）国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告
4）ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援
5）上記活動についての成果報告

【プロジェクト概要】

1）研究プロジェクトの実施：書籍刊行プロジェクト 2 件

①舞妓表象研究『Maiko: Imagining Geisha Girlhood in Japan』　カリフォルニア大学出版（近刊予定）

・2018 年 8 月から 2019 年 2 月にかけて、全編（7 章）の原稿の第 1 稿を書上げた。

・本プロジェクト成果に基づくセミナーを 2019 年 2 月 8 日に開催（本学院生、研究者対象）

②50 年代冷戦期の女性表象『Democracy's Poster Girls: Beauty Queens and Fashion Models in Cold War Japan』

・ファッション史資料の調査を実施した。

2）ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営および総合司会登壇

■国際シンポジウム「アラブ世界の女性と逸脱：グッドとバッドの境界で」（2018 年 10 月 14 日）

現代のアラブ社会の若い女性たちが、女性であることによる社会的制約をどのように乗り越えて、自分を表現することに取り組んでいるかに焦点を当てる内容。ノースカロライナ大学チャペルヒル校のナディア・ヤクーブ教授とギルフォード・カレッジのディヤ・アブド准教授を基調講演者として招聘。聴衆を交えてのディスカッションでは#Me Too 運動への言及もなされ、日本において女性が声を上げることの難しさなどについて活発な議論が持たれた。米文学を専門とする本学の戸谷陽子教授のコメンテーター参加を得、学内の研究者との連携を強化すると同時に、人文学分野への研究ネットワークの拡大を図ることができた。

［参照：本報告書 45～47 頁］

3）大学院生対象の英語によるセミナー講師

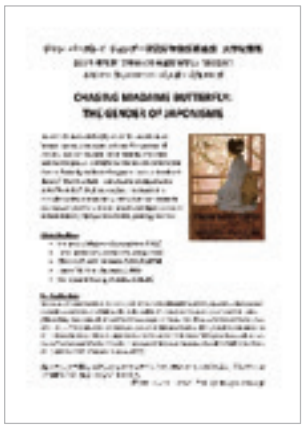
■IGS セミナー「ミレニアル舞妓さん：日本のポピュラーカルチャーにおける舞妓像」（2019 年 2 月 8 日）

書籍執筆中の舞妓表象研究の成果に基づく講義。21 世紀の現在、舞妓は、その「カワイイ」姿が人気を集める京都のイメージキャラクターとなっているが、1950 年代には、身売りや売春という暗い影を持つ存在であった。そのイメージの変遷を、1950 年代と 2000 年代の映像作品の比較により分析した。参加院生の専攻はジェンダーや比較文化など様々であり、専攻の枠を超えた議論も持たれた。日本語の映像作品のセリフの英語訳を自ら手掛けて配布資料にまとめるなど、講師の研究の手法や研究対象に向き合う姿勢について知る機会にもなった。

［参照：本報告書 71～72 頁］

4）大学院講義

■博士前期課程対象「Chasing Madame Butterfly: The Gender of Japonisme」（2018 年度後期）



博士前期課程共通科目「男女共同参画国際演習 II」［18S0260］を担当。『蝶々夫人』を主題に、西洋文化における日本人女性の表象についての知識を深め、研究者としてのスキルを身に着けることを目標とする内容。文献講読と演習を中心とした、英語による講義。登録は聴講 1 名であったが、履修登録外の聴講を含めて 4 名の学生がほぼ毎回出席し、課題を提出した。学部生から博士後期課程生まで、かつ、英語スキルのレベルも異なる学生たちであったが、そのひとりひとりに対し丁寧な指導をしていた。

【プロジェクト成果】

2018（平成 30）年度のジャン・バーズレイ特別招聘教授プロジェクトは、特に教育面で大きな成果があったと言える。大学院講義「男女共同参画国際演習 II」には、その主題であるジェンダー表象について、高い関心を持つ学生が集まった。その熱心な講義参加の姿勢に、バーズレイ氏も驚きと称賛を表している。そして、バーズレイ氏の熱意溢れる指導の姿勢も、その成果をもたらした要因である。受講成果が、それぞれの学生の学位論文などに、どのように表れるかも楽しみである。

2018 年 10 月 14 日開催の国際シンポジウムは、バーズレイ氏の共編著書『Bad Girls of Japan』（2005 年）に触発されて執筆編集が進められた『Bad Girls of the Arab World』（2017 年）の編著者、執筆者を招聘しての企画であった。研究者同士の交流やネットワーキングが、新たな研究成果を生み出すということが顕在化された企画であるといえる。そして、本学の戸谷陽子教授やジェンダー研究所の研究者が議論に加わったことで、新たな研究者同士のつながりが生み出された点も重要である。また、討論の際には、社会人の参加者からの発言が数多く聞かれ、ジェンダー研究所の事業成果が、生涯学習の場を提供する形で社会還元されていることを確認できた。

研究については、表象研究という人文科学分野の研究プロジェクトが加わったことで、ジェンダー研究所において実施されている研究の学際性を向上させる成果をもたらしている。この点は、先に述べた大学院講義および国際シンポジウム、バーズレイ氏が講師を務めた IGS セミナーにも反映されている。バーズレイ氏のセミナーなどで人文科学系の研究視点について学ぶことは、本学のジェンダー研究そして教育の質の向上につながるものである。8 月からの数カ月の間に、舞妓研究の書籍 1 冊分の原稿を書き上げる精力的な仕事ぶりは、研究所所属の研究者への大きな刺激ともなっている。

バーズレイ氏は、ジェンダー研究所が刊行する学術雑誌『ジェンダー研究』の編集委員の任にも就いている。ジェンダー研究所やリーダーシップ研究所が企画するシンポジウムやセミナーにも積極的に参加しているほか、所属の研究者やスタッフともよくにコミュニケーションをとっており、研究所そして機構全体の活性化の源にもなっている。また、所員が作成する英語の文章のチェックを喜んで引き受けてくれるなど、協調性や協働意欲が高く、着任後早期から研究所の一員として事業活動に深く関与し、研究所事業に貢献している。

2）デルフィーヌ・ガルディ特別招聘教授プロジェクト

【デルフィーヌ・ガルディ特別招聘教授プロフィール】

ジュネーブ大学教授（現代史）。専門分野はフランス史と社会学。ジュネーブ大学では 2009～2017 年ジェンダー研究所長を務めたほか社会科学研究院副院長も歴任。パリ大学などの高等教育機関にて研究・教育職に従事したほか、マックス・プランク科学史研究所およびベルリン高等研究所、パリ高等研究所フェローとして研究実績を積む。研究関心は、社会史・ジェンダー史、フェミニスト理論、ジェンダーと科学技術、科学技術社会論、インフォーメーション社会史、議会の歴史と人類学研究など。代表的著作に、ジェンダー視点からフランス議会史を考察した単著『ブルボン宮殿のリネン：民主主義の時代における身体、物質性とジェンダーの政治』［仏語］（2015 年）、共編著による、ジェンダーと生物医学、セクシュアリティをテーマにした『欲望の科学：女性のセクシュアリティの精神分析から神経科学まで』［仏語］（2018 年）、フェミニスト理論・社会理論をテーマにした『協調の政治：ジュディス・バトラーと社会運動について考える』［英語・仏語］（2016 年）がある。

【業績および期待されるプロジェクト成果】

デルフィーヌ・ガルディ博士の専門領域は、歴史、社会学、ジェンダー研究で、これまで、フランスの政治や企業における女性の表象などについて、歴史・社会・ジェンダー視点から研究を展開し、多くの著書や論文を含む、優れた研究実績を有している。特に、2015 年出版の著書『ブルボン宮殿のリネン：民主主義の時代における身体、物質性とジェンダーの政治』では、学際的な観点から、フランス政治における男女格差を指摘しており、西欧研究や政治学のみならず、様々な分野の研究者から高い評価を得ている。ガルディ氏は、西欧および米国の研究者とのネットワークも確立しており、本学において、ジェンダー研究所を拠点としたグローバルな共同研究ネットワークの構築に寄与することが期待される。また、ガルディ氏の研究テーマは、独自の視点を持った大変興味深いものであり、本学の研究者・院生にとって、多くのことを学ぶ機会をもたらすことが期待できる。

【採用期間】　2018 年 12 月 1 日～2019 年 1 月 31 日

【職務内容およびその支援】

ガルディ特別招聘教授に依頼した業務は、下記の 5 項目。ジェンダー研究所スタッフが事務業務の支援を担当。本学博士後期課程ジェンダー学際研究専攻院生が研究補助を務めた。

1）ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進
2）大学院セミナーでの講義など教育事業への参加
3）国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告
4）ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援
5）上記活動についての成果報告

【プロジェクト概要】

1）研究プロジェクトの実施

■議会文化のジェンダー化についての国際比較

儀礼、空間、建築、象徴などの議会文化と、ジェンダーをめぐる議会環境が女性の存在にどう影響しているかについて、欧州での研究結果を日本の状況と比較する。仏語または英語で発表されている関連文献講読と、衆参両議院の傍聴、議場見学、憲政記念館見学などのフィールドワーク調査を実施。

2）ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画および研究報告

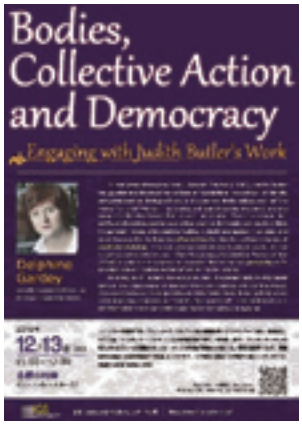
■国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか？：フランスの政治と議会史からみる立法府のジェンダー化」（2019 年 1 月 21 日）

議会民主主義制度が女性を「代表」から排除してきた構造を歴史文化的に検証し、その改善のために導入されているクオータ制度の実効性を分析する内容。ローザンヌ大学のエレオノール・レピナール准教授とガルディ特別招聘教授が基調報告を担当。上智大学の三浦まり教授と、日本学術振興会特別研究員（PD）の村上彩佳氏がコメンテーターを、ジェンダー研究所の申琪榮准教授が司会を務めた。社会制度には、その背後にある文化や思想が反映されていることや、「クオータ」から「パリテ（均等）」というパラダイムシフトが、女性の政治参画の向上に有効であることなどが議論された。

［参照：本報告書 48～50 頁］

3）大学院生対象の英語によるセミナー講師

■IGS セミナー「主体、社会運動、民主主義：ジュディス・バトラーによる理論構築の検討」（2018 年 12 月 13 日）



共編著書『協調の政治：ジュディス・バトラーと社会運動について考える』を基に、ジェンダー理論、セクシュアリティ理論、身体論、社会運動論等へのジュディス・バトラーの貢献について再考し、それを伸展させて、現代社会における「考える」方法や、「政治的になる」とはどういうことか、フェミニズムを超えた「協調体制」とは、について検討する内容。難解とされることの多いバトラーの理論の発展を追っての解説は、大学院生を中心とする出席者の理論理解を助け、考察を深めさせた。

［参照：本報告書 69～70 頁］

【プロジェクト成果】

2018（平成 30）年度のデルフィーヌ・ガルディ氏招聘は、研究所の特別招聘教授プロジェクトに新しい局面をもたらしたといえる。他の特別招聘教授が、日本を研究フィールドとしているのに対し、ガルディ氏はフランスなど欧州諸国の研究が業績の中心であり、今回の日本滞在は、研究関心のフィールドを日本に伸展させる起点であった。研究面でのサポートは特に準備を要するものであったが、リサーチアシスタントを務めた博士後期課程院生の高橋加織さんが、重要な働きをしてくれた。また、滞在期間は年末年始を挟む 2 ヵ月間と限られていたが、その間に精力的に調査を進め、所内・学内および他大学のジェンダー研究者と交流し、セミナーなどの機会に学生と熱心な議論を交わす研究姿勢や、シンポジウムやセミナーでの、歴史学、社会学、人類学に足場を置く学際的なジェンダー研究の成果の発表は、研究所所属研究者や院生への大きな刺激ともなった。

2019 年 1 月 21 日の国際シンポジウムは、申琪榮准教授との共同企画であった。欧州各国におけるクオータ制度のありようと実効性について研究するエレオノール・レピナール氏と、申准教授の共同研究者である三浦まり氏が登壇する企画は、欧州地域における研究と、申准教授が日本および東アジア地域で進めている女性の政治参画についての研究をつなぐものになったといえる。これにより、それぞれの研究ネットワークをつなぎ、拡充する成果をもたらすことが期待される。また、女性の政治参加を主題に、歴史文化的背景と現代の制度についての報告を並べるプログラム構成は、事象についてのより深い理解をもたらすものであった。これは、本研究所が進めてきた、学際的なジェンダー研究という枠組みならではの成果と認識している。

2018 年 12 月 13 日のセミナーは、理論を主題とするものであった。ジュディス・バトラーによる身体論や存在論の議論は、ジェンダー研究においてとくに重要とされる議論であり、かつ、ジェンダー研究という領域がもたらした学術の発展の代表例のひとつである。これについての理解を深めると同時に、それをどう伸展させられるかという議論をするセミナーは、本学でジェンダー研究に取り組む院生にとって、貴重な学びの場であった。

以上の成果から、本特別招聘教授プロジェクトは、ジェンダー研究という学問分野の意義と、日本における国際的研究教育拠点としての本研究所の存在意義を、再確認する機会になったと理解している。

5. 国際研究ネットワーク

2018 年度
国際研究ネットワーク構築概要

１）海外研究交流

２）国際共同研究プロジェクト

３）JAWS・AIT

４）海外研究者フェローシップ受入

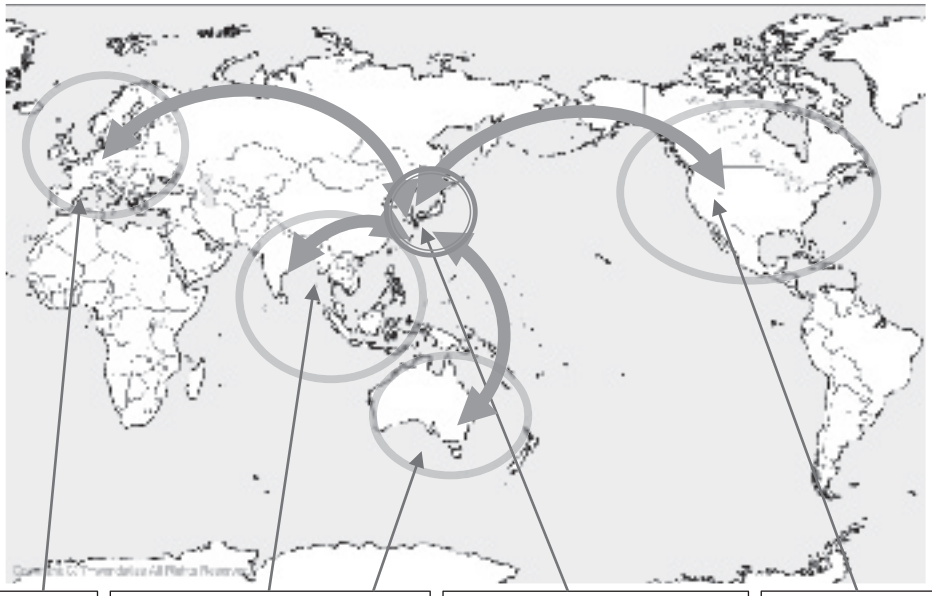
５）国内外招聘研究者一覧

▶ 2018 年度国際研究ネットワーク構築概要

12 カ国の研究機関・研究者との国際研究・交流ネットワーク

ジェンダー研究所は日本におけるジェンダー研究の中核的な役割を担いながら、国内・海外の研究機関及び研究者らと広くネットワークを構築してきた。定期的に海外から優れた研究者を招聘するほか、海外からの若手研究者の受入れと日本からの派遣、国際共同研究に積極的に取り組んでいる。2018 年もアジア、ヨーロッパ、アメリカの研究者らと交流を進めて具体的な成果を出した。ジェンダー研究所が拠点として進めてきた日本―アメリカ女性政治学者の交流（JAWS）プログラムが、2018 年はアメリカ政治学会の支援を得てボストンで開催された。今年は日米の若手研究者の交流やコーチングに重点を置いた。また、ノルウェー科学技術大学のジェンダー研究センターとは共同研究に向けた研究助成金に申請し、採択される成果を挙げた。

ジェンダー研究所を拠点とする国際ジェンダー研究ネットワークイメージ



ヨーロッパ

ノルウェー：ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター
フランス：パリ第 2 パンテオン・アサス大学
イギリス：ロンドン大学

《特別招聘教授》
スイス：Delphine Gardey（ジュネーブ大学）

招聘研究者 5 名（115 頁参照）

アジア・オセアニア

台湾：国立台湾大学/台湾国立政治大学
韓国：釜山大学/韓国ジェンダー政治研究所/韓国女性開発研究所/大韓民国近代歴史博物館/韓国ジェンダー政治研究所/ソウル大学日本研究所/ソウル大学国際問題研究所/「East Asian International Relations Theory」研究会
タイ：アジア工科大学院大学（AIT）
フィリピン：フィリピン大学ディリマン校/ Scalabrini Migration Center
インドネシア：スラバヤ大学/Migrant CARE /インドネシア大学戦略的国際研究大学院ジェンダー研究センター
インド：インド工科大学
オーストラリア：モナシュ大学/スウィンバーン工科大学

招聘研究者 4 名（115 頁参照）

日本国内

政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（Gender, Diversity and Representation（GDRep））
日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会
国際移動とジェンダー研究会
現代規範理論研究会
Transnational Commercial Surrogacy and the (Un)Making of Kin 研究会

招聘研究者 18 名（116 頁参照）

北米

米国：日本―アメリカ女性政治学者シンポジウム（Japan-America Women Political Scientists Symposium, JAWS）/American Political Science Association/ワシントンカレッジ/アメリカ大学/ブリッジポート大学/ドライク大学/シモンズ大学

《受け入れフェロー》
米国：Maura Stephens(ハワイ大学)

《特別招聘教授》
米国：Jan Bardsley（ノースカロライナ大学チャペルヒル校）

招聘研究者 7 名（115 頁参照）

1）海外研究交流

■ジェンダー研究所所属の研究者が 2018 年度に研究交流または共同研究をした海外の研究者

黄長玲（Chang-Ling Huang）（国立台湾大学教授）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施。（本報告書 18 頁参照）

楊婉瑩（Wan-Ying Yang）（台湾国立政治大学教授）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施。（本報告書 18 頁参照）

Ah-ran Hwang（釜山大学教授）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。（本報告書 20 頁参照）

Jinock Lee（韓国ジェンダー政治研究所研究委員）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。（本報告書 20 頁参照）

Soo-hyun Kwon (韓国ジェンダー政治研究所研究委員）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。（本報告書 20 頁参照）

Chia-Ling Wu（国立台湾大学准教授）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究交流の概要】

2015 年にはじまった台湾の不妊治療支援事業と日本の最新の不妊治療支援事業の内容について、情報交換。（本報告書 25 頁参照）

Jung-Ok Ha（大韓民国近代歴史博物館）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究交流の概要】

韓国で 2006 年から開始されている不妊治療支援事業と日本の最新の不妊治療支援事業の内容について、情報交換。（本報告書 25 頁参照）

Yoon Jiso（韓国女性開発研究所研究員）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【共同研究・研究交流の概要】

韓国女性開発研究所は韓国政府の総理府管轄のシンクタンク（1983 年設立）。女性や家族の問題について包括的な研究を進め、女性の政治参加や福祉の促進に貢献している。所属のジソ・ユン研究員と日韓の人口政策としての不妊治療費支援についてリプロダクティブライツの視点から共同研究。（本報告書 25 頁参照）

Anindita Majumdar（インド工科大学准教授）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究交流の概要】

生殖ツーリズムについて情報交換。Mjumdar 氏にはインドの代理出産について情報提供をしてもらい、日本側からは、日本のカップルが代理出産や卵子提供を求めて海外に渡る生殖ツーリズムについての情報を提供した。（本報告書 24 頁参照）

Jean Encinas Franco（フィリピン大学ディリマン校准教授）

【担当】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究交流の概要】

フィリピン大学は 1908 年に設置されたフィリピンを代表する国立大学で、その中の最大キャンパスであるディリマン校は 1985 年に設立。政治学部 Jean Encinas Franco 准教授と研究会議実施。（本報告書 33 頁参照）

Karin Hammarberg（モナシュ大学シニアリサーチフェロー）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究交流の概要】

科研基盤 C「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出自を知る権利の対立への対処に関する研究」（研究代表：仙波）のために、研究協力してもらった。オーストラリアのヴィクトリア州で 2017 年 3 月から施行されている *Assisted Reproductive Treatment Amendment Act 2016* (Vic)についての調査支援、および、法制定に向けた準備の中で問題になったことや法の施行後に起こっている出来事などの情報提供を受ける。（本報告書 26 頁参照）

Deborah Dempsey（スウィンバーン工科大学准教授）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究交流の概要】

科研基盤 C「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出自を知る権利の対立への対処に関する研究」（研究代表：仙波）のために、研究協力してもらった。オーストラリアのヴィクトリア州で 2017 年 3 月から施行されている *Assisted Reproductive Treatment Amendment Act 2016* (Vic)の施行に至るまでの歴史的経緯について情報提供を受ける。（本報告書 26 頁参照）

Khanis Suvianita（スラバヤ大学非常勤講師）

【担当】平野恵子（IGS 研究協力員）

【研究交流の概要】

科学研究費・基盤研究 C「インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合」（研究代表者・中谷潤子、大阪産業大学）における現地共同調査。（本報告書 37 頁参照）

Anis Hidayah（Migrant CARE 移民研究センター長）、Wahyu Susilo（Migrant CARE 代表）

【担当】平野恵子（IGS 研究協力員）

【研究交流の概要】

移住労働者送出し法制度改正および日本への技能実習生送出しに関し、意見交換をおこなった。科学研究費・基盤研究 C「現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容」（研究代表者・平野）の研究助成による。（本報告書 36 頁参照）

Anne Brunon-Ernst（パリ第 2 パンテオン・アサス大学教授）

【担当】板井広明（IGS 特任講師）

【研究交流の概要】

パリ政治学院「ナッジ・プロジェクト」責任者の一人であるアン・ブルノン教授との「ナッジ」に関する共同研究について、オンラインミーティングなどを行なっている。

Elizabeth Evans（ロンドン大学教授）、Kimberly Cowell-Meyers（アメリカ大学助教授）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

Politics & Gender（アメリカ政治学会学会誌）の特集「Women's Party（女性政党）」の共同責任編集担当（2019 年発行予定）。

King's College London, Global Institute for Women's Leadership の web サイトにて、ブログを共著。

Linda Hasunuma（ブリッジポート大学助教授）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

英文学術雑誌 *Journal of Women, Politics and Policy*（2019）に共著論文"#MeToo in Japan and South Korea: #WeToo, #WithYou,"執筆。2019 年度 JAWS（ボストン）の共同ファシリテーター。IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」のパネリストとして論文発表。（本報告書 65 頁参照）

Mary M. McCarthy（ドライク大学准教授）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」のパネリストとして論文発表。（本報告書 65 頁参照）

Denise M. Horn（シモンズ大学准教授）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」のパネリストとして研究発表。（本報告書 65 頁参照）。

Melissa Deckman（ワシントンカレッジ教授）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

第 9 回 JAWS（ボストン開催）にて共同でファシリテーター担当。（本報告書 104～106 頁参照）。

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター

ノルウェー最大の大学 NTNU に属する、1989 年設立の研究センター。人間関係や文化とジェンダーの関連性およびそれらの変容に着眼した、学際的なジェンダー研究に取り組んでいる。ノルウェー国内のジェンダー研究の中心拠点でもあり、国際的なネットワーク構築も積極的に進めている。

【担当】石井クンツ昌子（IGS 所長）、小玉亮子（IGS 研究員）、吉原公美（IGS 特任 RF）、ほか

【共同研究・研究交流の概要】

2018 年 11 月 27 日（火）NTNU 研究者本学来訪、研究会開催。2019 年 1 月 12 日（土）開催国際シンポジウムにアン・ボルグ副学長招聘。ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 INTPART 採択。2019 年度より 3 年間、同助成金による共同プロジェクトを実施する。

アジア工科大学院大学（AIT）環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻

1959 年創立で 60 以上の地域から 1700 人以上の学生が学んでいる理工系を中心とした全寮制の大学。学内公用語は英語で、当該専攻はジェンダー視点から開発の問題を研究している。

【担当】日下部京子（AIT 教授）、申琪榮（IGS 准教授）、板井広明（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

本学ジェンダー社会科学専攻院生の AIT 派遣、AIT 院生の日本でのフィールドワーク受入による交換研修プログラム、「AIT ワークショップ」を実施し（本報告書 107〜113 頁参照）、国際的な視点を持った若手研究者の育成およびアジア各国出身学生との研究交流を進めている。

韓国ジェンダー政治研究所

韓国ジェンダー政治研究所は 1999 年に設立された NPO。政治分野におけるジェンダーギャップを解消するために世論喚起、研究、ロビー活動を行っている当該分野で代表的な民間研究所。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

当研究所理事を務める。2016 年〜2018 年に韓国研究財団から助成金を受託し、共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表制の性差についての公式・非公式制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。（本報告書 20 頁参照）

ソウル大学日本研究所

日本研究の活性化と日韓相互理解の増進を目標として 2004 年に設立。日本関連資料の収集、国際学術会議、学術活動事業、情報ネットワーク構築、次世代日本専門家の養成等の事業を遂行。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

学術雑誌『日本批評』海外編集委員。ならびに共同研究プロジェクト『思想と文学』共同研究員を務める。

ソウル大学国際問題研究所

ソウル大学政治外交学部に設立され、外交問題や国際政治の研究に取り組む研究所。研究活動の一部として Social Science Korea「East Asian International Relations Theory」を遂行。
【担当】申琪榮（IGS 准教授）
【共同研究・研究交流の概要】
Social Science Korea「East Asian International Relations Theory」共同研究員。東アジアの国際関係理論におけるフェミニスト国際政治、日本研究を担当。

Scalabrini Migration Center

フィリピン・マニラにある、国際移動、特にアジア太平洋地域の国際移動に関する学際的な研究を促進するために 1987 年に開設された民間の研究所。移民研究に関する書籍や雑誌の発行、研修プログラムの企画、移民の権利擁護のための活動、学術機関や市民社会、国際機関や政府とのネットワーク構築などを行っている。
【担当】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）
【共同研究・研究交流の概要】
科研基盤 B「日比間の人の移動における支援組織の役割～移住女性と JFC の経験に着目して」（代表：小ケ谷千穂）の調査および研究会議。（本報告書 33 頁参照）

インドネシア大学戦略的国際研究大学院ジェンダー研究センター

インドネシア国内で初めて女性学・ジェンダー研究に関する大学院を設置。研究者のみならず、政府関係者（中央、地方）、社会運動家、起業家等、多くの人材を輩出している。本研究センターは、大学院所属ジェンダー研究を専門とする教員より構成される。
【担当】平野恵子（IGS 研究協力員）、Sulistyowati Irianto（インドネシア大学教授、センター員）
Mia Siscawati（インドネシア大学教員、センター長）、Shelly Adelina（インドネシア大学教員、センター員）、Ani Widyani Soetjipto（インドネシア大学教員、センター員）
【研究交流の概要】
2008 年以降、定期的に研究交流を実施している。今年度は特に、①移住労働者送出し法制度の変更、②2019 年 4 月実施予定の大統領選挙、総選挙、地方自治体首長選挙、統一地方選挙における女性運動の関わりについて、情報提供を受けた。

【国内外関連研究会】

〇政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（Gender, Diversity and Representation（GDRep））
「『政党行動と政治制度』セミナー・シリーズ」実施
〈コーディネーター〉申琪榮（IGS 准教授）
〈メンバー〉三浦まり（上智大学教授）、Jackie Steele（東京大学准教授）
〇日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会（申）
〇「East Asian International Relations Theory」研究会（申）
〇国際移動とジェンダー研究会（大橋）
〇現代規範理論研究会（板井）
〇Transnational Commercial Surrogacy and the (Un)Making of Kin 研究会（仙波）
〇国内の女性学・ジェンダー研究センターとのネットワーク
ジェンダー関連学協会コンソーシアムへの参加　ほか

２）国際共同研究プロジェクト

ジェンダー研究所所属メンバーは、各国の研究者たちと国際共同研究プロジェクトを推進している。

プロジェクトタイトル

東アジアにおけるジェンダーと政治

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
【研究分担者】Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所
三浦まり	上智大学
Jackie Steele	東京大学
Chang-ling Huang	国立台湾大学
Wan-ying Yang	台湾政治大学

研究プロジェクト概要

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本、韓国、台湾の民主主義の有り様と政治代表性の関係について、ジェンダー視点に立脚した国際共同研究により比較分析する。議員を対象としたアンケート調査、政党、議員、市民社会関係者へのインタビューや現地でのフィールドワークを実施するほか、定期的な国際シンポジウムや研究集会を開き、研究交流を促進する。東アジア地域において、政治代表性の男性優位性が続くメカニズムを明らかにし、政治制度におけるジェンダー公平性・多様性を実現させる政策も検討する。2018 年は成果をまとめつつ国内外で成果発表に力を入れたほか、新たな科研が採択され、日本の国会議員へのアンケート調査の 2 度目行う準備を進めた。（本報告書 18 頁参照）

プロジェクトタイトル

議会内政治的代表制の性差についての公式・非公式制度要因分析 韓国・日本・台湾比較分析

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
【研究分担者】申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所

研究プロジェクト概要

2016 年度から韓国研究財団から助成金を受託し共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。ジェンダー研究所の「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクト（18 頁参照）の韓国調査を実施。2018 年は成果をまとめつつ国内外で成果発表に力を入れた。（本報告書 20 頁参照）

プロジェクトタイトル

Politics & Gender 共同編集

メンバー	メンバー所属研究機関
【共同責任編集者】	
申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Elizabeth Evans	University of London
Kimberly Cowell-Meyers	American University

研究プロジェクト概要

Politics & Gender（アメリカ政治学会学会誌）の「Women's Party(女性政党)」特集を企画し、アメリカ、イギリス、スウェーデンの研究者らと日本を含む 5 カ国における女性政党に関する事例研究を紹介（2019 年発行予定）。

プロジェクトタイトル

科学研究費・基盤研究 C「インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合」

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】中谷潤子	大阪産業大学
【研究分担者】平野恵子	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
北村由美	京都大学
Khanis Suvianita	スラバヤ大学

研究プロジェクト概要

本研究は、インドネシア人移住労働者の再統合について、帰還後のライフステージ構築の過程を本人や家族、コミュニティメンバーへの聞き取り調査をもとに明らかにする。2017 年度～2019 年度。最終年度である次年度は、国際学会での共同報告および調査報告書の発行を予定している。

プロジェクトタイトル

Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】石井クンツ昌子	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
【研究分担者】	
申琪榮／大橋史恵／仙波由加里	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
小玉亮子	お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系/ジェンダー研究所
佐野潤子	お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所
松田デレク	お茶の水女子大学国際教育センター
NTNU 研究者	ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター

研究プロジェクト概要

2018 年 12 月、お茶の水女子大学ジェンダー研究所とノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターが共同申請した、ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金（INTPART）の採択が決定した。プロジェクト名は「Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)」である。（IGS では「ジェンダー平等／ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」または「INTPART プロジェクト」の呼称を使用する予定。）。2019～2021 年度の 3 年間に渡り、共同研究および、互いの大学に滞在しての在外研修や、修士・博士院生の共同指導、ワークショップ・セミナーの開催といった活動を進め、最終的には事業成果を書籍として刊行することを目標としている。

３）JAWS・AIT

ジェンダー研究所は、次世代ジェンダー研究者を養成するための持続的な国際研究交流ネットワークの形成にも取り組んできた。その代表的な活動が「日本―アメリカ女性政治学者シンポジウム」（Japan-America Women Political Scientists Symposium, JAWS）と「AIT ワークショップ」である。

JAWS は、政治学分野でジェンダー研究を遂行する日米の女性研究者らが、日本とアメリカで交互に集まって研究交流を行うユニークな研究ネットワークである。参加者は、互いの研究交流はもちろん、若手研究者に参加を促して国際的な視点を身につけてもらうと共に、政治学分野でマイノリティーである若手女性研究者にメンタリングを行う。ジェンダー研究所は JAWS の活動拠点として、日本が開催地となる際は、研究集会・国際シンポジウムを主催し、成果発信にも努めている。

AIT ワークショップはお茶大の大学院前期課程「ジェンダー社会科学専攻」の院生と、タイのアジア工科大学院大学「ジェンダーと開発」専攻の院生達が、タイと日本でフィールドワークを実施しながら学び合う教育プログラムである。ジェンダー研究所は本プログラムを立ち上げた主体でもあり、現在まで派遣および受け入れの運営主体として若手研究者の国際交流に努めている。

▶ JAWS

■概要と歴史変遷

JAWS の歴史は 2000 年の夏に遡る。2000 年にアメリカン大学（American University）のカレン・オコナー（Karen O’Connor）教授が、同大学に「女性と政治研究所」（The Women and Politics Institute）を開設したことを記念して「女性と政治に関する比較政治学」ワークショップを主催したことがその始まりである。このワークショップに、アメリカ政治学会と日米友好基金（The Japan-US Friendship Commission）の支援を得て日本から 5 名の研究者が招かれ、同じく招かれた 7 名のアメリカの研究者らと 3 日間にわたって研究交流が行われた。

当時、日本の政治学の分野では、女性政治学者がとりわけ少数であったのみならず、ジェンダー視点に基づいた研究は、政治学研究としてほとんど関心を持たれていなかった。これがさらに若手女性研究者を遠ざけ、「女性と政治」分野の研究が進まない原因となっていた。そんな中で始まったアメリカの研究者との交流は、日本の研究者にとって国際的な研究動向に触れることに加え、日本で女性研究者が政治学を研究するときにぶつかる様々な壁について議論する場も提供した。女性研究者の地位向上や女性研究者が行っている研究への評価という問題は、アメリカの女性研究者らにとっても共通の課題であった。

JAWS を始めたアメリカの女性研究者、M・マーガレット・コンウェイ（M. Margaret Conway）、カレン・オコナー、マリアン・パリー（Marian Palley）は、そのような女性研究者の課題に取り組んできた「女性と政治」研究のパイオニアであった。彼女らは同分野の女性研究者を励ましてサポートするだけでなく、自ら質の高い論文を政治学ジャーナルに発表することで、「女性と政治」研究を正統性のある政治学の研究として位置付けることに貢献したのである。JAWS を通じての交流により、日本の研究者とアメリカの若手研究者たちはアメリカの第一世代女性研究者らの経験を共有し、大きな励ましを得ることができた。例えば、2000 年の第 1 回 JAWS ワークショップの参加者たちは、後にアメリカ政治学会の実行委員会長 Rob Hauck の協力を得て学会誌『 PS: Political Science & Politics 』の 2001 年 6 月号に論

文を掲載した。この掲載をきっかけに JAWS の日本参加者らは日本の政治学会でも注目されることになり、彼女らの研究も認められるようになったと回顧する。岩本美砂子（三重大学）、大海徳子（お茶の水女子大学）は福岡市で開催された 2006 年世界政治学会（IPSA）の準備委員も務めた。

このように JAWS は日本の研究者たちに、アメリカの女性研究者との交流による研究やキャリアの発展、アメリカ政治学会での研究発表、長期にわたってのメンタリングの機会を与えてくれた。アメリカの研究者にとっても、日本で研究発表を行う機会、日本の女性研究者とのネットワーク形成、若手研究者のキャリア開発へと繋がった。歴代の JAWS に参加した日米の女性研究者らは、互いの社会の相違点を認識しつつ、それぞれの場で女性研究者が直面する課題に取り組み、国際的な視点で研究を進めていく貴重な経験を得たのである。

JAWS は 2000 年から現在に至るまで、日米友好基金等の支援を得て 9 回研究集会を実施した。その概要を簡単に以下に振り返る。

第 2 回：マリアン・パリー教授（デラウェア大学,University of Delaware）が 2001 年サンフランシスコで開かれたアメリカ政治学会で「Women in Japan and the US」をテーマに企画し、12 名が参加した。

第 3 回：2002 年に日本で開催。アメリカから 3 名が参加した。三重大学、お茶の水女子大学のジェンダー研究センターで研究集会を開催した他、女性議員、地方議員、アクティビスト達に面会した。

第 4 回：2003 年、デラウェア大学とアメリカ政治学会（フィラデルフィア市）で開催され、新たに若手研究者が日本から 3 名、アメリカから 2 名加わった。この時の成果として、2004 年 1 月号の『 PS：Political Science & Politics 』に論文要約が掲載された。論文全文はアメリカ政治学会ウェブサイトの Special E-Symposium で公開された。

第 5 回：2007 年にジュリー・ドーラン（Julie Dolan）准教授（マカレスター・カレッジ,Macalester College）とアメリカ政治学会（APSA）の Bahram Rajaee の企画によって開かれた。APSA（シカゴ市）では「女性と外交」を題したパネルを構成した他、マカレスター・カレッジ（ミネソタ州セントポール市）で研究集会が開かれた。14 名の日米女性研究者が参加した。

第 6 回：2009 年、再び日本で開かれアメリカから 6 名の研究者が来日した。アメリカ大統領選挙に挑んだヒラリー・クリントンとサラ・ペイリンに関する研究、アメリカの少数政党における女性の役割、下院議員のスピーチ分析、医療政策と女性など最新の研究を報告した。日本の参加者も女性と地方議会、投票行動、女性議員のリクルートメント、女性国会議員に関する研究を発表した。お茶の水女子大学のジェンダー研究センターはドイツ日本研究所（German Institute for Japanese Studies）と共に東京の研究集会を主催した。アメリカの研究者らは東京都世田谷区の生活者ネットワークを訪問、さらに富山県で行われた母親大会でも研究発表し好評を得た。

第 8 回 JAWS（2017 年）、お茶の水女子大学での研究交流会

第 8 回 JAWS（2017 年）、東京都議会訪問

第 7 回：2010 年に、メリッサ・デックマン（Melissa Deckman）准教授（ワシントン・カレッジ,Washington College）と APSA の Bahram Rajaee の企画によってアメリカで開催された。参加者は「Gender, Politics and Policy: Post-Elections」をテーマにワシントン・カレッジ（メリーランド州）とアメリカ政治学会（Washington DC）で研究報告を行った。2010 年の JAWS は日米から 19 名が参加し、それまでで最大規模となった。

第 8 回：時をおいて 2017 年に日本で再開された（しばらく開催されなかったのは資金上の問題と第一世代の高齢化による）。JAWS の再開を兼ねてジェンダー研究所がアメリカからジュリー・ドーランとメリッサ・デックマン（マリアン・パリー教授も来日予定だったが、悪天候により断念した）を招聘し、国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？」を開催した。130 名を超える多くの聴衆が集まり大盛況だった。このほか、東京都議会訪問や、JAWS の新旧メンバー、ジェンダー研究所の研究者、お茶大の院生らとの研究交流も行った。この時の成果は 2018 年刊行の『ジェンダー研究』21 号の特集「Gender and Political Leadership」に掲載された。

アメリカ政治学会における JAWS HP→https://connect.apsanet.org/jaws/

■JAWS　2018 年度成果

2018 年 JAWS （第 9 回） 「ジェンダーと民主主義」 “Gender and Democracy”

（8 月 28 日～31 日、マサチューセッツ州、ボストン）

2018 年、第 9 回 JAWS がアメリカ政治学会の協力を得てボストンで 4 日間開催された。ボストン市にあるサフォーク大学のローゼンバーグ東アジア研究所は、研究集会の場所とレセプションを提供してくれた。今年から第一世代の JAWS メンバーは引退した形となり、申琪榮（ジェンダー研究所）、メリッサ・デックマンが引き続きファシリテーターとして参加した以外は、全員新しいメンバーが参加した。

今回はリンダ・ハスヌマ（Linda Hasunuma）（ブリッジポート大学,University of Bridgeport)と三浦まり（上智大学）が加わり、アメリカ政治学会の国際交流担当の Andrew Stinson の協力も得て、アメリカ政治学会と日本政治学会から、若手女性研究者に参加を呼びかけた。最終的に日米からそれぞれ若手研究者を 6 名ずつ、計 12 名を選抜した。

テーマは「ジェンダーと民主主義」（Gender and Democracy）として、4 名のファシリテーターが初日にレクチャーをすることで始まった。12 名の参加者は研究セッションとアメリカ政治学会パネルで、女性運動、女性の政治参画、トランスナショナルな女性連帯、リーダーシップ、政治参加のジェンダーギャップなどについて研究発表を行った。そのほか、キャリア形成、メディアと研究発信、論文の出版などについて議論するセッションも設けた。女性の政治参加に関する大規模な研究を支援している「Barbara Lee Foundation」も訪問し財団の活動についてうかがった。（具体的なスケジュールは https://mk0apsaconnectbvy6p6.kinstacdn.com/wp-content/uploads/sites/22/2019/02/2018-JAWS-detailed-schedule.pdf）

▶ AIT

■国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」概要

開発とジェンダーの問題を海外で実践的に研究するプログラム

18 年目を迎える国際教育交流プログラム

AIT ワークショップは、ジェンダー研究所と、タイのアジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology（AIT））とにより実施されている、国際教育交流プログラムである。

2001 年に、ジェンダー研究センター（現ジェンダー研究所）所属教員と、AIT「ジェンダーと開発」専攻の日下部京子教授らの尽力によって始められ、2004 年には、本学と AIT との間で大学間学術交流協定が結ばれた。以降、協定に基づき、タイ AIT で実施されるワークショップへの本学博士前期課程院生を主とする派遣と、AIT 大学院生の日本国内での研修受入による、大学院生を主体とした研究交流事業をほぼ毎年実施している。

2012 年度からは、AIT ワークショッププログラムは、ジェンダー研究センターが従来提供してきた大学院博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論演習」として単位認定が始まった。2013 年度はサマープログラムを活用して AIT 院生の日本国内研修を実施し、2014 年度からは大学院前期課程科目「フィールドワーク方法論」を国内事前研修として取り入れ、本年で 17 回目を迎えた。

グローバルなフィールドでの理論的検討と実践的学習

本教育プログラム（「国際社会ジェンダー論演習」）の目的は、開発とジェンダーにかかわるグローバルな課題群の分析方法や視座、海外におけるフィールド調査の基礎を、実践的に学習することにある。

大学院講義の事前学習（関連機関での調査）、調査して得た知見の英語によるプレゼンテーション、報告書作成という一連の調査研究の研修を通して、修士論文作成のための技能を習得する。加えて、英語によるインタビュー、プレゼンテーション、論文執筆の訓練機会にもなる。

このような充実したプログラムを通して、参加者は開発の問題をジェンダー視点から考察することの意義を皮膚感覚と理論的観点からより深く把握することができるようになる。また AIT に集まるアジア各国の院生の熱意ある議論スタイルや問題関心の多様さから刺激を受け、研究手法や語学のブラッシュアップへの動機づけを得る。その結果、研究者としての議論の組み立て方や調査方法、研究アプローチについて際立った効果が参加者には見られるのであり、本プログラムは比類のない教育効果をもっていると言える。

■AIT ワークショップ過年度実績

実施年度	研修テーマ
2001	Gender and Development ジェンダーと開発
2002	Gender, Work and Globalization ジェンダー、労働、グローバリゼーション
2003	Women, Globalization and Home-based Work 女性、グローバリゼーション、在宅労働
2004	Female Migrant Workers' Rights in Thailand タイにおける女性移動労働者の権利　　【協定締結】
2005	Gender and Development in Thailand: Labor rights and violence against women タイにおけるジェンダーと開発：労働者の権利と女性に対する暴力
2006	〔実施せず〕
2007	Gender, Rights and Empowerment ジェンダー、権利、エンパワメント
2008	Thailand-Japan Interactive Research Actions by Using Gender Perspectives ジェンダー視点によるタイ・日本相互研究
2009	Gender and Policy: Through Thailand-Japan Interactive Analysis ジェンダーと政策：タイと日本の相互分析を通して
2010	Gender and Social Change: Comparative Analysis of Thailand and Japan ジェンダーと社会改革：タイと日本の比較分析
2011	Gender and Disaster ジェンダーと災害〔特別プログラム：本学でのシンポジウム開催〕
2012	Sexuality セクシュアリティ
2013	Global Justice, Women’s Health and Prostitution グローバル・ジャスティス：女性の健康と売春
2014	1) Sexuality, 2) Gender and Poverty, 3) Education and Empowerment 1）セクシュアリティ、2）ジェンダーと貧困、3）教育とエンパワメント
2015	Labor, Sexuality and Empowerment 労働、セクシュアリティ、エンパワメント
2016	Labor and Association from Gender Perspective ジェンダー・パースペクティヴから見た労働と組織
2017	Sexual minority and migrant workers from gender perspectives ジェンダー視点から見たセクシュアル・マイノリティと移住労働者
2018	Power and Sexuality from Gender perspectives ジェンダー・パースペクティヴから見た権力とセクシュアリティ

■履修生の卒業後の軌跡

AIT ワークショップでの経験から留学・就職そして現在まで

大類　由貴
2015 年度 AIT ワークショップ履修生
勤務先：公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

2015 年度に参加した AIT ワークショップは、その後 AIT へ留学する大きなきかっけとなりました。AIT ワークショップではタイをフィールドに、国際機関や NGO にインタビュー調査、AIT の授業受講と AIT の学生達と自分の研究テーマを発表し合いました。1 週間という短い期間でしたが、英語でのインタビュー調査やプレゼン、AIT の教授や学生との議論は、私にとって大変貴重な経験となりました。

特に、AIT の授業で同世代の学生達が活発に議論している姿や自分とは異なる問題意識を持っている点に、大きな差を感じ衝撃を受けました。それと同時に、将来開発とジェンダーの分野で働きたいと考えていた私にとって、日本の中から開発とジェンダーの問題を見ることに違和感を感じました。このことがきっかけで AIT への留学を考え始めました。AIT では、開講されている科目も幅広く、専門知識をさらに深め、自分の研究の可能性を広げていける環境が整っている点に大きな魅力を感じました。また、タイだけでなく、東南アジアや南アジア、東アジアなど様々な国籍、バックグラウンドを持つ学生達と議論し切磋琢磨することにより、多様な視点、国際的な視点や学術的な視点を身につけることができると考え、AIT への留学を決意しました。

10 ヶ月の留学では、授業を受講しつつ、研究調査プロジェクトへの参加や自分の研究の調査も実施しました。授業では、開発とジェンダーには欠かせない基礎的な論文を用いてじっくりと理論が学ぶことができただけでなく、実際にフィールドワークやグループワークで学んだ理論を実践に生かす機会がたくさんありました。この点が AIT で学ぶ特徴の 1 つだと思います。また、1 つのテーマに関して様々な国籍の学生と議論することで幅広い視点を持つことができたことや、すでに国連や NGO での勤務経験があるクラスメイトも多かったことから、彼らの豊富な経験や知識からの学びも大きかったです。授業以外では AIT の日下部先生とともに研究調査プロジェクトに携わり、タイの北部のチェンライにある山奥や東北部のシーサケットにある農村部でのインタビュー調査と報告書作成を担当しました。この調査経験が実際に自分の研究でのインタビュー調査や論文執筆に役に立ったと感じています。研究面では、AIT の卒業生が務める NGO への訪問とワークショップに参加させていただいたご縁で、実際に調査地が決定したこと、研究テーマに関する知識だけでなくテーマに関するタイでの現状についても現場レベルで知ることができ、研究の視野が広がりました。AIT での学び、経験がなければ修士論文を完成させることはできなかったと思います。

卒業後は、ジェンダーと開発はもちろん教育やアジアと関わることができる仕事に就きたいと考え、現在の勤務先に運良く就職することができました。日々新しいことに刺激を受けると同時に自分の知識や能力不足を痛感しています。まだまだ AIT で学んだことを十分に活用できている状態ではありませんが、お茶大そして AIT を離れても自分の専門性を日々高めていく努力と専門性を活かせる機会で存分に発揮できるよう励んでいきたいです。

最後に、留学中にいつも温かく見守っていただき、親身になって相談にのってくださった AIT の日下部先生、留学中から卒業まで丁寧なご指導と明確なアドバイスでご指導してくださった申先生、いつも励まし合い支えてくれたお茶大そして AIT のクラスメイトに心より感謝申し上げます。

■ 2018 年度 AIT ワークショップ実施概要

「ジェンダー・パースペクティヴから見た権力とセクシュアリティ」をテーマに実施

【概要】

2018 年度の AIT ワークショップは、「ジェンダー・パースペクティヴから見た権力とセクシュアリティ」をテーマに、国内事前研修（4/11～7/25）、AIT からの参加院生 2 名の受入（7/17～7/27）、タイ AIT での研修（8/26～9/1）、研修報告会（12/5）、報告書作成というプログラムで行なわれた。

本学からの参加者は 5 名（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻の 4 名と博士前期課程人間発達科学科専攻の 1 名）。国内事前研修として、大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」を履修したほか、AIT 院生来日研修時には、共同での国内フィールドワークや研究報告会に参加し、研究交流を行った。タイ研修では、同時期に AIT を訪問していた名古屋外語大学の学生と合流してのフィールドワークも日程に組まれ、ユニセフの活動現場など、例年と同様に多くの機関を訪問することができた。コーディネーターとして本学ジェンダー学際研究専攻院生が関わり、フィールドワーク方法論担当講師と協力してプログラムの企画運営を担当したほか、履修生の報告会にはジェンダー研究所特任講師が参加した。

【プログラム統括】板井広明（ジェンダー研究所特任講師）

【国内事前研修担当講師】大橋史恵（武蔵大学准教授）

【コーディネーター】高橋加織（博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

【履修生】笠原　容（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 地理環境学コース）
永井萌子（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 地理環境学コース）
近藤　望（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース）
曾　宇宸（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース）
Meckhasinh Soukannha（博士前期課程人間発達科学科専攻 教育科学コース）

【AIT からの研修生】Mehbuba Jabin（修士課程）
Jiang Congcong（博士課程）

タイ LPN（LABOUR RIGHT PROMOTION NETWORK）本部にて
設立者 Mr.Sompong Srakaew から活動内容を伺う AIT 参加者（2018 年 8 月 30 日）

■ 2018 年度 AIT ワークショップ研修報告

国内事前研修

2018 年度の AIT ワークショップは「ジェンダー・パースペクティヴから見た権力とセクシュアリティ（Power and Sexuality from Gender Perspective）」をテーマに、博士前期課程ジェンダー社会科学専攻の 5 名が参加した。ワークショップのコーディネーターを担ったのは高橋加織（博士後期課程ジェンダー学際専攻）である。

大学院科目での国内事前研修は 4/11（水）～7/25（水）に全 15 回行なわれた、大橋史恵講師（武蔵大学准教授）による「フィールドワーク方法論」である。資料の探し方や扱い方、細かな研究倫理の問題等をはじめ、論文における引用の仕方や文献リストの作り方、フィールドワークのプランニングや実践における注意点といった基礎的事項が講じられた。マリア・ミース著『国際分業と女性―進行する主婦化』（日本経済評論社、1997 年）や Diane L. Wolf 著『Feminist Dilemmas in Fieldwork 』（ Westview Press, 1996 年）などが輪読テクストとしてとりあげられた。また Fashion Revolution Week に向けて、#whomademyclothes?と SNS で問いかける実践や、Fashion Revolution Japan のイベントへの参与観察、Fashion Revolution Japan の代表を務める竹村伊央氏（Ethical Fashion Japan）によるレクチャーも行なわれた。

研究交流研修

7/17（火）～7/27（金）には、Mehbuba Jabin（修士課程）と Jiang Congcong（博士課程）の 2 名が AIT から来日して研修を行なった。IGS を含めたお茶大内の施設訪問、棚橋教授や石丸准教授との面談、国際留学生協会（IFSA)などの訪問、東京レインボープライドやお茶大卒業生インタビューなどを行なった。

8/26（日）～9/1（土）は本学の院生 5 名がタイにある AIT での研修にのぞんだ。タイに滞在中は、IOM Thailand Office、LPN Foundation、ILO Thailand、Empower Foundation、UNICEF、Bangkok Rainbow を訪問・調査し、AIT の授業「Gender, Enterprise and Organization」や、「お茶大―AIT ジョイント・セミナー」で研究報告などをこなした。

研修報告会

12/5（水）12 時 20 分～13 時 30 分には板井広明ジェンダー研究所特任講師の司会のもと、高橋加織博士後期課程院生・コーディネーターが参加して AIT での研修に関する参加者報告会を開いた。参加院生 5 名が各自分担箇所を報告し、その後、質疑応答を行なった。いずれの院生も、取材先の個人情報の保護や取材のまとめ方など、前期に受講した「フィールドワーク方法論」の授業で得たことが大いに役に立ったと述べている。またタイ現地の ILO やユニセフの事務所、セックスワーカー向けのエンパワー事務所などを見学し、修士論文を書く上で必要な取材をある程度行なうことで、それぞれの研究対象の問題点を明確化するのに、このワークショップは役立ったとのことだった。同世代の AIT の学生とのジョイントセミナーでは、さまざまな研究アプローチについての知識や知見を得られ、かつ活発な議論が行なわれていたことが刺激的だったようである。

研修報告会での報告をもとにして、現地での調査や授業風景などの画像、現地情報などを取り入れた報告書を 2019 年 2 月に完成させた。

◇フィールドワーク方法論（全 16 回）講師：大橋史恵（武蔵大学准教授）

回	実施日	内容
1	4/11	オリエンテーション
2	4/18	Fashion Revolution （１）
3	4/25	Fashion Revolution （２）
補講	4/30	フィールドワーク
4	5/9	フィールドワークの振り返り
5	5/16	資料調査の方法（図書館での実習）
6	5/23	文献講読（１）『国際分業と女性』序文・はじめに・第 1 章
7	5/30	文献講読（２）『国際分業と女性』第 2 章・第 3 章
8	6/6	文献講読（３）『国際分業と女性』第 4 章
9	6/20	文献講読（４）『国際分業と女性』第 5 章・第 6 章
10	6/27	文献講読（５）国際分業と女性』第 7 章＋ディスカッション
11	7/4	半構造化インタビュー調査の手法と準備
12	7/11	竹村伊央さん（Ethical Fashion Japan)へのインタビュー
13	7/18	AIT 院生との研究交流とディスカッション
14	7/25	文献講読（６）Feminist Dilemmas in Fieldwork, 第 10 章

◇AIT 生来日研修（7/17～7/27）

実施日	内容
7/17	東京到着、お茶の水女子大学訪問（グローバルリーダーシップ研究所、歴史資料館、グローバル協力センター、ジェンダー研究所)、シンポジウム「トランプ時代の女性と政治」参加（笹川平和財団）
7/18	「フィールドワーク方法論」にて、AIT 院生２名によるプレゼンテーション、台東区役所職員への LGBT 研修後、研修講師へのインタビュー（台東区役所)、歓迎会
7/19	外国人通訳ボランティアへの LGBT 研修、聴講後、講師インタビュー（町田市民フォーラム） 世田谷区電話相談員へのインタビュー（世田谷区男女共同参画センターらぷらす）
7/20	特定非営利活動法人 国際留学生協会（IFSA)訪問、東京レインボープライド　インタビュー、お茶大・卒業生インタビュー（池袋）
7/21	ReBit 活動説明会（渋谷男女平等・ダイバーシティセンター）
7/22	フィールドワーク（浅草)、中国人留学生インタビュー（銀座）
7/23	IBM 本社訪問・インタビュー、お茶の水女子大学・中国人留学生の会インタビュー
7/24	棚橋教授との面談（文教 1, 202 号室)、石丸准教授との面談（本館 3F, 350 号室)、発達心理学コース
7/25	フィールドワーク（鎌倉）
7/26	早稲田大学 GS センター訪問、送別会
7/27	帰国

◇AIT ワークショップ履修生タイ研修日程（8/26～9/1）

Date	Time	Venue
Sunday 26 Aug 2018	18.25	Arrive at Don Muang Airport (XW 101)
	20.00	AITCC
Monday 27 Aug 2018	9.00-12.00	Prepare for presentation
	13.00 – 15.00	AIT Gender Class “Gender, Enterprise and Organization” (Optional)
	19.00 – 21.00	Welcome Party with GDS New Students
Tuesday 28 Aug 2018	9.00 -12.00	Ochanomizu – AIT joint Seminar (Room No.S101)
	13.30	Meeting at AITCC and Leaving to Ayutthaya
	14.00	Visit Ayutthaya and Dinner (joined by AIT students)
	21.00	Check in at IBIS Riverside Bangkok
Wednesday 29 Aug 2018	8.30	Meeting at the Lobby IBIS Riverside Bangkok
	9.00	IOM Thailand Office
	12.00	Lunch
	13.30	Forward Foundation
	17.00	Arrive at IBIS Riverside Bangkok
Thursday 30 Aug 2018	8.00	Meeting at the Lobby IBIS Riverside Bangkok
	9.00	LPN Foundation
	12.00	Lunch
	14.30	Empower Foundation
	17.30	Arrive at IBIS Riverside Bangkok
Friday 31 Aug 2018	8.30	Meeting at the Lobby IBIS Riverside Bangkok
	9.00	ILO Thailand
	11.00	Lunch
	13.00	UNICEF
	15.30	Bangkok Rainbow
	20.00	Arrive at IBIS Riverside Bangkok
Saturday 1 Sep 2018	9.30	One Day trip in BKK
	20.00	Leave from IBIS Riverside Bangkok
	21.00	Arrive at Don Muang Airport

４）海外研究者フェローシップ受入

◆国際交流基金フェロー

Maura Stephens（ハワイ大学博士課程大学院生）

【受入担当】棚橋 訓（IGS 研究員・お茶の水女子大学教授）

【受入期間】2017（平成 29）年 9 月 14 日～2018（平成 30）年 8 月 31 日

【研究テーマ】日本における生理の経験に関する医療人類学的研究

2018 年度の研究成果

月経という普遍的な経験は、女性個人の日常生活にさまざまな影響を与えるだけではなく、月経をめぐる衛生用品の市場という経済的側面、月経を抱える女性たちの生活・労働環境をめぐる政治的側面、そして月経という現象を根幹において意味づける医学・医療の側面など、さまざまな社会的領域に連関する複合的な事象である。それゆえ、本研究は、日本社会を事例として、この複合的事象としての女性の月経（すなわち日本の「生理」）の現在を、実証的なフィールドワークにおいて捉え、これを医療人類学の立場から分析することを目的とする。

2018 年度も、お茶の水女子大学の人文社会科学研究の倫理審査委員会の審査を経て、東京圏在住・通学の女子大学生への、月経を中心とした経験や知識についてのインタビュー調査を続けた。質問紙を使用しながら聞き取りを行う半構造化の個人インタビュー方式で、18 人から話をきいた。

個人インタビューに加え、生理用品製造企業や広告会社の作り出す月経のイメージについての調査を行った。対象とした企業は、花王やプロクター・アンド・ギャンブルといった大企業ならびに、布ナプキンの製造・販売などを事業とする小規模企業で、合計 8 社。生理用品の開発者や従業員を対象に、メールによるアンケートか対面のインタビュー調査を行ったほか、現在の広告やデジタルアーカイブの資料収集を実施した。

また参与観察として、生理用品製造企業の様々な愛用者向けのイベントに参加した。例えば、5 月に、天然コットンとオーガニックコットンを素材とする生理用品を販売するナチュラムーンという会社の「くまこフェス」というイベントに参加した。6 月にはメード・イン・アースという布ナプキン会社の「布ナプキンフェスタ」で月経血コントロールヨガと手作り布ナプキンのワークショップに参加し、布ナプキンユーザーの談話会で話しを聞いた。

最後に、個人インタビューをした 18 人のうちの 4 人の女子大学生に「生理の日記」をつけてもらった。最長 2 ヶ月間にわたり生理を巡るそのときどきの経験や思いを日記形式で自由に記載してもらった。2 ヶ月間が終了した時点で、日記のコピーをさせていただき、調査協力者を対象に、日記の内容に応じて質問内容を変える非構造化スタイルでインタビューを実施した。

■IGS における研究成果に基づいた学会発表

“Managing” Menstruation in Japan: Experiences of Pain and Discomfort Hidden in Plain Sight,University of Hawai‘i at Mānoa Department of Anthropology Colloquium Series,Anthropology Graduate Student Research Symposium,,Honolulu, Hawai‘i, April 11th, 2019

Putting Up with It: Hidden Experiences of Menstruation in Japan,Association for Asian Studies Conference,Denver, Colorado, March 23rd, 2019

Dealing with It: The Hidden World of Menstruation in Japan,American Anthropological Association 117th Annual Meeting,San Jose, California, November 15th, 2018

5）国内外招聘研究者一覧

■2018 年度　海外からの招聘研究者

【アジア・オセアニア】

キム　ヘスク（梨花女子大学校・韓）
　国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」（54 頁参照）

ソン　イェラン（梨花女子大学校・韓）
　国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」（54 頁参照）

ズオン・キム・アイン（ベトナム女性学院・ベトナム）
　国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」（54 頁参照）

チョ　ソンナム（梨花女子大学校・韓）
　国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」（54 頁参照）

【ヨーロッパ】

アンネ・ボルグ（ノルウェー科学技術大学・ノルウェー）
　国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」（54 頁参照）

Jennifer Branlat（ノルウェー科学技術大学・ノルウェー）
　IGS 研究会「ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターとの研究会」（84 頁参照）

Kristine Øygardslia（ノルウェー科学技術大学・ノルウェー）
　IGS 研究会「ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターとの研究会」（84 頁参照）

デルフィーヌ・ガルディ（ジュネーブ大学・スイス）
　特別招聘教授（92～95 頁参照）
　国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか」（48 頁参照）
　IGS セミナー「主体、社会運動、民主主義」（69 頁参照）

エレオノール・レピナール（ローザンヌ大学・スイス）
　国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか」（48 頁参照）

【北米】

ジャン・バーズレイ（ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米）
　特別招聘教授（89～91 頁参照）
　国際シンポジウム「アラブ世界の女性と逸脱」（45 頁参照）
　IGS セミナー「ミレニアル舞妓」（71 頁参照）

ナディア・ヤクーブ（ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米）
　国際シンポジウム「アラブ世界の女性と逸脱」（45 頁参照）

ディヤ・アブド（ギルフォード・カレッジ・米）
　国際シンポジウム「アラブ世界の女性と逸脱」（45 頁参照）

サスキア・サッセン（コロンビア大学・米）
　IGS セミナー「フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション」（79 頁参照）

デニス・M・ホーン（シモンズ大学・米）
　IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」（65 頁参照）
リンダ・ハスヌマ（ブリッジポート大学・米）
　IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」（65 頁参照）
メアリー・M・マッカーシー（ドライク大学・米）
　IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」（65 頁参照）

■2018 年度　国内招聘研究者

倉橋耕平（立命館大学）IGS セミナー「合評会：倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー：90 年代保守言説のメディア文化』」（57 頁参照）
富永京子（立命館大学）IGS セミナー「合評会：倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー：90 年代保守言説のメディア文化』」（57 頁参照）
井上雅人（武庫川女子大学）IGS セミナー「近代日本のファッション文化を再考する」（59 頁参照）
梅垣千尋（青山学院女子短期大学）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）
土方直史（中央大学）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）
山尾忠弘（日本学術振興会特別研究員 DC／慶應義塾大学（院）、）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）
舩木惠子（武蔵大学）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）
後藤浩子（法政大学）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）
小沢佳史（九州産業大学）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）
堀芳枝（獨協大学）IGS セミナー「フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション」（79 頁参照）
日比野由利（金沢大学）IGS セミナー「代理出産をめぐる世界の現状」（63 頁参照）
徐阿貴（福岡女子大学）IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」（65 頁参照）
小門穂（大阪大学）IGS セミナー「フランスにおける LGBT と生殖医療、および性別の表記変更」（67 頁参照）
三浦まり（上智大学）国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか」（48 頁参照）
村上彩佳（日本学術振興会特別研究員 PD／上智大学）国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか」（48 頁参照）
森村敏己（一橋大学）IGS セミナー「フランス啓蒙の女性論」（73 頁参照）
嶽本新奈（日本学術振興会特別研究員 PD／明治学院大学）IGS セミナー「近代日本の女性の移動と再生産」（75 頁参照）
鶴田幸恵（千葉大学）IGS セミナー「性同一性障害とトランスジェンダーは「水と油」か」（77 頁参照）

6. 教育プロジェクト

1）専任・特任教員担当講義

2）2018 年度博士前期課程修了者・
修士論文要旨

▶ 2018 年度 IGS 専任・特任教員担当講義

IGS 専任教員・特任教員は、お茶の水女子大学大学院（人間文化創成科学研究科）と学部において多彩な講義を担当し、次世代を担う研究者の育成に努めている。

《人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー学際研究専攻》

申琪榮（准教授）

［科目名］比較政治論（前期）
［主題と目標］博士後期院生を対象に研究発表と論文執筆を目的とするゼミ。参加者は事前に担当教員に連絡を取り、受講に関して話し合うことが求められる。

［科目名］比較政治論演習（後期）
［主題と目標］博士後期院生を対象に研究発表と論文執筆を目的とするゼミ。参加者は事前に担当教員に連絡を取り、受講に関して話し合うことが求められる。

《人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学専攻》

申琪榮（准教授）

［科目名］ジェンダー基礎論（前期）
［主題と目標］ジェンダー社会科学専攻の基本講義として、ジェンダーの視点・方法の多様性とその有効性を提起する。

［科目名］フェミニズム理論の争点（前期）
［主題と目標］フェミニズムやジェンダー研究の初心者を対象に、ジェンダー概念の基礎的知識を含め、1990 年代以降フェミニズム理論の新たな発展期以降取り上げられてきた重要な理論的争点を理解することを目的とする。授業では、受講生たちの関心に合わせて日本の現状を考える上で有効な理論を中心に日本語及び英語文献を読んでいく。2018 年度前期は「Gender, Sexuality, and Violence against Women and Minorities」をテーマに文献購読、ゲスト講義、グループワークの実施を行う。

［科目名］フェミニズム理論の争点・演習（後期）
［主題と目標］前期に続き、フェミニズムやジェンダー研究の基礎的概念や知識を理解した上で、1990 年代以降フェミニズム理論の新たな発展期以降取り上げられてきた重要な理論的争点に取り組む。授業では、受講生たちの関心に合わせて有効な理論を中心に日本語及び英語文献を読んでいく。

［科目名］国際社会ジェンダー論演習（前期）
［主題と目標］指導教員と個人的な指導のもとで国際社会における諸問題をジェンダー視点から分析する手法を身につけることを目的とする。

大橋史恵（准教授）

［科目名］フィールドワーク方法論（前期）
［主題と目標］AIT のプログラム（本報告書 107〜113 頁参照）に参加する学生を中心として、ジェンダーの視点から社会調査の方法論について学ぶ。

［科目名］国際移動ジェンダー論（後期）
［主題と目標］グローバリゼーションの下でのジェンダー秩序の再編と人の移動/労働の関係について批判的に議論する。

板井広明（特任講師）

［科目名］国際社会ジェンダー論演習（後期）

［主題と目標］AIT（本報告書 107〜113 頁）参加者に向けて、将来 NGO や国際機関で国際協力の仕事につくことや、国内外を問わず男女共同参画推進諸機関で働くこと、あるいは研究者としての力を培うことを希望する人材の育成を意図して、国際社会におけるジェンダーの問題を、途上国支援や持続可能な教育などを実践している現場の声を聴きつつ、理論的に検討するのが主題である。異文化におけるジェンダー概念や平等概念、フェミニズム的視点の有効性を再検討し、各自のジェンダー理解をブラッシュアップすることが目標である。

《人間文化創成科学研究科博士前期課程共通》

ジャン・バーズレイ（特別招聘教授）

［科目名］男女共同参画国際演習 II 「Chasing Madame Butterfly」

［主題と目標］This class explores Madame Butterfly narratives from the late 19th century to the present. We examine fiction and stage productions, but also discuss art and photography, fashion, and major cultural events. The goals of this course are: a) to understand how notions of gender, race, and nation are constructed in cultural productions　b) to familiarize you with Humanities approaches to gender analysis;　c) to hone your skills in academic research, writing, and presentation.

《学部》

申琪榮（准教授）

［科目名］比較ジェンダー論

［主題と目標］ジェンダー視点で日本や国際社会の問題を比較的に考察する。文献、視聴覚資料、グループワーク、ゲストスピーカーの講義などを含む多様な方法で批判的視点を培うのを目的とする。

大橋史恵（准教授）

［科目名］グローバル化と労働

［主題と目標］①グローバル化という現象について知見を深める。とりわけジェンダーの視点からこの現象を批判的に考察する。②グローバル化のなかで、日本および世界の諸地域において、女性と男性の労働がどのように変化してきたのかを理解する。

［科目名］グローバル経済とジェンダー（LA 科目）

［主題と目標］①経済のグローバル化が世界各地域にどのような影響をもたらしてきたのかを、ジェンダーの視点から検討する②フェミニズムが経済のグローバル化をどのように批判してきたのかを学び、自らの知的実践に基づいてその意義について考察する

《英語によるサマープログラム 2018》

申琪榮（准教授）

［科目名］Special Lectures in Humanities and Sciences Ⅰ「Gender and Political Representation」

［主題と目標］This course is given by five teachers and takes the gender problems from various viewpoints. Gender, distinguished from sex, is now emerging as very important agenda in many disciplines such as economics, psychology, social philosophy, law, political sciences and so on. Especially, in a globalizing era of today, gender problems haves become transnational and global phenomena that requires to be analyzed through novel approaches. You will understand that gender is a core factor that constitutes our societies and that we cannot understand today's and future world without keeping an eye open to gender problems

▶ 2018 年度博士前期課程修了者・修士論文要旨

IGS 所属教員の指導のもと、2018 年度は以下の院生が博士前期課程（ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース）を修了した。

【氏名】高橋　侑里
【指導教員】申　琪榮（IGS 准教授）
【修論タイトル】**9.11 以降に製作されたハリウッド映画における白人男性の表象分析**
【要旨】
2001 年 9 月 11 日の同時多発テロという未曽有の出来事を経験したアメリカが、国家を再構築していく時代において、世論形成に大きな影響力をもつ映画が描き出した白人男性はどのようなものであったか。『ワンスアンドフォーエバー』『父親たちの星条旗』『戦火の馬』の 3 作品の主人公たちを分析することで、ハリウッド映画における白人男性の表象を明らかにする。

【氏名】林　美子
【指導教員】申　琪榮（IGS 准教授）
【修論タイトル】**女性労働者へのセクシュアル・ハラスメントの実態と対策に関する考察**
【要旨】
男女雇用機会均等法にセクシャル・ハラスメントに関する事業主の義務が盛り込まれたのは 1997 年であった。以来 20 年がたつが、いまだ深刻な被害が続いている。それは、セクシャル・ハラスメントの実態がまだ十分に解明されておらず、社会の認識や法制度、被害者救済のあり方との間にギャップがあるのではないかという問題意識のもと、セクシャル・ハラスメントの被害者及び支援団体に聞き取り調査を行い、実態の解明を目指すとともに、法制度や被害者救済の仕組みのあり方について検討した。

【氏名】張　頴
【指導教員】申　琪榮（IGS 准教授）
【修論タイトル】**中国の主流インターネットメディアにおける「ドメスティック・バイオレンス（DV）」に関する報道のジェンダー分析―「劉洲成 DV 主張事件」を中心に―**
【要旨】
中国における DV あるいは家庭内暴力に対して裁判所や警察は、「法律は家庭に入らず」「家族のプライバシーの尊重」を理由に介入してこなかった。しかしインターネットの普及により、DV 問題もネットメディアにより多く報道され注目されるようになった。本研究は蔵国仁のメディアフレーム理論を用いて、劉洲成 DV 主張事件におけるネットメディア報道についてジェンダー分析と考察を行う。

【氏名】Aerin Elizabeth Lai Jia Qi
【指導教員】棚橋　訓（IGS 研究員／お茶の水女子大学教授）
【修論タイトル】**Masculine Body-making in Japan: The Embodied Narrative Identities of Dieting and Exercising Young Men**
【要旨】
本研究は身体化的ナラティブ分析を通じ、日本人男性が食事制限と運動によりいかに男性的自己アイデンティティ（masculine self-identity）を構築するのかに焦点を当てる。東京都内の男子大学生にインタビューを行い、集めたデータをミード（Mead）のシンボリック相互作用論とリークル（Ricoeur）の物語的自己同一性（narrative identity；物語の自己アイデンティティ）を組み合わせ、ダクラス・イジ（Douglas ezzy）の再解釈を利用し、分析を行った。

7. 学術成果の発信

1）学術雑誌『ジェンダー研究』

2）プロジェクト報告書
IGS Project Series による
成果刊行

1）学術雑誌『ジェンダー研究』

国内外の執筆者による最新の優れたジェンダー研究の成果を世界に発信

国際的な学術誌として刷新

本研究所が編集・発行している査読付きの国際学術雑誌。前身は『女性文化資料館報』（1979～1987年）、『女性文化研究センター年報』（1988～1996 年）で、ジェンダー研究センターの創設に伴い、1998年 3 月に第 1 号として創刊された『年報ジェンダー研究』を引き継ぐ年刊誌である。

本誌は特集論文、特別寄稿論文、投稿論文、書評から構成される。巻頭に掲載される特集論文はその年に特に注目されたジェンダー関連のテーマについて世界第 1 級のジェンダー学研究者が執筆し、外部評価を得た論文で組まれており、学術研究としての寄与も大きい。特別寄稿論文は、編集部によるオリジナル企画として、学際的・国際的なジェンダー研究の成果を世に問う論文を掲載している。投稿論文は、国内外から投稿された日本語もしくは英語の論文で、国際的に活躍する研究者による外部審査を経て採用された質の高い論文である。書評も近年ジェンダー関連分野で注目された著書をジェンダー関連の諸分野の研究者が評しており、ジェンダー研究の動向を示すものである。

■『ジェンダー研究』21 号（2018 年 6 月刊行）概要

特集「Gender and Political Leadership」

『ジェンダー研究』21 号は 2017 年 3 月 18 日（土）に本学で開催された IGS 国際シンポジウム『なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？：ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙』での議論を基礎にして特集を組んだ。

「序――Introduction for the Sepecial Section」（Ki-young Shin）に続いて、「Too Soft and Feminine: Masculinity and the Gender Gap in the 2016 US Presidential Election」（Melissa Deckman）、「A Woman at the Top of the Ticket: The Role of Gender in the 2016 Presidential Election」（Julie Dolan）、「Between Reproduction and Production: Womenomics and the Japanese Government's Approach to Women and Gender Policies」（Hiroko Takeda）、「Gender, Election Campaigns, and the First Female President of South Korea」(Ki-young Shin)の 5 本を掲載し、最後に「The Gender Parity Law in Japan. The Potential to Change Women's Under-representation」 と題して、Mari Miura 氏へのインタビューを収録している。

Deckman 氏、Dolan 氏、Takeda 氏は、2016 年 11 月に行われたアメリカ大統領選で、「史上初の女性大統領」の誕生はなぜ実現しなかったのかについてジェンダー視点から切り込み、Takeda 氏は安倍政権における日本におけるジェンダー政策を分析、Shin 氏は韓国の大統領選挙におけるジェンダー・ポリティクスについて分析している。

また、特別寄稿には、2015 年 11 月～2016 年 1 月まで、当研究所に特別招聘教授として在籍した日本近代史・女性史の専門家である Anne Walthall 氏の「父兄訓と男性間差別――江戸時代の家族制度におけるジェンダー関係」を掲載した。これは在籍期間中に取り組んだ研究プロジェクト「Faith, Politics, and Affection: A Social History of the Hirata Atsutane Family（信仰、政治、愛情：平田篤胤一家の社会史）」の研究成果をまとめたものである。

投稿論文は、厳正な審査を経て、今号では次の 2 本を掲載した。「ある在日コリアン二世女性のライフストーリーにおけるジェンダー観の再編――民族・知・パワーとのダイナミズム」（猿橋順子・柳蓮淑）は、在日コリアン二世への語りから、一世によって実践されている韓国の文化と日本の社会規範の間で、アイデンティティや経済的自立に影響をうけたジェンダー観の再編を分析した。「寺山修二「大山デブコの犯罪」――1960 年代アングラ演劇におけるジェンダー化された男性の身体表象を巡って」（久保陽子）は、1960 年代に興ったアングラ演劇の中でも「大山デブコの犯罪」に焦点を絞って、男女の身体をジェンダー化された存在として表象分析した。

書評は今号から大幅に掲載本数を増やし、金井郁氏、菊地夏野氏、岩本美砂子氏、ホーン川嶋瑤子氏、山本千晶氏、田村哲樹氏、森明子氏、皆川満寿美氏、鳥山純子氏、林美子氏、稲田尚子氏によって評された 11 本の書評を収録した。人文科学・社会科学・自然科学領域に至るまでの幅広いフェミニズム、ジェンダー学の先端動向を紹介できた。

刷新した国際学術誌にふさわしく、多彩な執筆陣によって、最先端のジェンダー論が提供されている。

『ジェンダー研究』21 号（2018 年 6 月刊行）目次

巻頭言：『ジェンダー研究』21 号の刊行によせて……申琪榮

特集：Gender and Political Leadership

Introduction for the Special Section ……Ki-young Shin

Too Soft and Feminine: Masculinity and the Gender Gap in the 2016 US Presidential Election ……Melissa Deckman

A Woman at the Top of the Ticket: The Role of Gender in the 2016 presidential Election ……Julie Dolan

Between Reproduction and Production: Womenomics and the Japanese Government's Approach to Women and Gender Policies ……Hiroko Takeda

Gender, Election Campaigns, and the First Female President in South Korea ……Ki-young Shin

Interview with Mari Miura : The Gender Parity Law in Japan: The Potential to Change Women's Under-representation

特別寄稿論文

父兄訓と男性間差別——江戸時代の家族制度におけるジェンダー関係……Anne Walthall
翻訳　福重恵子、監訳　神田由築

投稿論文

ある在日コリアン二世女性のライフストーリーにおけるジェンダー観の再編——民族・知・パワーとのダイナミズム……猿橋順子、柳蓮淑

寺山修司「大山デブコの犯罪」——1960 年代アングラ演劇におけるジェンダー化された男性の身体表象をめぐって……久保陽子

書評

Julie A. Nelson 著
Gender and Risk-Taking: Economics, Evidence, and Why the Answer Matters ……金井郁

関口すみ子著
近代日本　公娼制の政治過程　「新しい男」をめぐる攻防……菊地夏野

三浦まり編著
日本の女性議員　どうすれば増えるのか……岩本美砂子

村田晶子・弓削尚子編著
なぜジェンダー教育を大学でおこなうのか　日本と海外の比較から考える……ホーン川嶋瑤子

佐藤文香・伊藤るり編
ジェンダー研究を継承する……山本千晶

衛藤幹子著
政治学の批判的構想　ジェンダーからの接近……田村哲樹

西山千恵子・柘植あづみ編著
文科省／高校　「妊活」教材の嘘……森明子

鹿嶋敬著
男女平等は進化したか　男女共同参画基本計画の策定、施策の監視から……皆川満寿美

Kevin Gray, Hassan Bashir, and Stephen Keck 編
Western Higher Education in Asia and The Middle East. Politics, Economics, and Pedagogy ……鳥山純子

上間陽子著
裸足で逃げる　沖縄の夜の街の少女たち……林美子

デビ・ブラウン著／村山光子・吉野智子訳
アスピーガールの心と体を守る性のルール……稲田尚子

編集方針・投稿規定

編集後記

■『ジェンダー研究』21 号（2018 年 6 月刊行）編集委員会

編集委員長

申　琪榮　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所

編集委員

石井クンツ　昌子　お茶の水女子大学ジェンダー研究所、基幹研究院人間科学系
足立　眞理子　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所
天野　知香　　お茶の水女子大学基幹研究院文化科学系
水野　勲　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
森　義仁　　お茶の水女子大学基幹研究院自然・応用科学系
Karen Ann Shire　　お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所／
ドイツ デュースブルグ・エッセン大学 教授
荒木　美奈子　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
石丸　径一郎　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
倉光　ミナ子　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

学外編集委員

三浦　まり　　上智大学法学部
金井　郁　　埼玉大学経済学部
小浜　正子　　日本大学文理学部

編集事務局

佐野　潤子　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所
仙波　由加里　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所
和田　容子　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所

2）プロジェクト報告書 IGS Project Series による成果刊行

2018 年度は、成果発信シリーズ IGS Project Series を 1 冊刊行した。「東アジアにおけるジェンダーと政治」のブックレットシリーズの第 1 巻となる当該報告書には、2015 年度開催の複数のシンポジウム・セミナーにおける、台湾のジェンダークオータ制度についての議論が日英のバイリンガルでまとめられている。年度内に実施された他のシンポジウムや、特別招聘教授プロジェクトの成果の取りまとめも進められており、引き続き、事業成果の国際的発信に努めたい。なお、グローバルリーダーシップ研究所との共同で開催した、グローバル女性リーダー育成研究機構主催の国際シンポジウム（2018 年度 2 回開催）の報告書については、このシリーズとは別の形態で刊行されている。

IGS Project Series 20
「東アジアにおけるジェンダーと政治」Booklet Series 1
台湾におけるジェンダークオータ

IGS Project Series 21
国際シンポジウム
アラブ世界の女性と逸脱：グッドとバッドの境界で
（2019 年秋刊行予定）

IGS Project Series 22
国際シンポジウム
議員になれるのは誰なのか？
フランスの政治と議会史からみる立法府のジェンダー化
（2019 年夏刊行予定）

IGS Project Series 23
特別招聘教授プロジェクト特集
デルフィーヌ・ガルディ
（2019 年夏刊行予定）

8. 文献収集と公開・史料電子化・ウェブ発信

1）文献・資料の収集と公開

2）IGS 史料電子化プロジェクト

3）ウェブサイトでの情報発信

1）文献・資料の収集と公開

ジェンダー研究の知の基盤の一層の充実を図る

ジェンダー研究所は、1975 年創立の「女性文化資料館」時代から今日に至るまで 40 年以上にわたり、女性学・ジェンダー研究の文献・資料の収集を絶え間なく続けてきた。女性に関する膨大な知の集積ともいえる蔵書は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外から OPAC（Online Public Access Catalog）で検索でき、手続きを経れば学外の者も利用可能である。

2018 年度も、寄贈・購入により、多数の文献・資料を収集することができた（新規収蔵図書・資料の詳細は本報告書巻末資料 166〜167 頁参照）。

■附属図書館専用書架での蔵書貸出・閲覧

ジェンダー研究所収蔵文献（書籍約 25,000 冊、雑誌約 340 種）は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外の学生や研究者に利用されている。

《図書館利用案内》

〇開館日

・月〜金　8:45〜21:00　（授業のない日は 17:00 まで）

・土　9:00〜17:00　（夏・冬・春期休業期間中は閉館）

・日　12:00〜17:00

（毎週ではありません。図書館カレンダーでご確認ください）

〇閉館日

・日曜日、国民の祝日、年末年始、大学夏季一斉休業日

・夏・冬・春期休業期間中の土曜日

・蔵書点検、

・徽音祭当日、創立記念日、入学試験日当日、卒業式

■蔵書・研究者に関する情報提供

附属図書館収蔵文献・資料のほかに、ジェンダー研究所内にて、購入雑誌・寄贈雑誌の最新号、研究所の過去の成果刊行物、事業の記録、所属研究者執筆の書籍のほか、全国のジェンダー研究施設や男女共同参画団体の定期刊行物を閲覧することができる。

資料閲覧対応のほか、研究者及びジェンダーに関心を持つ方々に、これらの文献や資料、研究所に蓄積された知識を広く活用してもらうため、メールや電話による外部からの問い合わせ、訪問依頼にも随時対応している。

■お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでの資料公開
http://archives.cf.ocha.ac.jp/

お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでは、本学を卒業し、女性の先駆的研究者として活躍した保井コノ、黒田チカ、湯浅年子、辻村みちよの研究業績をまとめた資料目録などが公開されている。

これらの資料は、女性文化資料館時代の 1981 年の文部省特定研究「女性高等教育とその成果に関する総合的研究」における 2 つのプロジェクト、「Ⅲ 婦人研究者の活動状況に関する調査研究―自然科学分野を中心に―」「Ⅳ 女性文化に関する文献・資料の収集及び調査研究」の中で、それぞれのご遺族の協力を得て収集した遺品のうち、研究関連のものを整理し、長い時間を掛けて目録化したものである。

目録化は本研究所の前身機関のプロジェクト成果であるが、これを大学の歴史資産として広く公開するよう、2007～2009 年にデジタルアーカイブズ化された。現在、資料現物は理学部内に設置された「女性科学者資料室」で保管され、本学図書・情報課　情報基盤担当が窓口となって資料閲覧や貸出等の依頼に応じている。

2）IGS 史料電子化プロジェクト

■2018 年度成果概要

ジェンダー研究所は昨年度（2017 年度）、「IGS 史料電子化プロジェクト」を始動した。ジェンダー研究所の前身であるジェンダー研究センター（1996 年設立）、女性文化研究センター（1986 年設立）、女性文化資料館（1975 年設立）において、先人たちが開催してきた様々な研究会やセミナー、国際シンポジウムの史料を電子化し、デジタルアーカイブのかたちで後世に残すことで、ジェンダー研究のさらなる発展に寄与することを目指すプロジェクトである。

2 年目を迎えた 2018 年度は、昨年度に引き続きカセットテープの音声データの電子化、DV テープの動画データの電子化、実施イベント記録一覧の整備などを進めた。実施イベントは、女性文化資料館（1975-1985）時代と女性文化研究センター（1986-1995）時代だけでも 170 件余りにのぼる。登壇者やゲストの多くは後にジェンダー研究の重鎮となる方々であり、そのテーマは学際的・国際的で、今日においてさえ褪せることのない先進性を誇っている。

電子化作業中の女性文化資料館（1975～1985 年度）、女性文化研究センター（1986～1995 年度）時代の実施イベント一覧と詳細は、本報告書巻末資料 168～172 頁を参照いただきたい。

3）ウェブサイトでの情報発信

事業内容ごとの発信の充実

ウェブサイトでは、研究所基本情報や事業内容、研究プロジェクト、シンポジウムやセミナーの開催案内とその実施報告、刊行物のオンライン公開といった総合的な情報発信を日英言語で進めているが、2018 年度は特に、内容を刷新した『ジェンダー研究』の特設サイト作成に取り組んだ。2019 年度初めに公開が開始される予定であり、この新しいウェブサイトによる、研究所が発行する学術誌の国際的な認知度の向上が期待される。ノルウェー科学技術大学との共同プロジェクトについての情報発信をする特設ページの準備も進められているなど、年々厚みを増す研究所の事業成果を、効果的に発信する努力を継続する。

■日本語ウェブサイト http://www2.igs.ocha.ac.jp/

■英語ウェブサイト http://www2.igs.ocha.ac.jp/en/

○新設『ジェンダー研究』ウェブサイトデザイン

タイトルトップ
（英語サイト）

目次と PDF
（英語サイト）

投稿規定・執筆要項オンライン投稿
（日本語サイト）

9. 社会貢献

▶社会貢献概要

ジェンダー研究の成果を積極的に社会に還元

ジェンダー研究所所属研究者は、行政機関等が開催する一般向け男女共同参画関連講座の講師を担当したり、メディアの専門家取材に応じるなど、男女共同参画分野での社会貢献や、研究成果の社会還元に積極的に取り組んでいる。また、高等学校生徒のジェンダーをテーマとする校外学習活動に協力するなど、若年世代のジェンダー課題理解の推進に努めている。

■男女共同参画センター等での講演

石井クンツ昌子（所長）

・福井県みらいきらりプログラム講義「ワークライフバランス」（2018 年 7 月 18 日）
・葛飾区区民大学講座「オトナのオンナの女性学」講師（2018 年 10 月 13 日）
・名古屋大学ジェンダーリサーチライブラリ講演「お茶の水女子大学ジェンダー研究所：歴史・教育・研究・ネットワーク」（2019 年 1 月 11 日）
・筑西市男女共同参画セミナー「ワーク・ライフ・バランスってなに？～その現状と課題～」（2019 年 1 月 18 日）
・川崎市すくらむ 21「子育て期の夫婦で考えるポジティブ　ワーク・ライフ・バランス　（2019 年 2 月 3 日）
・笹川平和財団「Men’s Roles: A Comparison among Five East Asian Cities」（2019 年 2 月 20 日）
「揺らぐ男性性」研究会「日本およびアジア地域における男性意識調査の分析について」（2019 年 3 月 12 日）

申琪榮（准教授）

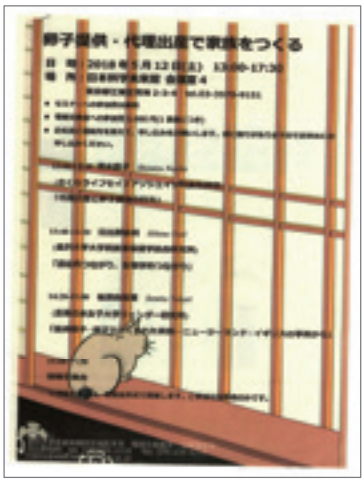
・埼玉大学第 10 回男女共同参画室講演会「女性教員を増やすことの意義と方法 －男女均等は世界の潮流－」（2018 年 11 月 8 日）
・福岡県国際女性シンポジウム『Cast Your Shell 殻を破れ』コメンテータ（2018 年 9 月 8 日）
・福岡市『女性のための政治スクール』講演「政治を変えるクオータ制：世界の動向・日本の動向」、福岡・女性議員を増やす会（2018 年 7 月 17 日）
・福岡市「地域で男女共同参画！～広げようネットワーク」主催講演「女性議員を増やして政治を変えよう！」（2018 年 10 月 20 日）
・「トランプ時代の女性と政治」パネリスト、公益財団法人笹川平和財団（2018 年 7 月 17 日）
・市民政治フォーラム(홍익표, 이정미, 진선미의원 공동대표)「MeToo から女性政治まで: 社会の周辺から政治的主体へ」（2018 年 8 月 24 日）、ソウル市　韓国国会委員会館
・公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム KFAW アジア研究者ネットワークセミナー「なぜ増えた、世界の女性議員－女性議員が増えると何が変わる？－」（2019 年 2 月 16 日）、北九州市.
・埼玉県男女共同参画推進センター第 17 回 With You さいたまフェスティバル講演会「合言葉は、パ・リ・テ!!～意思決定の場を男女同数に～」（2019 年 2 月 3 日）

板井広明（特任講師）

・文化服装学院ファッション流通専門課程リテールプランニングコース講師（全 3 回のうち 2 回。2018 年 6 月 4 日「次世代ＦＢにおける美意識（真善美）の重要性」、6 月 25 日「ショップ運営における倫理・哲学的意識（エシカル、サスティナブル、エコ、フェアトレードなど）の重要性」）

仙波由加里（特任リサーチフェロー）

・日本科学未来館公開セミナー『卵子提供･代理出産で家族をつくる』、　講演タイトル「提供精子・提供卵子でつくられた家族―ニュージーランド・イギリスの事例から」講師。於：日本科学未来館。参加者約 40 名。（2018 年 5 月 12 日）



日本科学未来館公開セミナーポスター

■地方公共団体男女共同参画事業への参与

石井クンツ昌子（所長）

・福井県男女共同参画審議会会長

■NPO 事業への参与

申琪榮（准教授）

・女性政治リーダーを養成する一般社団法人「パリテ・アカデミー」（Academy for Gender Parity）を立ち上げ共同代表を務める。

■校外学習活動等への協力

・広島県立尾道北高校の高校生 5 名の IGS 訪問に対応。担当：仙波由加里（特任リサーチフェロー）。（2018 年 7 月 25 日）

・栃木県立宇都宮高校の高校生 3 名の IGS 訪問に対応。担当：板井広明（特任講師）、仙波由加里（特任リサーチフェロー）（2018 年 8 月 21 日）

■外部機関倫理審査委員会への参与

仙波由加里（特任リサーチフェロー）

・公益財団法人　神経研究所　倫理審査委員会　審査委員

・みなとみらい夢クリニック　倫理審査委員会　審査委員

■新聞等記事へのコメント提供ほか

石井クンツ昌子（所長）

・博報堂生活総研　調査結果に対するヒアリング（2018 年 4 月 20 日）
・新聞・雑誌等の取材、新聞コラム執筆など多数

申琪榮（准教授）

・『東京新聞』2018 年 5 月 17 日「女性政治塾 続々」
・『毎日新聞』2018 年 5 月 17 日「政治分野における男女共同参画推進法成立」
・『朝日新聞』2018 年 6 月 26 日「（Ｄｅａｒ　Ｇｉｒｌｓ）女性政治塾、学生も刺激　格差や多様性、考える機会に」
・『日本経済新聞』2018 年 7 月 29 日「めざせ女性政治家！米「選挙のプロ」日本でセミナー 男女共同参画推進法が契機」
・『朝日新聞』2018 年 9 月 9 日「ジェンダーの平等「経済発展に必要」福岡で国際女性シンポ」
・『東京新聞』2018 年 10 月 12 日「異様さ目立つ早大セクハラ調査報告」
・『中日新聞』2018 年 10 月 28 日「ジュニアコーナー「女性と政治」特集」
・『西日本新聞』2018 年 11 月 30 日「福岡市で開かれた「女性の政治参画を考える講演会」について」
・『都市問題』2019 年 1 月号「女性政治リーダーをどう育てるか？」
・『共同通信』（茨城新聞、伊勢新聞、山口新聞、高知新聞、埼玉新聞）2019 年 1 月 26～28 日「地方議会の女性議員ゼロ解消に向けて」
・『東京新聞』2019 年 1 月 28 日「（ニュースがわかる A to Z）別姓婚求め 相次ぎ訴訟」
・『パリテウェーブ from 福岡』2019 年 2 月号
・『AFER(Alliance of Feminist Representatives)』2019 年 2 月 28 日
・『with you さいたま』2019 年 3 月号「2/3 に開催された With You さいたまフェスティバル講演会の内容紹介」
・『北海道新聞』2019 年 3 月 22 日「最後の「冬」問題監督作に物議」
ほか多数

大野聖良（特任リサーチフェロー）

・アジア女性資料センター『女たちの 21 世紀 no.95: 夫婦別姓はなぜ阻まれ続けるのか』2018 年 9 月「旧姓併記は『例外的措置』？―パスポートから夫婦別姓を考える」（夫婦別姓・通称使用をめぐる問題について）

資料

① 構成メンバー
② 研究プロジェクト一覧
③ 協力研究者一覧
④ 国際シンポジウム･セミナー･研究会一覧
⑤ 2018 年度新規収蔵図書・資料
⑥ 史料電子化プロジェクト電子化イベント一覧
⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則
⑧ 国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則
⑨『ジェンダー研究』編集方針・投稿規程
⑩ ジェンダー研究所ウェブサイトプライバシー・ポリシー

【資料】①構成メンバー

［所長］	**《任期》**
石井クンツ昌子（基幹研究院人間科学系・生活科学部教授）	2015（H27）年10月1日～2020年3月31日
［専任教員］	
申琪榮（ジェンダー研究所准教授）	2015（H27）年4月1日～
大橋史恵（ジェンダー研究所准教授）	2018（H30）年9月1日～
［研究員］	
小玉亮子（基幹研究院人間科学系・生活科学部教授）	2017（H29）年4月1日～2019（H31）年3月31日
棚橋訓（基幹研究院人間科学系・文教育学部教授）	2017（H29）年4月1日～2019（H31）年3月31日
斎藤悦子（基幹研究院人間科学系・生活科学部准教授）	2017（H29）年4月1日～2019（H31）年3月31日
［特別招聘教授］	
ジャン・バーズレイ（ノースカロライナ大学チャペルヒル校・教授）	2018（H30）年8月2日～2019（R元）年7月31日
デルフィーヌ・ガルディ（ジュネーブ大学・教授）	2018（H30）年12月1日～2019（H31）年1月31日
［特任講師］	
板井広明	2018（H30）年4月1日～2019（H31）年3月31日
［特任リサーチフェロー］	
仙波由加里	2018（H30）年4月1日～2019（H31）年3月31日
佐野潤子	2018（H30）年4月1日～2018（H30）年7月31日
大野聖良	2018（H30）年10月16日～2019（H31）年3月31日
吉原公美	2018（H30）年4月1日～2019（H31）年3月31日
［アカデミック・アシスタント］	
梅田由紀子	2018（H30）年4月1日～2019（H31）年3月31日
滝美香	2018（H30）年4月1日～2019（H31）年3月31日
稲垣明子	2018（H30）年4月1日～2019（H31）年3月31日
和田容子	2018（H30）年4月1日～2019（H31）年3月31日
［客員研究員］	
足立眞理子	2018（H30）年4月1日～2019（H31）年3月31日
［研究協力員］	
マウラ・スティーブンス（国際交流基金フェロー/ハワイ大学（院））	2017（H29）年9月14日～2018（H30）年3月31日
平野恵子	2018（H30）年4月1日～2019（H31）年3月31日

所長 石井クンツ 昌子

基幹研究院人間科学系・教授
生活科学部生活社会科学講座
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース
博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 家族社会学、ジェンダー社会学、社会心理学

所属学会 日本家族社会学会（会長）
日本学術会議 連携会員／統計データアーカイブ分科会（会長）／
ウェブ調査の課題に関する検討分科会（幹事）
日本社会学会
日本家政学会家族関係部会
福井県男女共同参画審議会（会長）
National Council on Family Relations

主な業績

《著書・論文・報告書・書評》

2019 "Japanese Child Caring Men (*Ikumen*) and Achieving Work-Life Balance." Meier-Gräwe, Uta, Motozawa, Miyoko and Schad-Seifert, Annette (Eds.). *Family Life in Japan and Germany: Challenges for a Gender Sensitive Family Policy.*

2019 『IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本・韓国・米国・スウェーデンの国際比較から』平成 25～30 年度科学研究費補助金基盤研究（A）報告書

2019 多賀太『男子問題の時代？錯綜するジェンダーと教育ポリティクス』Social Science Japan Journal.

2018 藤崎宏子・池岡義孝『現代日本の家族社会学を問う―多様化のなかの対話』社会学評論 (2018) 69(2), pp.264-266.

2018 「育児・家事と男性労働」『日本労働研究雑誌』第 699 巻 pp.27-39.

2018 「家族社会学研究の能動的な国際化に向けて」『家族社会学研究』 第 30 巻 (1) pp.7-17.

《講演・報告等》

2019 「ワーク・ライフ・バランスってなに？~その現状と課題~」筑西市男女共同参画セミナー 1 月

2019 「お茶の水女子大学ジェンダー研究所：歴史・教育・研究・ネットワーク」名古屋大学ジェンダーリサーチライブラリ 1 月

2019 "Gender and Leadership: A Case of Japan." Women's Global Leadership from Gender Perspectives. Ochanomizu University. January.

2019 「育児期親子の IT 活用：研究の概要と主な結果」『育児期親子の IT とソーシャルメディア活用：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較』シンポジウム 2 月

2019 "Caring Masculinity and Men's Roles-A Comparison among Five East Asian Cities- East Asian Sociological Association, March.

2018 "Internet Use and its Effect on Families and Children: A Japan and U.S. Comparison." National Council on Family Relations, San Diego, November.

2018　「ワーク・ライフ・バランス」福井県みらいきらりプログラム 7 月
2018　「ママのための女性学」葛飾区区民大学 1 月
2018　「オトナのオンナの女性学」葛飾区区民大学　10 月

《競争的資金》

・ 科学研究費基盤研究 A「IT 社会の子育てと家族・友人関係: 日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」、2014～2018 年度、研究代表者
・ 科学研究費基盤研究 B「揺らぐ男性性」2018～2020 年度、伊藤公雄（研究代表者）

専任教員（准教授） 申 琪榮

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域（領域長）
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース（コース長）
生活科学部生活社会科学講座

専門分野: 比較政治学（東アジア）、ジェンダーと政治、フェミニズム理論、最近の研究分野は、政治分野におけるジェンダー・クオータと代表性、比較女性運動、ジェンダー主流化政策など。

所属学会等
International Political Science Association
American Political Science Association
European Consortium for Political Research
International Feminist Economics Association
日本政治学会（分野別研究会「ジェンダーと政治研究会」）
日本フェミニスト経済学会
日本社会政策学会
ソウル大学日本研究所『日本批評』海外編集委員
韓国ジェンダー政治研究所研究委員
ソウル大学 SSK（Social Science Korea）東アジア地域秩序研究会共同研究員
日本比較政治学会（編集委員）
「女性・戦争・人権」学会
Association for Asian Studies in Asia
European Association for Japanese Studies

主な業績

《論文・共著・その他》

2018 "Gender, Election Campaigns and the First Female President of South Korea," *The Journal of Gender Studies,* No. 21, pp. 71-86.

2018 "Introduction for the Special Section," *The Journal of Gender Studies*, No. 21, pp. 5-8.

2018 "South Korean Views on Japan's Constitutional Reform under the Abe Government," *The Pacific Review*, Vol. 31, Issue. 2, pp. 256-266 (with EJ Cho) DOI: 10.1080/09512748.2017.1397731

2018 "2018 US Mid-term Election: Another Women's Year?" *Gender Review,* 50: 64~70 (韓国語).

2018 제 17 장 「젠더」,『세계정치론』 을유문화사, 366-387. Korean translation of Ch.17 "Gender," in *The Globalization of World Politics (*eds. by John Baylis, Steve Smith and Patricia Owens Oxford Univ. Press).

2018 「＃MeToo 運動がもたらした変換」、『女も男も』 秋・冬号 No.132、47-52 頁

2019 「女性政治リーダーをどう育てるか？──政治分野における男女共同参画推進法の活かし方」、『都市問題』110 巻 1 月号、83～91 頁（三浦まりと共著）

2019 『台湾におけるジェンダー・クオータその経験と影響分析』東アジアにおけるジェンダーと政治ブックレットシリーズ No.1（和田容子と共編）

2019「性化された権力──＃MeToo 運動が明らかにしたハラスメントの実態と変革の可能性」、『女性労働問題』63 号、43～65 頁

2019 "#MeToo in Japan and South Korea: #WeToo, #WithYou," Journal of Women, Politics & Policy, 40 (1): 97-111 (with Linda Hasunuma).

《学会報告》

2018 “Are Women Legislators More Peace-oriented?” World Social Science Conference, Fukuoka, Japan, Sep. 25-28.

2018 “Gender and Power Relations in Japanese Life-Insurance Companies: From the Perspective of Interactive Service Work Triangle,” World Social Science Conference, Fukuoka, Japan, Sep. 25-28 (with Kaoru Kanai).

2018 “Does “Constituency Facetime” Reproduce male Dominance: Insights from Japan’s Mixed-Member Majoritarian Electoral System,” International Political Science Association, Brisbane, Australia, July 21-25 (With Mari Miura and Jackie Steele).

《招待講演・ワークショップ報告》

2018 「超国家的女性ネットワークと慰安婦問題の国際化」韓国外国語大学　国際シンポジウム『慰安婦問題の国際化』2018 年 12 月 9 日、ソウル市

2018 「女性教員を増やすことの意義と方法　－男女均等は世界の潮流－」 埼玉大学 第 10 回男女共同参画室講演会 2018 年 11 月 8 日.

2018 福岡県国際女性シンポジウム『Cast Your Shell 殻を破れ』コメンテータ、2018 年 9 月 8 日.

2018 福岡市『女性のための政治スクール』講演「政治を変えるクオータ制：世界の動向・日本の動向」、福岡・女性議員を増やす会、2018 年 7 月 17 日.

2018 福岡市「地域で男女共同参画！～広げようネットワーク」主催講演「女性議員を増やして政治を変えよう！」、2018 年 10 月 20 日.

2018 「韓国のクオータ制度は定着したのか」 釜山大学　女性研究所　30周年記念シンポジウム『政治代表性のジェンダー格差と制度』2018 年 9 月 14 日　釜山市

2018 「MeToo から女性政治まで: 社会の周辺から政治的主体へ」市民政治フォーラム(홍익표, 이정미, 진선미의원 공동대표) 2018 年 8 月 24 日、ソウル市　韓国国会委員会館

2018 「性化する権力：＃MeToo 運動が明らかにしたこと」女性労働研究会シンポジウム『＃MeToo の先へ』、2018 年9月９日

2018 「日本の家族制度：夫婦別姓と女性の名前」、韓国 Yonsei University 法科大学院特別講義 2018 年 1 月 4 日

2018 「「トランプ時代の女性と政治」パネリスト、公益財団法人笹川平和財団、7 月 17 日.

2018 「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律」、韓国国会立法調査處、2018 年 9 月 6 日.

2019 「なぜ増えた、世界の女性議員－女性議員が増えると何が変わる？－」公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム KFAW アジア研究者ネットワークセミナー2019 年 2 月 16 日、北九州市.

2019 「合言葉は、パ・リ・テ!!～意思決定の場を男女同数に～」 埼玉県男女共同参画推進センター第 17 回 With You さいたま フェスティバル講演会 2019 年 2 月 3 日.

《競争的資金（国内・海外）》

・科学研究費基盤研究 B 「女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査」、2018～2020 年度、研究分担者

・韓国研究財団　一般共同研究「議会内政治的代表性の性差に関する公式・非公式的制度要因研究：韓国、日本、台湾比較分析」、2016～2018 年度、研究分担者

・Social Science Korea. “East Asian International Relations Theory” 研究代表者：Jae Sung Chun (Seoul National Univeristy)、2015～2018 年度、研究分担者

専任教員（准教授） 大橋 史恵

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース
文教育学部グローバル文化学環

専門分野: ジェンダー研究、国際社会学、中国地域研究

所属学会等: International Association for Feminist Economics
日本社会学会
関東社会学会
日本フェミニスト経済学会（幹事会役員）
ジェンダー史学会（常任理事）
現代中国学会

主な業績

《著書・論文》

2018 「『寄る辺のなさ』を越える――中国の都市社会に生きる農村女性たち」、川端浩平・安藤丈将編『サイレント・マジョリティとは誰か――フィールドから学ぶ地域社会学』、ナカニシヤ出版、

2018 「改革・開放期のジェンダー秩序の再編――婦女連合会のネットワークに着目して――」、小浜正子編『中国ジェンダー史研究入門』、京都大学学術出版会

2018 「『逃げ恥』考――再生産労働は『夫婦を超えてゆけ』るか」、『女性労働研究』(68)、pp.198－205

《学会報告・講演》

2018 「『逃げ恥』考――再生産労働は『夫婦を超えてゆけ』るか――」、女性労働問題研究会読者会 2018、東洋大学白山キャンパス、6 月 2 日。

《競争的資金》

・ 科学研究費補助金・基盤研究 B「新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー――インド・フィリピン・中国の国際比較」（課題番号：17H02247）分担研究者（研究代表者：堀芳枝）、2018 年度～2019 年度

特任講師 板井 広明

専門分野: 社会思想史、経済学史、食の倫理とジェンダー

所属学会等: 経済学史学会（幹事、編集委員、編集委員会事務局）
日本イギリス哲学会
社会思想史学会
政治思想学会
日本フェミニスト経済学会（幹事）
日本有機農業学会
日本経済理論学会（分野別ジェンダー分科会コアメンバー）

【担当業務】

・研究プロジェクト「リベラル・フェミニズムの再検討」（21 頁参照）
・国際教育プログラム「AIT ワークショップ」（107～113 頁参照）
・大学院講義科目「国際社会ジェンダー論」演習（119 頁参照）
・IGS セミナー合評会：倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー：90 年代保守言説のメディア文化』企画・コーディネーター・司会（57 頁参照）
・IGS セミナー「近代日本のファッション文化を再考する：女性・近代化・対抗文化」企画・コーディネーター・司会（59 頁参照）
・IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」企画・コーディネーター・司会・報告（61 頁参照）
・IGS セミナー「フランス啓蒙の女性論」企画・コーディネーター・司会（73 頁参照）
・IGS セミナー「性同一性障害とトランスジェンダーは「水と油」か」企画・・コーディネーター・司会（77 頁参照）
・IGS ランチョンセミナー企画運営
・IGS 運営会議陪席メンバー
・ウェブサイト・SNS・メーリングリスト等による情報発信・広報（130 頁参照）
・シンポジウム・セミナー・研究会ポスター作成（42～44 頁参照）
・情報機器・ネットワーク管理

主な業績

《学会報告等》

2018「ベンサム功利主義における女性・結婚・両性の平等」、IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（お茶の水女子大学）、2018 年 10 月 1 日

2018「食の倫理と有機農業：徳倫理から功利主義へ」、日本有機農業学会第 19 回大会（広島県立大学）、2018 年 12 月 9 日

特任リサーチフェロー 仙波 由加里

専門分野：生命倫理学、バイオエシックス、ジェンダー、
生殖技術に関連する倫理的問題

所属学会等：日本医学哲学・倫理学会（国際誌編集委員）
日本生命倫理学会（評議委員）
日本生殖看護学会
European Society of Human Reproduction and Embryology (ESHRE)

【担当業務】

- 研究プロジェクト「生殖医療とジェンダー」（24 頁参照）
- 研究プロジェクト「人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究」（25 頁参照）
- 研究プロジェクト「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」（26 頁参照）
- 研究プロジェクト「生殖補助技術で形成される家族についての研究」（27 頁参照）
- 研究プロジェクト「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」（28 頁参照）
- IGS セミナー（生殖領域）「代理出産をめぐる世界の現状～商業的代理出産から利他的代理出産へ」企画・コーディネーター・司会（63 頁参照）
- IGS セミナー（生殖領域）「フランスにおける LGBT と生殖医療　および性別の表記変更」企画・コーディネーター・司会（67 頁参照）
- 『ジェンダー研究』、編集スタッフ。主に書評編集担当（122～125 頁参照）
- 海外からの問合・訪問者対応

主な業績

《著書・論文》

2018　仙波由加里、「第 2 章第 2 節　生殖医療の倫理的・社会的・法的課題」「第 2 章第 3 節　第三者のかかわる生殖医療をめぐる倫理的課題」丸山マサ美編著『バイオエシックス　その継承と発展』川島書店 62-70、70-76.

2018　仙波由加里、2018、「「正常さ」と「異常さ」の境界―「不幸な生」に関する倫理的背景に関する考察―」『医学哲学医学倫理』36、102-105

《学会報告・講演》

2018　依頼講演：日本科学未来館公開セミナー『卵子提供・代理出産で家族をつくる』、 講演タイトル「提供精子・提供卵子でつくられた家族―ニュージーランド・イギリスの事例から」（2018 年 5 月 12 日、日本科学未来館）

2018　学会報告：第 30 回日本生命倫理学会年次大会　一般口演 V「理想的な配偶子ドナーとはどのような人か―ニュージーランドと英国でのドナーへのインタビューから―」、第 30 回日本生命倫理学会年次大会（2018 年 12 月 8 日-9 日、京都府立医科大学）

2018　学会座長：第 30 回日本生命倫理学会年次大会　一般口演VI「先端医療技術」、（2018 年 12 月 8 日-9 日、京都府立医科大学）

2019　シンポジウムコメンテータ：日本大学シンポジウム『アジアのリプロダクションは今―生殖医療とジェンダー』、「生殖医療、欧米とアジアの比較」（2019 年 3 月 23 日、日本大学文理学部本館 2 階会議室 A）

2019　コメンテータ：日本人口学会東日本地域プログラム『性に関する情報と実践　性教育』（2019 年 3 月 30 日、東京大学本郷キャンパス　医学部教育研究棟　13 階　第6セミナー室）

《競争的資金》

- トヨタ財団研究助成 「生殖補助技術で形成される家族についての研究」（2017 年 5 月～2019 年 12 月末）研究代表者
- 科学研究費基盤研究 C（課題番号：18K00034）「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」（2018 年～2020 年度）研究代表者
- 科学研究費基盤研究 C（課題番号：16K12111）「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」、（2016 年～2018 年度、研究代表者：清水清美（城西国際大学））、研究分担者

特任リサーチフェロー 大野 聖良

専門分野: ジェンダー研究、人身取引、女性に対する暴力、
入管体制（移民政策）とジェンダー

所属学会等: 国際ジェンダー学会（評議員・編集委員）
日本女性学会
ジェンダー法学会
日本フェミニスト経済学会
国際政治学会
日本移民学会

【担当業務】

- 研究プロジェクト「日比間の在留資格「興行」をめぐる言説編成の解明：入国管理のジェンダー分析を目指して」（32 頁参照）
- 研究プロジェクト「日比間の人の移動における支援組織の役割：移住女性と JFC の経験に着目して」（33 頁参照）
- 研究プロジェクト「グローバル性労働と人身取引の狭間にあるもの：聞き取りとネットワーク分析から」（34 頁参照）
- 研究プロジェクト「人身売買／取引をめぐる市民活動の変遷：ネットワーク再構築に向けて」（35 頁参照）
- IGS セミナー「近代日本の女性の移動と再生産：「からゆきさん」の生涯をめぐって」（75 頁参照）
- 『ジェンダー研究』編集担当（122 頁参照）
- 海外からの問合・訪問者対応

主な業績

《学会報告・講演》

2018 ONO, Sera. “Gendered immigration in Japan: ‘Entertainment Visas’ Reconsidered” in Session2 “Women’s Initiative to Policy and Practice in Empirical Studies: In Qualitative Research in the Field of Labor, Activity and Support”, at 27th International Association for Feminist Economics Annual Conference, New York, US, June 2018.

2018 ONO, Sera. “The Movement against “Entertainment Visas” by NGOs in the Philippines: Between Human Trafficking and Migration” in Panel Session “Three Decades of Trajectory of Research and Action for Migrant Women and Japanese-Filipino Children”, at the 4th Philippine Studies Conference in Japan, Hiroshima, Japan, November 18

2018 研究報告 佐々木綾子・大野聖良「日本におけるトラフィッキング概念の形成と運動の検討――アメリカとの比較から」国際ジェンダー学会 2018 年大会個人発表、聖心女子大学、2018 年 9 月.

2018 講演 ONO, Sera. “Human Trafficking in Japan: The Latest Trends and Protections” at NGO Maligaya House 20th year Anniversary Event “Panel discussion: Voice-out Japanese Filipino Children Youth in the Philippines and in Japan”, Quezon, the Philippines, August 2018.

2018 ワークショップ 「『ジャパゆきさん』とは誰か――日本の女性運動の視点から」北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院東アジアメディア研究センター、メディア・ツーリズム研究センター、科研基盤C「森崎和江の越境する連帯の思想」（研究代表者：北海道大学 玄武岩准教授）主催 ワークショップ「森崎和江の越境する連帯の思想――『からゆきさん』の近代と現代」、北海道大学遠友学舎、2018 年 8 月.

2018 研究報告 「招聘業界における在留資格「興行」の問題構成――招聘業界誌『入国ジャーナル』をてがかりに」、日本移民学会 2018 年大会自由論題、南山大学、2018 年 6 月.

《競争的資金》

- 科学研究費基盤研究 B（課題番号：17H02600）「日比間の人の移動における支援組織の役割：移住女性と JFC の経験に着目して」、2017～2019 年度、研究分担者
- 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））（課題番号：18KK0056）「グローバル性労働と人身取引の狭間にあるもの：聞き取りとネットワーク分析から」、2018～2022 年度、研究分担者
- 科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K04196）「人身売買／取引をめぐる市民活動の変遷：ネットワーク再構築に向けて」、2017～2019 年度、研究分担者

特任リサーチフェロー 佐野 潤子

専門分野：女性労働、家族社会学、家庭科教育、キャリアとジェンダー、
ジェンダーとジェロントロジー

所属学会：家族社会学会
日本家政学会家族関係学部会
家庭科教育学会
生活経済学会

【担当業務】

・研究プロジェクト「働く父親・母親の複数役割満足感の要因の検討」
・IGS 関連研究会「家族とキャリアを考える会」（頁参照）
・『ジェンダー研究』編集事務局（頁参照）
・海外からの問合・訪問者対応

主な業績

《論文》

2019　佐野潤子、「An Expansionist Theory における有職母親の Multiple Role の要因の検討」、『生活経済学研究』、査読有、第 49 巻、2019 年 3 月、pp27-39.

《学会発表・報告等》

2018　学会発表：日本家族社会学会「母親と父親の育児行動頻度と子育てに関する IT 利用の関わり―日米比較」（2018 年 9 月 8 日、中央大学多摩キャンパス）

2018　学会発表：日本家政学会家族関係学部会「IT利用と子育てにおけるジェンダー」（2018 年 10 月 13 日、鎌倉女子大学）

2018　学会発表：National Council on Family Relations, “The Effect of Mothers’ IT Use on Maternal Fulfillment and Anxiety over Children’s IT Use among Dual-Earner Families”（2018 年 11 月 8 日、Town and Country Resort and Convention Center, University of Nebraska-Lincoln, San Diego, California, サンディエゴ）

2018　学会報告：生活経済学会関東部会「リスク選好におけるジェンダー～先行研究からの考察～」（2018 年 11 月 24 日、嘉悦大学）

2019　報告書：「IT 利用と育児サポートネットワークは父親の育児行動頻度を高めるか：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」研究代表者石井クンツ昌子『平成 26 年度～平成 30 年度科学研究費補助金　基盤研究　課題番号 26242004 研究成果報告書　IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から』、pp21-27.

《競争的資金》

・科学研究費若手研究「有職母親の複数役割満足感を高める要因の解析　－日本とノルウェーの国際比較－」（１８Ｋ１２９２４）（2018 年度～2022 年度）
・ 科学研究費基盤研究 A「IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」、2014～2018 年度、研究代表者石井クンツ昌子教授　研究会メンバー

研究員 棚橋 訓

基幹研究院人間科学系・教授
文教育学部人間社会科学科教育科学コース
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース
博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 文化人類学、オセアニア地域研究、ジェンダー文化論、セクシュアリティ研究

主な担当業務:
ジェンダー研究所運営会議メンバー
マウラ・スティーブンス（国際交流基金フェロー/ハワイ大学大学院/IGS 研究協力員）受入研究者

研究員 小玉 亮子

基幹研究院人間科学系・教授
生活科学部発達臨床心理学講座
博士前期課程人間発達科学専攻
博士後期課程人間発達科学専攻

専門分野: 子ども社会学、教育学

主な担当業務:
ジェンダー研究所運営会議メンバー
Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)メンバー

研究員 斎藤 悦子

基幹研究院人間科学系・准教授
生活科学部生活社会科学講座
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース
博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 生活経済学、生活経営学、企業文化論

主な担当業務:
ジェンダー研究所運営会議メンバー

客員研究員　足立 眞理子

委嘱期間：2018 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日

研究プロジェクトタイトル

新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー：インド・フィリピン・中国の国際比較（科学研究費基盤研究 B：17H02247）

資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々

研究成果

論文掲載

足立眞理子, 2018「アベノミクスにおける金融緩和とジェンダー」『日本フェミニスト経済学会誌　経済社会とジェンダー』3: 43-57.

IGS セミナー企画開催

「フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション：サスキア・サッセンとの対話」（Globalization and Dislocation from Feminist Perspective: Dialogues with Saskia Sassen）（2018 年 10 月 15 日）

研究協力員　平野 恵子

委嘱期間：2018 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日

研究プロジェクトタイトル

現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容（基盤研究 C：17K02067）

インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合（基盤研究 C：17K02051）

研究成果

論文掲載

平野恵子, 2018,「書評　安里和晃編『国際移動と親密圏−ケア・結婚・セックス』京都大学学術出版会、2018 年」『日本フェミニスト経済学会誌−経済社会とジェンダー』3: 137-9.

学会発表

Hirano Keiko, 2018, “Gig-economy and domestic workers in Indonesia” The 27th International Association for Feminist Economics (IAFFE) 2018 Annual Conference at SUNY New Paltz (New Paltz, NY), Panel on Women’s initiative to policy and practice in empirical studies: in qualitative research in the field of labor, activity and support, Oral Presentation, 19th June 2018.

平野恵子, 2018, 「ジャカルタ首都圏におけるギグ・エコノミーと家事労働者」日本フェミニスト経済学会 2018 年度大会於ウィングス京都（2018 年 7 月 7 日）

IGS 主催研究会「IGS 研究協力員研究報告会」における発表

「『技能化』と組織化：インドネシアにおける移住・家事労働者の権利保護」（2018 年 7 月 30 日）

研究協力員　マウラ スティーブンス

（ハワイ大学博士課程大学院生／国際交流基金フェロー）

受入期間：2017 年 9 月 14 日～2018 年 3 月 31 日

受入担当：棚橋 訓（IGS 研究員／お茶の水女子大学教授）

研究プロジェクトタイトル：日本における生理の経験に関する医療人類学的研究

研究成果

学会発表

“Managing” Menstruation in Japan: Experiences of Pain and Discomfort Hidden in Plain Sight,University of Hawai‘i at Mānoa Department of Anthropology Colloquium Series,Anthropology Graduate Student Research Symposium,,Honolulu, Hawai‘i, April 11th, 2019

Putting Up with It: Hidden Experiences of Menstruation in Japan,Association for Asian Studies Conference,Denver, Colorado, March 23rd, 2019

Dealing with It: The Hidden World of Menstruation in Japan,American Anthropological Association 117th Annual Meeting,San Jose, California, November 15th, 2018

IGS 主催研究会「IGS 研究協力員研究報告会」における発表

「日本における生理に関する医療人類学的研究」（2018 年 7 月 30 日）

【事務系スタッフ】

特任リサーチフェロー 吉原 公美

主な担当業務:
ジェンダー研究所事務局統括
ジェンダー研究所特別招聘教授招聘事務および業務活動支援
ジェンダー研究所全体予算管理
各種報告書・報告データ作成
国際シンポジウム等運営 ほか

アカデミック・アシスタント 梅田 由紀子

主な担当業務:
文献収集・資料整理・附属図書館収蔵資料管理
IGS 史料電子化プロジェクト主任
AIT ワークショップ事務補佐
研究所事業事務
シンポジウム等運営事務・マニュアル作成
会計処理
書類作成・書類整理 ほか

アカデミック・アシスタント 滝 美香

主な担当業務:
研究所事業事務
会計処理
シンポジウム等運営事務
書類作成・書類整理 ほか

アカデミック・アシスタント 稲垣 明子

主な担当業務:
研究所事業事務
シンポジウム等運営事務
会計処理
書類作成・書類整理 ほか

アカデミック・アシスタント 和田 容子

主な担当業務:
年次事業報告書編集
『ジェンダー研究』編集員
成果発信原稿校閲
シンポジウム等運営補佐
研究所事業事務補佐 ほか

【資料】②研究プロジェクト一覧

（Ⅰ）政治・思想とジェンダー

IGS 研究プロジェクト

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】申琪榮（IGS 准教授）

【研究内容】

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本、韓国、台湾の民主主義の有り様と政治代表性の関係について、ジェンダー視点に立脚した国際共同研究により比較分析する。議員を対象としたアンケート調査、政党、議員、市民社会関係者へのインタビューや現地でのフィールドワークを実施するほか、定期的な国際シンポジウムや研究集会を開き、研究交流を促進する。東アジア地域において、政治代表性の男性優位性が続くメカニズムを明らかにし、政治制度におけるジェンダー公平性・多様性を実現させる政策も検討する。2018 年は成果をまとめつつ、国内外で成果発表に力を入れた。（本報告書 18 頁参照）

科学研究費基盤研究 B（研究課題番号 18H00817）

女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査

【研究代表者】三浦まり（上智大学教授）

【研究分担者】申琪榮（IGS 准教授）、Noble Gregory（東京大学教授）、
スティール若希（東京大学准教授）、MCELWAIN KENNETH（東京大学准教授）

【期間】2018～2020 年度

【研究内容】

女性の政治参画に対する障壁を国会議員および主要政党の都道府県支部への調査を通じて明らかにする。国際的な研究成果に基づいて、とりわけ「政党の候補者リクルートメントと公認決定過程」に焦点をあて、郵送調査と政党関係者にインタビュー調査を組み合わせ、政治参画に関する男女差、政党差、地方差はどのように見られるかを考察する。（本報告書 19 頁参照）

韓国研究財団一般共同研究（課題番号 NRF-2016926559）

議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析

【研究代表者】Ah-ran Hwang (釜山大学)

【研究分担者】申琪榮（IGS 准教授）、Jinock Lee（韓国ジェンダー政治研究所）、
Soo-hyun Kwon (韓国ジェンダー政治研究所)

【期間】2016～2018 年度

【研究内容】

2年間の研究助成による韓国調査の研究プロジェクトであり、最終年度の 2018 年には、主に成果のまとめと執筆に専念した。メンバーらによる韓国語、英語の成果発表がなされた。（本報告書 20 頁参照）

IGS 研究プロジェクト

リベラル・フェミニズムの再検討

【研究担当】板井広明（IGS 特任講師）

【研究内容】

本研究プロジェクトの目的は、ベンサムやウルストンクラフト、J.S.ミルといった第1波フェミニズムあるいはリベラル・フェミニズムの思想・運動を再検討することにある。リベラリズムの公私二元論を前提にしたリベラル・フェミニズムは乗り越えの対象でしかないという捉え方が一般的だが、リベラリズムにおいて、「公」に対する「私」の領域は単に個人的自由の空間であると放任されるのではなく、不正義が存在すれば介入が正当化される空間でもあった。本研究では、ベンサムの女性論に関する草稿研究と、J.S.ミルの The Subjection of Women, 1869 のテクスト読解と『女性の隷従』新訳の作業を進め、リベラル・フェミニズム再検討の機運を盛り上げることを狙う。（本報告書 21 頁参照）

IGS 研究プロジェクト

「東アジアの越境的女性運動」研究

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【研究内容】

今日の女性運動は、路上や広場、公共交通機関、大学キャンパス、議場、ジャーナリズム、サイバー空間など、さまざまな場で実践され、課題解決に向けた国際的連帯とアクションを生み出している。本研究は東アジアにおけるそのような越境的女性運動の展開について考察するものである。具体的には（1）ILO「家事労働者のためのディーセント・ワークに関する条約」（第 189 号条約）に関連する労働運動、（2）反軍事化をめぐる女性たちの運動、（3）中国の女権主義者たちのトランスローカル/トランスナショナルな運動に目を向ける。（本報告書 22 頁参照）

（Ⅱ）生殖・身体とジェンダー

IGS 研究プロジェクト

生殖医療とジェンダー

【研究担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究内容】

生殖医療の進歩はめざましく、第三者の精子や卵子、代理出産を利用した生殖医療技術の是非について、社会や専門家集団の間で検討が不十分なまま、一般社会での利用が広まっている。こうした状況は、産む性である女性たちに、より大きな影響を及ぼしている。本研究では、国内外を問わず、生殖医療の普及が女性たちに及ぼしている影響を明らかにする。（本報告書 24 頁参照）

IGS 研究プロジェクト

人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究

【研究担当】 仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）、 Yoon Jiso（韓国女性政策研究院研究員）

【研究内容】

日本も韓国も少子化の進行が社会問題となっているが、両国では生殖補助技術が少子化対策に利用されるようになってきている。本研究では、両国の政府が少子化対策として策定した不妊治療をサポートするためのプログラムや政策に焦点を当て、この不妊治療支援政策の効果、および少子化社会での社会的圧力による患者たちのストレスをジェンダー視点から検証する。（本報告書 25 頁参照）

科学研究費基盤研究C（研究課題番号 18K00034）
諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究
【研究代表者】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）
【期間】2018～2020 年度
【研究内容】
日本の精子提供はこれまで匿名で実施されてきた。近年、卵子提供にも注目が集まる中、ドナーの匿名性の是非について議論される機会が増えると予測される。本研究は国内での議論に向けて、出生者の出自を知る権利を法で保障する国について、法制定までにどのような議論があったか、および法施行後の状況明らかにするものである。（本報告書 26 頁参照）

公益財団法人トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム（B）個人研究助成
生殖補助技術で形成される家族についての研究
【研究担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）
【期間】2018～2019 年度
【研究内容】
近年、日本でも、生殖補助医療がますます一般化し、技術の需要も技術での出生児数も年々増加している。本研究では特に、第三者が介入する生殖技術で形成された家族について、国内外の家族へのインタビューを通して、家族の成り立ちを子どもたちとどのように共有し、家族関係を構築しているのかを探る。（本報告書 27 頁参照）

科学研究費基盤研究C（研究課題番号 16K12111）
AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究
【研究代表者】清水清美（城西国際大学教授）
【研究分担者】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）
【期間】2016～2018 年度
【研究内容】
日本では提供精子による人工授精が 60 年以上も実施され、精子提供者は匿名を原則としてきた。しかし諸外国では、子の福祉を考慮し、ドナーの匿名性を廃止する動きが広がっている。本研究は精子提供の利用や精子ドナーになることを検討している人が、出生者の出自を知る権利の保障の重要性を理解できるような情報を提供する資料の作成を最終目的とする。（本報告書 28 頁参照）

（Ⅲ）経済・移動とジェンダー

IGS 研究プロジェクト
資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々
【研究担当】足立眞理子（IGS 客員研究員）
【メンバー】大橋史恵（IGS 准教授）、板井広明（IGS 特任講師）
【研究内容】
本プロジェクト「資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々」は、グローバル金融危機以降の資本の中枢機能の変化を分析する。サスキア・サッセンの「放逐 expulsions」概念に着目して、従来の身体の断片化や排除／包摂の概念では把握不能な「放逐」の「常態化」をジェンダー分析の視点から行う。（本報告書 30 頁参照）

科学研究費基盤研究 B（研究課題番号 17H02247）

新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー：インド・フィリピン・中国の国際比較

【研究代表者】堀芳枝（獨協大学教授）

【研究分担者】大橋史恵（IGS 准教授）、足立眞理子（IGS 客員研究員）、長田華子（茨城大学准教授）、落合絵美（岐阜大学特任助教）

【期間】2017～2019 年度

【研究内容】

本研究は 2000 年代に入ってフィリピン、インド、中国でサービス部門の国際分業として展開し始めているビジネス・プロセス・アウトソーシング（BPO）の国際資本移転の動向と女性の労働、社会変容についての国際比較をおこなう。最終的には新興アジアのサービス部門の国際分業論の構築をめざす。（本報告書 31 頁参照）

IGS 研究プロジェクト

日比間の在留資格「興行」をめぐる言説編成の解明：入国管理のジェンダー分析を目指して

【研究担当】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究内容】

本研究は在留資格「興行」の制度化と規制を取り巻く日本とフィリピンの複数のアクターの言説に注目し、それらが移住女性のセクシュアリティをいかに規定しながら、女性たちの来日・就労の有様を形成してきたのかを明らかにするものである。このような考察を通じて、入国管理のジェンダー分析の理論構築を目指す。（本報告書 32 頁参照）

科学研究費基盤研究 B（研究課題番号 17H02600）

日比間の人の移動における支援組織の役割：移住女性と JFC の経験に着目して

【研究代表者】小ケ谷千穂（フェリス女学院大学教授）

【研究分担者】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）、原めぐみ（和歌山工業高等専門学校助教）

【期間】2017～2019 年度

【研究内容】

過去 20 年以上にわたって、日比間の人の移動を大きく特徴づけてきた、在留資格「興行」での女性エンターティナーの流入と、その帰結としての日比国際児（Japanese Filipino Children：JFC）の誕生・成長、そして日本への新たな流入がみられる。本研究はこの一連の現象が日比双方の社会において「社会問題」視されてきた過程の中で、日比双方における支援組織がアクターとして果たしてきた役割について、複合的な視点から明らかにすることを目的とする。（本報告書 33 頁参照）

国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））（研究課題番号 18KK0056）

グローバル性労働と人身取引の狭間にあるもの：聞き取りとネットワーク分析から

【研究代表者】青山薫（神戸大学教授）

【研究分担者】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）、熊田陽子（首都大学東京客員研究員）、中村文子（山形大学准教授）

【期間】2018～2022 年度

【研究内容】

本研究は、グローバル化がもたらした国境を越える性取引とは何かを、当事者の経験を通して、また、当事者と仲介者の接触を軸としたネットワークを通して明らかにすることをめざす。そのために本研究は、1）性取引に携

り「脱法/不法就労者」とされる人々および人身取引対策等によって「被害者」とされる人々へのライフストーリー聞き取り調査、2）当事者と性風俗産業をつなぐ仲介者あるいは人身取引トラフィッカーの関係を中心とするネットワーク分析を行う。（本報告書 34 頁参照）

科学研究費基盤研究 C（研究課題番号 17K04196）
人身売買／取引をめぐる市民活動の変遷：ネットワーク再構築に向けて
【研究代表者】佐々木綾子（千葉大学講師）
【研究分担者】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）、島崎裕子（早稲田大学准教授）
【期間】2017～2019 年度
【研究内容】
本研究は、「人身売買/取引」という現象が日本の市民活動にもたらした意義とその変遷を、同問題解決のための市民運動を担ってきた人々に焦点を当てて明らかにする。「人身売買/取引」をめぐる市民活動の求心力はどこにあり、それがどのように変遷したのかを考察することで、「人身売買/取引」概念を再考し、それに取り組むことのできる市民活動ネットワークを再構築することを研究の副次的目標とする。（本報告書 35 頁参照）

科学研究費基盤研究 C（研究課題番号 17K02067）
現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容
【研究代表者】平野恵子（IGS 研究協力員）
【期間】2017～2020 年度
【研究内容】
本研究は、インドネシアにおける「移住・家事労働者」の変容を、移民政策および国内家事労働者の派遣形態の変化から検討する。今年度は、特にジャカルタ首都圏における新中間層台頭を受けた居住形態の変化と、それに伴う家事労働者の派遣形態の変化の現状を把握し、従来の住み込み型との権利保障の差異を考察する。（本報告書 36 頁参照）

科学研究費基盤研究 C（研究課題番号 17K02051）
インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合
【研究代表者】中谷潤子（大阪産業大学准教授）
【研究分担者】平野恵子（IGS 研究協力員）、北村由美（京都大学准教授）
【期間】2017～2019 年度
【研究内容】
本研究は、インドネシア人移住労働者の再統合について、帰還後のライフステージ構築の過程を、本人や家族、コミュニティメンバーへの聞き取り調査をもとに明らかにする。分担者（平野）は特に、ジャカルタ首都圏における家事労働者組合で、移住家事労働を経験する組合員に帰還後の職業選択につき聞き取りをおこない上記課題を明らかにする。（本報告書 37 頁参照）

外国人特別招聘教授による研究プロジェクト

Maiko: Imagining Geisha Girlhood in Japan

【研究担当】ジャン・バーズレイ（Jan Bardsley、米・ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）

【研究内容】

平成時代の日本における「舞妓らしさ」の研究。平成時代の舞妓イメージは、かつての人身売買や搾取という暗い影を拭い去り、「カワイイ」京都のマスコットキャラクターとなっている。「舞妓らしさ」は京都の若い女性の理想像として語られ、舞妓をめざす少女たちはその理想像を体現することが期待される。その一方で、京都の観光局や、花街、漫画作家たちは、それぞれに異なる「舞妓らしさ」像を提供している。本研究は、商品デザインや、漫画作品、ライトノベルなどに描かれる「舞妓らしさ」を読み解き、現代の舞妓に期待されているジェンダー役割について分析する。

Democracy's Poster Girls: Beauty Queens and Fashion Models in Cold War Japan

【研究担当】ジャン・バーズレイ（Jan Bardsley、米・ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）

【研究内容】

冷戦初期の日本において盛んに開催された、ファッションショー、ビューティーコンテスト、デザインコンクールなどは、国際的交流を推進する文化活動であると同時に、女性の解放や民主主義、自由といった、戦後の社会改革の政治理念を象徴するイベントでもあった。本研究は、米国の占領下の日本で、ファッションが西側イデオロギーの浸透に果たした役割について分析する。

議会文化のジェンダー化についての国際比較

【研究担当】デルフィーヌ・ガルディ（Delphine Gardey、スイス・ジュネーブ大学教授）

【研究内容】

儀礼、空間、建築、象徴などの議会文化と、ジェンダーをめぐる議会環境が女性の存在にどう影響しているかについて、フランスとイギリスでの研究結果を日本の状況と比較する。議会のジェンダー化をもたらす文化的要素は、大きく二つの種類に分類できる。ひとつは、儀式やしきたり、空間や建築や議会秩序の記号的側面などの様式であり、もうひとつは、誰がそこに存在することを許されているかという「雰囲気」である。それぞれの国における議会政治の歴史とそこで構築されてきた議会文化を分析し、なぜ、男女平等の普通選挙権を得てから数十年が経過した今なお、女性たちはその場に参加するというだけのことに困難を感じなければいけないのかを考察する。

【資料】③協力研究者一覧

氏名・所属	協力事業*	参照
【海外】		
ディヤ・アブド （Diya Abdo） ギルフォード大学・米	（シ）アラブ世界の女性と逸脱	45 頁
シェリー・アデリナ （Shelly Adelina） インドネシア大学・インドネシア	（連）海外研究交流	101 頁
ジャン・バーズレイ （Jan Bardsley） ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米	特別招聘教授	89 頁
	（シ）アラブ世界の女性と逸脱	45 頁
	（セ）ミレニアル舞妓さん	71 頁
アンネ・ボルグ （Anne BORG） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（シ）ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像	54 頁
ジェニファー・ブロンラ （Jennifer Branlat） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（セ）ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターとの研究会	84 頁
	（国）Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity（NJ_BREGED）	103 頁
アン・ブルノン=エルンスト （Anne Brunon-Ernst） パリ第2パンテオン・アサス大学・仏	（連）海外研究交流	99 頁
チョ・ソンナム （Sung-Nam Cho） 梨花女子大学校・韓	（シ）ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像	54 頁
キンバリー・カウェル-メイヤーズ （Kimberly Cowell-Meyers） アメリカ大学・米	（連）海外研究交流	99 頁
	（国）*Politics & Gender* 共同編集	103 頁
メリッサ・デックマン （Melissa Deckman） ワシントン大学・米	（連）海外研究交流	99 頁
	（連）日米女性政治学者シンポジウム（JAWS）	106 頁
デボラ・デンプシー （Deborah Dempsey） スウィンバーン工科大学・オーストラリア	（連）海外研究交流	98 頁
キム・アイン・ズオン （Kim Anh Duong） ベトナム女性学院・ベトナム	（シ）ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像	54 頁
エリザベス・エヴァンス （Elizabeth Evans） ロンドン大学・英	（連）海外研究交流	99 頁
	（国）*Politics & Gender* 共同編集	103 頁
ジーン・エンシーナス・フランコ （Jean Encinas Franco） フィリピン大学ディリマン校・フィリピン	（連）海外研究交流	98 頁
デルフィーヌ・ガルディ （Delphine Gardey） ジュネーブ大学・スイス	特別招聘教授	92 頁
	（シ）議員になれるのは誰なのか？	48 頁
	（セ）主体、社会運動、民主主義	69 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
ハー・ジョンオク （Jung-Ok Ha） 大韓民国近代歴史博物館・韓	（連）海外研究交流	97 頁
カリン・ハマーバーグ （Karin Hammarberg） モナシュ大学・オーストラリア	（連）海外研究交流	98 頁
リンダ・ハスヌマ （Linda Hasunuma） ブリッジポード大学・米	（セ）地政学、安全保障、女性の身体	65 頁
	（連）海外研究交流	99 頁
アニス・ヒダヤッ （Anis Hidayah） 移民研究センター・インドネシア	（連）海外研究交流	99 頁
デニス・M・ホーン （Denise M. Horn） シモンズ大学・米	（セ）地政学、安全保障、女性の身体	65 頁
	（連）海外研究交流	99 頁
ファン・チャンリン （Chang-Ling Huang） 国立台湾大学・台湾	（連）海外研究交流	97 頁
	（国）東アジアにおけるジェンダーと政治	102 頁
ファン・アラン （Ah-ran Hwang） 釜山大学・韓	（研）（国）議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析	20 頁 102 頁
	（国）東アジアにおけるジェンダーと政治	102 頁
	（連）海外研究交流	97 頁
スリスティヨワティ・イリアント （Sulistyowati Irianto） インドネシア大学・インドネシア	（連）海外研究交流	101 頁
キム・ヘスク （Heisook Kim） 梨花女子大学校・韓	（シ）ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像	54 頁
日下部京子 （Kyoko Kusakabe） アジア工科大学院大学・タイ	（連）AIT ワークショップ	107 頁
クォン・スヒョン （Soo-hyun Kwon） 韓国ジェンダー政治研究所・韓	（研）（国）議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析	20 頁 102 頁
	（国）東アジアにおけるジェンダーと政治	102 頁
	（連）海外研究交流	97 頁
イ・ジンオク （Jinock Lee） 韓国ジェンダー政治研究所・韓	（研）（国）議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析	20 頁 102 頁
	（国）東アジアにおけるジェンダーと政治	102 頁
	（連）海外研究交流	97 頁
エレオノール・レピナール （Eléonore Lépinard） ローザンヌ大学・スイス	（シ）議員になれるのは誰なのか？	48 頁
アニンディター・マジャムダー （Anindita Majumdar） インド工科大学・インド	（連）海外研究交流	98 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
メアリー・M・マッカーシー （Mary M McCarthy） ドライク大学・米	（セ）地政学、安全保障、女性の身体	65 頁
	（連）海外研究交流	99 頁
クリスティン・オイガルドシリア （Kristine Øygardslia） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（セ）ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターとの研究会	84 頁
	（国）Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity（NJ_BREGED）	103 頁
サスキア・サッセン （Saskia Sassen） コロンビア大学・米	（セ）フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション	79 頁
ソン・イェラン （Ye-Rang Seong） 梨花女子大学校・韓	（シ）ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像	54 頁
カレン・アン・シャイア （Karen Ann Shire） デュースブルグ・エッセン大学・独	（編）『ジェンダー研究』編集委員	125 頁
ミア・シスチャワティ （Mia Siscawati） インドネシア大学・インドネシア	（連）海外研究交流	101 頁
アニ・ウィダヤニ・スチプト （Ani Widyani Soetjipto） インドネシア大学・インドネシア	（連）海外研究交流	101 頁
ワヒユ・スシロ （Wahyu Susilo） 移民研究センター・インドネシア	（連）海外研究交流	99 頁
カニス・スヴィアニタ （Khanis Suvianita） スラバヤ大学・インドネシア	（国）インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合	103 頁
	（連）海外研究交流	98 頁
ウー・チアリン （Chia-Ling Wu） 国立台湾大学・台湾	（連）海外研究交流	97 頁
ヤン・ワンイン （Wan-Ying Yang） 台湾国立政治大学・台湾	（連）海外研究交流	97 頁
	（国）東アジアにおけるジェンダーと政治	102 頁
ナディア・ヤクーブ （Nadia Yaqub） ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米	（シ）アラブ世界の女性と逸脱	45 頁
ユン・ジソ （Jiso Yoon） 韓国女性政策研究院・韓	（研）人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究	25 頁
	（連）海外研究交流	98 頁
【国内】		
青山薫 (Kaoru Aoyama) 神戸大学	（研）グローバル性労働と人身取引の狭間にあるもの	34 頁
井上雅人 (Masahito Inoue) 武庫川女子大学	（セ）近代日本のファッション文化を再考する	59 頁
梅垣千尋 (Chihiro Umegaki) 青山学院女子短期大学	（セ）ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考	61 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
小ケ谷千穂 (Chiho Ogaya) フェリス女学院大学	(研)日比間の人の移動における支援組織の役割	33 頁
小沢佳史 (Yoshifumi Ozawa) 九州産業大学	(セ)ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考	61 頁
落合絵美 (Emi Ochiai) 岐阜大学	(研)新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー	31 頁
小浜正子 (Masako Obama) 日本大学	(編)『ジェンダー研究』編集委員	125 頁
金井郁 (Kaoru Kanai) 埼玉大学	(編)『ジェンダー研究』編集委員	125 頁
北村由美 (Yumi Kitamura) 京都大学	(研)(国)インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合	37 頁 103 頁
熊田陽子 (Yoko Kumada) 首都大学東京	(研)グローバル性労働と人身取引の狭間にあるもの	34 頁
倉橋耕平 (Kohei Kurahashi) 立命館大学	(セ)合評会:倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー:90 年代保守言説のメディア文化』	57 頁
小門穂 (Minori Kokado) 大阪大学	(セ)フランスにおける LGBT と生殖医療、および性別の表記変更	67 頁
後藤浩子 (Hiroko Goto) 法政大学	(セ)ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考	61 頁
佐々木綾子 (Ayako Sasaki) 千葉大学	(研)人身売買／取引をめぐる市民活動の変遷	35 頁
島崎裕子 (Yuko Shimazaki) 早稲田大学	(研)人身売買／取引をめぐる市民活動の変遷	35 頁
清水清美 (Kiyomi Shimizu) 城西国際大学	(研)AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究	28 頁
スティール若希 (Jackie F. Steele) 東京大学	(研)女性の政治参画の障壁	19 頁
	(国)東アジアにおけるジェンダーと政治	102 頁
	(連)政治代表におけるジェンダーと多様性研究会(GDRep)	101 頁
徐阿貴(ソ アキ) (Akwi Seo) 福岡女子大学	(セ)地政学、安全保障、女性の身体	65 頁
嶽本新奈 (Niina Takemoto) 日本学術振興会特別研究員 PD ／明治学院大学	(セ)近代日本の女性の移動と再生産	75 頁
鶴田幸恵 (Sachie Tsuruta) 千葉大学	(セ)性同一性障害とトランスジェンダーは「水と油」か	77 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
富永京子 (Kyoko Tominaga) 立命館大学	(セ)合評会:倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー:90 年代保守言説のメディア文化』	57 頁
中谷潤子 (Junko Nakatani) 大阪産業大学	(研)(国)インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合	37 頁 103 頁
中村文子 (Junko Nakatani) 山形大学	(研)グローバル性労働と人身取引の狭間にあるもの	34 頁
長田華子 (Hanako Nagata) 茨城大学	(研)新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー	31 頁
Noble Gregory(ノーブル・グレゴリー) (Gregory Noble) 東京大学	(研)女性の政治参画の障壁	19 頁
原めぐみ (Megumi Hara) 和歌山工業高等専門学校	(研)日比間の人の移動における支援組織の役割	33 頁
土方直史 (Naobumi Hijikata) 中央大学	(セ)ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考	61 頁
日比野由利 (Yuri Hibino) 金沢大学	(セ)代理出産をめぐる世界の現状	63 頁
舩木惠子 (Keiko Funaki) 武蔵大学	(セ)ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考	61 頁
堀芳枝 (Yoshie Hori) 獨協大学	(研)新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー	31 頁
	(セ)フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション	79 頁
MCELWAIN KENNETH(ケネス・マッケルウェイン) (Kenneth McElwain) 東京大学	(研)女性の政治参画の障壁	19 頁
三浦まり (Mari Miura) 上智大学	(研)女性の政治参画の障壁	19 頁
	(国)東アジアにおけるジェンダーと政治	102 頁
	(連)日米女性政治学者シンポジウム(JAWS)	106 頁
	(連)政治代表におけるジェンダーと多様性研究会(GDRep)	101 頁
	(シ)議員になれるのは誰なのか?	48 頁
	(編)『ジェンダー研究』編集委員	125 頁
村上彩佳 (Ayaka Murakami) 日本学術振興会特別研究員 PD /上智大学	(シ)議員になれるのは誰なのか?	48 頁
森村敏己 (Toshimi Morimura) 一橋大学	(セ)フランス啓蒙の女性論	73 頁
山尾忠弘 (Tadahiro Yamao) 日本学術振興会特別研究員 DC /慶應義塾大学(院)	(セ)ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考	61 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
【学内】		
室伏きみ子 (Kimiko Murofushi) 学長	(シ)ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像	54 頁
小林誠 (Makoto Kobayashi) グローバルリーダーシップ研究所	(シ)ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像	54 頁
戸谷陽子 (Yoko Totani) 基幹研究院人文科学系	(シ)アラブ世界の女性と逸脱	45 頁
天野知香 (Chika Amano) 基幹研究院文化科学系	(編)『ジェンダー研究』編集委員	125 頁
水野勲 (Chika Amano) 基幹研究院人間科学系	(編)『ジェンダー研究』編集委員	125 頁
森義仁 (Yoshihito Mori) 基幹研究院自然・応用科学系	(編)『ジェンダー研究』編集委員	125 頁
荒木美奈子 (Minako Araki) 基幹研究院人間科学系	(編)『ジェンダー研究』編集委員	125 頁
石丸径一郎 (Keiichiro Ishimaru) 基幹研究院人間科学系	(編)『ジェンダー研究』編集委員	125 頁
倉光ミナ子 (Minako Kuramitsu) 基幹研究院人間科学系	(編)『ジェンダー研究』編集委員	125 頁
佐野潤子 (Junko Sano) グローバルリーダーシップ研究所	(国)Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity(NJ_BREGED)	103 頁
松田デレク (Derek Matsuda) 国際教育センター	(国)Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity(NJ_BREGED)	103 頁
大木直子 (Naoko Oki) グローバルリーダーシップ研究所	(シ)ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像	54 頁
	(シ)女性政治リーダーはいかにして「育つ」か？	51 頁
本山央子 (Hisako Motoyama) お茶の水女子大学(院)	(セ)合評会:倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー:90 年代保守言説のメディア文化』	57 頁
	(セ)フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション	79 頁
	(セ)地政学、安全保障、女性の身体	65 頁

*(研)研究プロジェクト、(国)国際共同研究プロジェクト、(連)国際ネットワーク
(シ)シンポジウム、(セ)セミナー・研究会、(編)『ジェンダー研究』編集委員

【資料】④国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催　国際シンポジウム		
10/14	国際シンポジウム〔特別招聘教授プロジェクト〕 アラブ世界の女性と逸脱：グッドとバッドの境界で Arab Women and Transgression : At the Boundary of Good and Bad 【コーディネーター／司会】 ジャン・バーズレイ（IGS 特別招聘教授／ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授） 【趣旨説明】ジャン・バーズレイ 【研究報告】ナディア・ヤクーブ（ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授） ディヤ・アブド（ギルフォード大学准教授） 【コメンテーター】戸谷陽子（お茶の水女子大学教授） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日英（同時通訳） 【参加者数】59 名	45 頁
1/21	国際シンポジウム〔特別招聘教授プロジェクト〕 議員になれるのは誰なのか？：フランスの政治と議会史からみる立法府のジェンダー化 Who can be a Representative? Engendering Legislative Bodies: Lessons from the French Historical and Political Context 【コーディネーター】デルフィーヌ・ガルディ（IGS 特別招聘教授／ジュネーブ大学教授） 【司会】申琪榮（IGS 准教授） 【研究報告】エレオノール・レピナール（ローザンヌ大学准教授） デルフィーヌ・ガルディ 【コメンテーター】三浦まり（上智大学教授） 村上彩佳（日本学術振興会特別研究員 PD／上智大学） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日英（同時通訳） 【参加者数】49 名	48 頁
グローバル女性リーダー育成研究機構主催　国際シンポジウム		
6/30	国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同） 女性政治リーダーはいかにして「育つ」か？ Promoting Future Women Leaders in Politics 【基調講演者】野田聖子（総務大臣、女性活躍担当大臣、内閣府特命担当大臣、衆議院議員） 陳善美（韓国国会議員、弁護士） 【パネリスト】円より子（元参議院議員　女性のための政治スクール校長） ヨハンナ・ウッカマン（独・社会民主党常任理事、元党青年局全国代表） 陳善美（韓国国会議員、弁護士） 【パネル司会】申琪榮（IGS 准教授） 【総合司会】大木直子（グローバルリーダーシップ研究所特任講師） 【主催】グローバル女性リーダー育成研究機構　グローバルリーダーシップ研究所　ジェンダー研究所 【言語】日英韓（同時通訳） 【参加者数】451 名	51 頁

開催日	イベント詳細	参照
グローバル女性リーダー育成研究機構主催　国際シンポジウム		
1/12	国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同） ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像 Women's Global Leadership from Gender Perspectives 【学長講演】「ジェンダー平等と女性のリーダーシップ」 キム　ヘスク（梨花女子大学校総長） アンネ・ボルグ（ノルウェー科学技術大学副学長） 室伏きみ子（お茶の水女子大学長） 【パネルディスカッション】「グローバル女性リーダー：多様性とネットワーク」 ソン　イェラン（梨花女子大学校リーダーシップ開発院研究員） キム・アイン・ズオン（ベトナム女性学院副学長） 石井クンツ昌子（お茶の水女子大教授・ジェンダー研究所長） 小林誠（お茶の水女子大教授・グローバルリーダーシップ研究所長） チョ　ソンナム（梨花女子大学教授・リーダーシップ開発院長） 【パネル司会】大木直子（グローバルリーダーシップ研究所特任講師） 【総合司会】小林誠（グローバルリーダーシップ研究所長） 【主催】グローバル女性リーダー育成研究機構　グローバルリーダーシップ研究所　ジェンダー研究所 【言語】日英（同時通訳） 【参加者数】170 名	54 頁
IGS 主催　IGS セミナー		
6/5	合評会：倉橋　耕平『歴史修正主義とサブカルチャー：90 年代保守言説のメディア文化』 〔東アジアにおけるジェンダーと政治研究プロジェクト①〕 【司会】申琪榮（IGS 准教授）、板井広明（IGS 特任講師） 【報告】倉橋耕平（立命館大学非常勤講師ほか） 【コメンテーター】富永京子（立命館大学准教授）、本山央子（お茶の水女子大学（院）） 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】55 名	57 頁
6/26	近代日本のファッション文化を再考する：女性・近代化・対抗文化 〔東アジアにおけるジェンダーと政治研究プロジェクト②〕 【司会】板井広明（IGS 特任講師） 【報告】井上雅人（武庫川女子大学准教授） 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】62 名	59 頁
10/1	ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考 【コーディネーター／司会】板井広明（IGS 特任講師） 【報告】梅垣千尋（青山学院女子短期大学教授）、板井広明（IGS）、土方直史（中央大学・名誉教授） 山尾忠弘（日本学術振興会特別研究員 DC/慶應義塾大学・院）、舩木惠子（武蔵大学研究員） 【討論者】後藤浩子（法政大学教授） 小沢佳史（九州産業大学講師） 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】47 名	61 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS セミナー		
10/29	生殖領域シリーズ 1 代理出産をめぐる世界の現状：商業的代理出産から利他的代理出産へ 〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕 【講師】日比野由利（金沢大学助教） 【ファシリテーター】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー） 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】33 名	63 頁
11/9	地政学、安全保障、女性の身体 〔東アジアにおけるジェンダーと政治研究プロジェクト③〕 【司会】申琪榮（IGS 准教授） 【報告者】デニス・M・ホーン（シモンズ大学准教授）、リンダ・ハスヌマ（ブリッジポート大学助教授）、メアリー・M・マッカーシー（ドライク大学准教授） 【討論者】平野恵子（IGS 研究協力員）、本山央子（お茶の水女子大学・大学院） 徐阿貴（福岡女子大学准教授） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】17 名	65 頁
11/16	生殖領域シリーズ 2 フランスにおける LGBT と生殖医療、および性別の表記変更 〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕 【報告者】小門穂（大阪大学大学院助教） 【ファシリテーター】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー） 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】39 名	67 頁
12/13	〔特別招聘教授プロジェクト〕 Bodies, Collective Action and Democracy：Engaging with Judith Butler’s Work （主体、社会運動、民主主義：ジュディス・バトラーによる理論構築の検討） 【講師】デルフィーヌ・ガルディ（IGS 特別招聘教授／ジュネーブ大学教授） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】30 名	69 頁
2/8	〔特別招聘教授プロジェクト〕 Millennial Maiko：The Geisha Apprentice in Japanese Popular Culture （ミレニアル舞妓さん：日本のポピュラーカルチャーにおける舞妓像） 【報告者】ジャン・バーズレイ（IGS 特別招聘教授／ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】20 名	71 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS セミナー		
2/15	フランス啓蒙の女性論 【コーディネーター／司会】板井広明（IGS 特任講師） 【講師】森村敏己（一橋大学教授） 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】31 名	73 頁
2/21	近代日本の女性の移動と再生産：「からゆきさん」の生涯をめぐって 【司会】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー） 【報告】嶽本新奈（日本学術振興会特別研究員 PD／明治学院大学） 【討論者】大橋史恵（IGS 准教授） 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】35 名	75 頁
3/7	性同一性障害とトランスジェンダーは「水と油」か 【コーディネーター／司会】板井広明（IGS 特任講師） 【講師】鶴田幸恵（千葉大学教授） 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】66 名	77 頁
IGS 共催 IGS セミナー		
10/15	Globalization and Dislocation from Feminist Perspective Dialogues with Saskia Sassen （フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション：サスキア・サッセンとの対話） 【司会】大橋史恵（IGS 准教授） 【講演】サスキア・サッセン（コロンビア大学教授） 【ワークショップ　ディスカッサント】堀芳枝（獨協大学教授）、大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー） 本山央子（お茶の水女子大学大学院） 【共催】ジェンダー研究所、科学研究費プロジェクト「新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー：インド・フィリピン・中国の国際比較」（基盤研究 B　代表：獨協大学、堀芳枝） 【協賛】日本フェミニスト経済学会（JAFFE） 【後援】経済理論学会問題別分科会「ジェンダー」 【協力】FFU（フェミニスト自由大★学） 【言語】英語 【参加者数】25 名	79 頁

開催日	イベント詳細	参照
主催 IGS 研究会		
7/30	IGS 研究協力員　研究報告会 【司会】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー） 【報告】平野恵子 「『技能化』と組織化：インドネシアにおける移住・家事労働者の権利保護」 マウラ・スティーブンス 「日本における生理に関する医療人類学的研究」 【参加者数】11 名	82 頁
11/27	ノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターとの研究会 【出席者】 Jennefer Branlat（ノルウェー科学技術大学学際的文化研究学部准教授）／Kristine Øygardslia（同　ポスドク研究員） 石井クンツ昌子（IGS 所長）／申琪榮（IGS 准教授）／大橋史恵（IGS 准教授）／板井広明（IGS 特任講師）／仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）／大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）／吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）／佐野潤子（グローバルリーダーシップ研究所（IGL）特任講師） 【オブザーバー参加】ジャン・バーズレイ（IGS 特別招聘教授）／小林誠（IGL 所長） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語	84 頁
協力シンポジウム		
2/2	育児期親子の IT とソーシャルメディア活用 日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較 【総合司会】加藤邦子（川口短期大学教授） 【基調講演】榊原洋一（お茶の水女子大学名誉教授、ベネッセ教育総合研究所常任顧問・チャイルド・リサーチ・ネット所長、日本こども学会会長、小児科医） 【パネリスト】李秀眞（弘前大学准教授） 根本宮美子（京都外国語大学教授） 高橋美恵子（大阪大学教授） 石井クンツ昌子（お茶の水女子大学教授／IGS 所長） 【パネルディスカッション司会】牧野カツコ（お茶の水女子大学名誉教授） 【主催】お茶の水女子大学 IT 科研研究会（石井クンツ昌子研究室） 【協力】ジェンダー研究所 【参加者数】103 名	85 頁

【資料】⑤2018 年度新規収蔵図書・資料

・2018 年度、外部からの寄贈により以下の書籍が新規収蔵された。［寄贈者名『書名』（著者名）］（敬称略）

アジア経済研究所『不妊治療の時代の中東―家族をつくる、家族を生きる―』（村上薫）／フェリス女学院 150 年史編纂委員会『学校日誌にみる学院と生徒たち 1924-1946』（フェリス女学院 150 年史編纂委員会（フェリス女学院 150 年史資料集；5））／一橋大学大学院社会学研究科『ジェンダー研究を継承する』（佐藤文香、伊藤るり）／熊田陽子『性風俗世界を生きる「おんなのこ」のエスノグラフィー』（熊田陽子）／関口裕子氏女性史論文集刊行会『日本古代女性史の研究』（関口裕子）／京都橘大学　女性歴史文化研究所『身体はだれのものか』（南直人、北山晴一、日比野英子、田端泰子）／山﨑眞紀子ほか『女性記者・竹中繁のつないだ近代中国と日本―一九ニ六～ニ七年の中国旅行日記を中心に―』（山﨑眞紀子、石井照子、須藤瑞代、藤井敦子、姚毅）／東京外国語大学出版会『インド　ジェンダー研究ハンドブック』（栗屋利江、井上貴子）

・2018 年度、寄贈、購入によりジェンダー研究所から以下の書籍が新規収蔵された。［『書名』（著者名）］

『ABSTRACT BODIES』（David J.Getsy）／『Bodies That Matter』（Judith Butler）／『CONTESTED CHILDHOOD』（Susan D. Holloway）／『Dancing Female』（Sharon E.Friedler & Susan B. Glazer ）／『Gender and Global Justice』（Jaggar）／『GENDER AND RISK-TAKING』（Julie A. Nelson）／『Gender,Work,and Economy』（Heidi Gottfried）／『Gendered Migrations and GlobalSocial Reproduction』（Eleonore Kofman,Parvati Raghuram ）／『Handbook of the Sociology of Gender』（Barbara J.Risman ほか）／『Hope in the Dark: Untold Histories, Wild Possibilities』（Rebecca Solnit）※原書、日本語訳本／『Is Critique Secular?: Blasphemy, Injury, and Free Speech』（Judith Butler）／『Japanese Religions on the Internet』（Erica Bafferi）／『Japanese Women in Science and Engineering』（Naonori Kodate and Kashiko Kodate）／『Media and New Religions in Japan』（Erica Bafferi）／『Men Explain Things to Me』（Rebecca Solnit）※原書、日本語訳本／『Rethinking Japanese Feminisms』（Julia C.Bullock,Ayako Kano,James Welker）／『See Red Women’s Workshop: Feminist Posters 1974-1990』（Prudence Stevenson、Susan Mackie）／『Senses of the Subject』（Judith Butler）／『The Impact of Gender Quotas』（Franceschet,Krook,Piscopo）／『The Power of Religion in the Public Sphere』（Judith Butler）／『The Reproductive Bargain』（Heidi Gottfried）／『Vulnerability in Resistance』（Judith Butler）／『Wanderlust: A History of Walking』※原書、日本語訳本（Rebecca Solnit）／『WESTERN　HIGHER EDUCATION IN ASIA AND THE MIDDLE EAST』（KEVIN GRAY,HASSAN BASHIR,STEPHEN KECK）／『Women and Family in Contemporary』（Susan D. Holloway）／『Women and Politics in Contemporary Japan』（Emmo Dalton）／『Women's』（Feminist/Gender Studies in the U.S./Estelle B. Freedman(公益財団法人東海小冊子;3)）／『13 歳、「私」をなくした私』（山本潤）／『Black Box』（伊藤詩織）／『LGBT と女子大学』（日本女子大学人間社会学部 LGBT 研究会編）／『アスピーガールの心と体を守る性のルール』（デビ・ブラウン著 ； 村山光子，吉野智子訳）／『「慰安婦」問題を／から考える』（歴史学研究会・日本史研究会編）『岡山の奇人変人』（蓬郷巌　編（岡山文庫;74））／『沖縄ジェンダー学 1 「伝統」へのアプローチ』（喜納育江編著）／『沖縄ジェンダー学 2 法・社会・身体の制度』（喜納育江・矢野恵美編著）／『沖縄ジェンダー学 3 交差するアイデンティティ 』（喜納育江編著）／『家族難民　生涯未婚率 25％社会の衝撃』（山田昌弘）／『海を渡る「慰安婦」問題』（山口智美・能川元一・ﾃｯｻ・ﾓｰﾘｽ-ｽｽﾞｷ・小川エミ編）／『京城のモダンガール』（徐智瑛）／『近代日本公娼制の政治過程―「新しい男」

をめぐる攻防　佐々城豊寿・岸田俊子・山川菊栄』(関口すみ子)／『最下層女子校生』(橘ジュン)／『私の中のわたしたち』(オルガ・R・トゥルヒー)／『首相官邸の前で』(小熊英二)／『ジュディス・バトラー　生と哲学を賭けた闘い』(藤高和輝)／『女子高生の裏社会』(仁藤夢乃)／『女性の暮らしと生活意識データ集』(三冬社　編集制作部)／『女性の暮らしと生活意識データ集 2018-2019』(三冬社　編集制作部)／『女性白書 2017』(日本婦人団体連合会編)／『少子化時代の「良妻賢母」』(S.D.ハロウェイ)／『人口減少社会の未来学』(内田樹　編著)／『性風俗世界を生きる「おんなのこ」のエスノグラフィー』(熊田陽子)／『政治学の批判的構想　ジェンダーからの接近』(衛藤幹子)／『生涯未婚時代』(永田夏来)／『IGS Project Series;17　生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会報告書』(お茶の水女子大学)／『第 20 回全国シェルターシンポジウム 2017 in　東京』(全国女性シェルターネット、第 20 回全国シェルターシンポジウム　2017 in　東京　実行委員会)／『只野真葛』(関民子)／『男女共同参画社会データ集』(三冬社　編集制作部)／『男女平等は進化したか　男女共同参画基本計画の策定、施策の監視から』(鹿嶋敬)／『知識経済をジェンダー化する　労働組織・規制・福祉国家』(大澤真理　編訳)／『超ソロ社会』(荒川和久)／『提供配偶子で形成された家族に関する研究　ニュージーランド調査報告書』(仙波由加里、清水清美)／『ドクトルたちの奮闘記』(石原あえか)／『なかったことにしたくない』(東小雪)／『日本の女性議員　どうすれば増えるのか』(三浦まり)／『バイオエシックス　その継承と発展』(丸山マサ美　編著)／『漂流女子』(中島かおり)／『文科省』(高校「妊活」教材の嘘/西山千恵子、柘植あづみ)／『北海道社会とジェンダー』(札幌女性問題研究会)／『未婚当然時代』(にらさわあきこ)／『未来の年表』(河合雅司)／『裸足で逃げる　沖縄の夜の街の少女たち』(上間陽子)／『ヨウチエン』(S.D.ハロウェイ)／『わたしを生きる知恵　80 歳のフェミニストカウンセラーからあなたへ』(河野貴代美)

【資料】⑥史料電子化プロジェクト：電子化イベント一覧

女性文化資料館（1975-1985）/女性文化研究センター（1986-1995）イベント一覧				
年度	活動区分	開催日	イベントタイトル	登壇者
1977	講演会	1977/9/22	湯浅年子先生講演会	湯浅年子
(S52)	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1978/1/14	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	
	研究会	1978/2/8	山川菊栄と女性解放思想(木下　研究会)	
	研究会	1978/3/6	社会学における家族	
	研究会	1978/3/22	山川菊栄研究	
1978	研究会	1978/6/6	女性史研究会　欧米の女性論	
(S53)	研究会	1978/7/27	女性史研究会　欧米の女性論	
1979	研究会	1979/5/24	女性の教育と女性問題	
(S54)	研究会	1979/10/4	アメリカ婦人労働の法的諸問題	
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1980/1/26	総合科目「婦人問題」に関するｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	
	研究会	1980/2/12	中山みきの思想と歩み―陽気づくめの世界をめざして 50 年―	吉原敬子
		1980/3/1	杉田和子、小島栄子、岩本のり子　於: 中村屋	
1980	研究会	1980/4/1	平安時代の相続制と女子相続権―『平安遺文』文書を中心として―	服藤早苗
(S55)	研究会	1980/4/23	〔マーガレット・ミードの女性研究Ⅰ〕	村松弘子ほか
	研究会	1980/5/29	〔マーガレット・ミードの女性研究Ⅱ〕	田中和子ほか
	研究会	1980/7/3	インドにおける女性の政治的役割	Chandra Mudaliar
	研究会	1980/10/18	〔コペンハーゲン婦人会議及び婦人差別撤廃条約について〕【婦人問題懇話会 講演会】	船橋邦子ほか
	研究会	1980/10/20	性役割とセクシズム	小林啓子
	研究会	1980/11/5	Feminist Literary Criticism からみた『砂の女』	Chigusa Kimura-Steven
	研究会	1980/12/25	目黒依子『女役割』について	田中和子ほか
	研究会	1981/2/12	アメリカの女性史	金子幸子ほか
	研究会	1981/3/27	フランス社会史の動向と女性史	小島智恵
1981	研究会	1981/5/27	人類学者のみた個人的アメリカ女性史	Frederica de Laguna
(S56)	研究会	1981/5/29	Role's of Women's College	Frederica de Laguna
	研究会	1981/6/12	『性の署名』について(1)	内藤和美ほか
	研究会	1981/7/4	『性の署名』について(2)	平川和子
	研究会	1981/7/12	高群逸枝の婚姻・家族形態研究の意義について	関口裕子
	研究会	1981/9/9	カナダの女性学について	Patricia Morley ほか
	研究会	1981/10/16	家族・親族理論研究動向	田中真砂子
	研究会	1981/11/25	兼業農家女性の就労形態の変容―長野県諏訪地方の場合―	久保桂子
	研究会	1981/12/15	オーストラリアと日本の婦人運動／ニュージーランドの女性の地位について	Romanovsky Ulrike ほか
	研究会	1982/1/27	千葉県における廃娼運動―国防婦人会との関連において―	船橋邦子
	研究会	1982/3/24	近現代日本の社会教育と婦人団体	木下　ユキエ
1982	研究会	1982/4/23	女子大学の存在意義を考える―アメリカ・フランス・インド等の各国を見て―	広中和歌子

(S57)	研究会	1982/5/22	女性学研究会　井上輝子、目黒依子	
	研究会	1982/6/4	近世における女性と家族	林玲子ほか
	研究会	1982/10/22	平安時代の養子制度について―日本家族の特質をテーマに―	William Mccullough ほか
	研究会	1982/11/24	バングラディシュの女性について	武藤敦子
	研究会	1982/12/13	Consort, mother, beloved, "Vamp"; the symbolic depiction of womanhood in Indian calendar art	Patricia Uberoi ほか
	研究会	1983/1/24	出産の社会史―家族の近代化に関連して―	落合恵美子
	研究会	1983/2/15	韓国の女性について	鄭金子ほか
	研究会	1983/3/22	『巫女の文化』について―古代女性史の見直しのために―	倉塚曄子ほか
1983	研究会	1983/5/30	ガブリエラ・ミストラルと『女性読本』について	田村さと子
(S58)	研究会	1983/6/30	Japanese-German Marriage in Japan: a fentative approach	Irene Hardach-Pinke
	研究会	1983/7/29	『性の深層』をめぐって―現代西ドイツの女性運動との関連で―	大沢三枝子
	研究会	1983/9/26	『妻と夫の社会史』について	山本郁子ほか
	研究会	1983/11/1	女性の側からジェンダーを考える	若井文恵ほか
	研究会	1983/11/21	Intellectual Differnces between Woman and Man "Inherited or Acquired?"	Virginia Mann ほか
	研究会	1983/12/15	機械女工たちの近代	古庄正
	研究会	1984/2/22	『婦女新聞』の出発	石崎昇子ほか
	研究会	1983/3/13	フィリップ・アリエス研究―子ども・教育・女性―	波多野完治ほか
1984	研究会	1984/4/24	日本の離婚調停に関する研究	Taimie Bryant
(S59)	研究会	1984/5/15	『更級日記』作者の宗教的コンプレックス	高木きよ子
	講演会	1984/5/31	お茶の水女子大学百年史刊行記念講演会	林太郎ほか
	研究会	1984/6/20	キリスト教文化と女性	杉田弘子
	研究会	1984/7/6	The Function of Libraries,Women' Centers,and "Women's Studies" in doing Feminist Research	Helen Wheeler ほか
	研究会	1984/10/23	『私生子』概念の発生と消長―明治期を中心とする法制・歴史と実際の扱い―	田中弘子
	研究会	1984/11/20	Woman and Nature	Susan Griffin ほか
	研究会	1984/12/11	中国女性史研究―小野和子『中国女性史』を読んで―	加藤直子
	研究会	1985/2/25	樋口一葉の文学―『十三夜』と『人形の家』の比較を中心に―	フランチスカ・フンチカ
	研究会	1985/3/14	近世関東農村における女性労働者の存在形態―年季・日雇奉公人の分析から―	青木道子
1985	研究会	1985/4/26	ユートピアと性	倉塚平
(S60)	研究会	1985/5/29	西欧近代の結婚観―キルケゴールをめぐって―	野村明代
	研究会	1985/6/12	清代において模範とされている女性について	Susan Mann
	研究会	1985/6/13	食事が子供の身体と心に与えるもの	
	研究会	1985/7/4	韓国女性の政治的、社会的地位	白京男
		1985/10/5	第三世界の女性たちと私たち―ナイロビ報告（日本婦人問題懇話会）	
	研究会	1985/10/28	『源氏物語』にみる婚姻と居住形態と相続―光源氏と紫の上と明石君をめぐる―視角―	木下ユキエ
	研究会	1985/11/15	主婦とテレビ	香取淳子
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1985/11/27	産むことを考える	加藤シヅエほか
	研究会	1985/12/18	イタリア女性解放思想の歴史と今日的な段階―19 世紀末から現在に至る主要な事項―	Argnani Fausta

	研究会	1986/1/16	スイスにおける女性史研究―論文集『女性』と『イティネラ』にみる女性史家の研究動向―	佐藤るみ子
	研究会	1986/3/3	「円地文子論―"自然な女"の周辺―」	宮内淳子
1986	研究会	1986/4/25	フランス現代女性思想の流れ―ボーヴォワール・クリスティヴァ・イリガライ	棚沢直子
(S61)	研究会	1986/6/24	日本文化における『悪女』	Valerie・L・Durham
	研究会	1986/10/3	航空史における女性の役割―ドイツ女性スポーツ史の視角から	Gertrud Pfister
	研究会	1986/11/20	韓国の家族について	徐炳淑
	研究会	1986/12/8	バングラディシュの女性―女性政策の視点から―	Jowshan Ara Rahman ほか
	研究会	1987/1/14	中東世界の女性―イスラームの原理と実像	黒田美代子
	研究会	1987/3/3	マレーシアの女性	Goh Beng Lan
1987	研究会	1987/4/23	公民の妻/青年団における女子活動の設立	渡辺洋子ほか
(S62)	研究会	1987/5/15	Impact of Economics & Technological Change on Women	Tamara・Hareven
	研究会	1987/6/24	円地文子の描いた女性像	アイリーン・マイカルス・アダチ
	研究会	1987/7/14	家計構造の長期的変容	田窪純子
	研究会	1987/8/25	舞踊と語り……祖母の語りとその姿	江川まゆみ
	研究会	1987/10/26	ラテン・アメリカの女性像	三田千代子
	研究会	1987/11/25	和泉式部と仏教	小野美智子
	研究会	1987/12/16	タイ社会における女性の役割	小野沢・ニッタヤー
	研究会	1988/2/10	日本における転勤の問題とデュアル・キャリア・ファミリーについて	青木由紀
	研究会	1988/3/10	新しい家庭科をめざして	西谷洋子
	研究会	1988/3/10	家庭科における消費者教育	小関禮子
1988	研究会	1988/4/11	Income Generation of Women in Rural Bangladesh	Kohinoor Begum
(S63)	研究会	1988/5/26	South Asian Women: Challenges & Prospects	Urmila Phadnis
	研究会	1988/6/22	Some Implications of Women's Status in China	Beverly Y. B. Hong
	研究会	1988/7/8	性役割意識に関連する韓国人の価値観	金炳端
	研究会	1988/9/7	こどもの虐待と放置―小児科の全国調査から―	内藤和美
	研究会	1988/11/25	フェミニスト研究の軌跡―Stanley & Wise の『フェミニズム社会科学に向かって』が提起するもの―	矢野和江
	研究会	1989/2/21	アジアにおける女性と仕事	Noeleen Heyzer
	研究会	1989/3/7	日本のフェミニストの意識と alternative な生活スタイル	ゴー・ベン＝ラン
1989	研究会	1989/4/5	男女平等教育の実践に向けて	Peggy McIntosh
(H1)	研究会	1989/4/14	Education of Scientist who Happen to Be Women	Emily L. Wic
	研究会	1989/6/1	鎌倉期の乳父について―その存在形態と乳母との関連	秋山貴代子
	研究会	1989/6/12	Modernisation en Iran et Le Changement Socio-cultural de Role de la Femme	Nasrin F. Hakami
	研究会	1989/7/17	Problems of Homeless Children in India	Rajani Paranjipe
	合評会	1989/9/11	原ひろ子著『ヘアー・インディアンとその世界』について	田中真砂子
	研究会	1989/10/4	スペイン内戦下の女性たち	秋山充子
	研究会	1989/11/17	Women and / in Media	Ann Simonton
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1989/12/13	お茶の水女子大学留学生懇談会	

	シンポジウム	1989/11/29,12/20,1990/3/19	特定研究「女性のライフコースの多様化と女子大学の役割」	Peggy McIntosh
1990 (H2)	シンポジウム	1990/4/23,24	『母性』をめぐる日独シンポジウム	舘かおるほか
	研究会	1990/5/18	Systematic Planning for Women's in Development and Activities	Barbara Knudson
	研究会	1990/6/14	マレー農村社会における性役割―東南アジアの伝統とイスラム規範のはざまにて	花見槙子
	研究会	1990/6/26	Women's Mothering and Working Roles in Japan and the United States	Brenda Bankart
	研究会	1990/9/25	中央ユーラシア遊牧民の歴史にみる女性像	宮脇淳子
	研究会	1990/10/23	福沢諭吉の女性論	杉原名穂子
	研究会	1990/11/22	日本近代女性の自伝を読む	Ronald P. Loftus
	研究会	1990/12/5	精神的母性	Elisabeth Gössmann
	研究会	1991/3/13	女性の自然科学研究者の進路決定要因の研究について	ビヴァリー・ゲッツイ
1991 (H3)	研究会	1991/5/29	大正時代の『令女会』の歌曲―女学生の歌唱と女学生向け創作歌曲の一考察	坂本麻実子
	研究会	1991/6/10	An Anthropological Study of Gender Science in Japan & U.S.	Sharon Traweek
	研究会	1991/6/18	To a Safer Place	Dane Raphael
	研究会	1991/10/4	Woman's Movement in Comparative Perspective	Ilse Lenz
	研究会	1991/10/9	Women of the Tlingit Society in Historical Perspective	Frederica de Laguna
	研究会	1991/10/31	Confusionism and Modern Chinese Women's Family Life	黄育馥
	研究会	1991/11/15	フェミニズムの方法としてのメモリーワーク	Frigga Haug ほか
	研究会	1991/11/19	クリスティヴァ『女の時間』を読む	棚沢直子
	研究会	1991/12/19	The Situation of the Swedish Women Today	Malin Ronnblom
	研究会	1992/1/30	自治体における女性学	粟国千恵子
	研究会	1992/2/12	中国の少数民族における女性	劉耀荃
	研究会	1992/2/20	アメリカ女性学の現段階. 女性学の理論家と県空者養成システム	三宅義子
	研究会	1992/3/13	『女性と労働』日独シンポジウム	
1992 (H4)	研究会	1992/4/15	Women's Studies in Canada	Naomi Black
	研究会	1992/4/20	Sexuality and Reproduction in Women's Utopian Dystopian Literature	Blaine Martin
	研究会	1992/6/19	湯浅年子博士資料的研究の歩み	松田久子
	研究会	1992/6/22	ジェーン・アダムスの思想と行動	米澤正雄
	研究会	1992/7/20	女性と開発をめぐる諸問題	村松安子
	研究会	1992/10/26	沖縄における女性の就労と性役割分業観	国吉和子
	講座	1992/11/21,28,12/5	次世代育成力を考える	原ひろ子ほか
	研究会	1993/1/28	南インド・ナガラッタールにおける親族・婚姻及び女性	西村祐子
1993 (H5)	研究会	1993/5/18	中国における職業分化に伴う女性の価値観と行為方式の変化について	沙蓮香
	研究会	1993/6/24	女性と表彰―"模範嫁"表彰の聞き取り調査をめぐってー	熊澤知子
	研究会	1993/7/16	ベルリンの老人ホームとケア付き集合住宅	大澤真理
	研究会	1993/9/22	女性の自己表現と文学―野上彌生子におけるフェミニズムと形式―	藤田和美
	研究会	1993/10/15	―政治学者のみたジェンダー研究―オリエンタリズムとの関連―	石田雄

	特定研究懇談会	1993/11/13	Women in Higher Education－A case of the University of California USA－	Dr.Maresi Nerad
	研究会	1993/11/14	変容する男性社会―労働、ジェンダーの日独比較	高島道枝ほか
	研究会	1993/12/3	Gender,Justice and Therapy: Can One Be a Feminist and Practise Family Therapy?	Jan McDowell
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1993/12/14,15	女性とメディア	
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1994/1/20	特定研究「ライフコースの多様化の時代における大学教育と女性」	
1994 (H6)	研究会/ｼﾝﾎﾟ	1994/4/7	エコロジーとフェミニズムを考える	Maria Mies ほか
	研究会	1994/6/1	オーストラリア女性史研究―女性史からフェミニスト史へ	Vera Mackie
	研究会	1994/7/27	いけ花と日本女性: 知の発達・地から・ジェンダー	飛田尚弥
	研究会	1994/8/29	Feminist Studies and Qualitative Empirical Methods: the Case of Sex Tourism and Traffic in Women	Ilse Lenz
	研究会	1994/9/27	Internationalization and Gender Relations: Theoretical Approaches	Ilse Lenz
	研究会	1994/10/31	家族法改正をめぐる文献とその論点	海妻径子
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1994/11/2	学内共同教育研究プロジェクト・大学における女性学及び女性学研究センターの役割について	
	研究会	1995/1/27	How to combine Parenthood and Work?―Policies on Gender in Sweden―	Rita Liljestrum
	研究会	1995/2/21	Current Trends in Women's Studies in India: Gender,Development and Empowerment/	Malavika Karlekar ほか
	研究会	1995/3/1	Women, Education, and Development in Bangladesh	Saleha Begum
1995 (H7)	研究会	1995/4/13	日本の女性国会議員―その形成と構造	大海篤子
	研究会	1995/5/12	姉さん女房の社会学	Ursula Richter
	研究会	1995/6/16	女性と政治	Elic Plutzer
	研究会	1995/7/3	遺伝子とジェンダー	Joan Hideko Fujimura
	研究会	1995/9/18	アメリカのフェミニスト法理論の現在	Frances Olsen
	研究会	1995/10/13	社会主義フェミニズムの観点から見る『雁』	玉枝 Prindle
	研究会	1995/11/24	エコロジーとフェミニズム	山本良一
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1995/12/2	湯浅年子メモリアルカンファレンスーエレーヌ・ランジュヴァン・ジョリオをむかえて	Hélène Langevin-Joliot
	研究会	1995/12/19	The place of women in Egyptian Society	Samia Khedr Saleh
	研究会	1996/2/14	ネパールにおける Management と WID の視点	福士恵理香
	研究会/ｼﾝﾎﾟ	1996/3/19	日本の学問研究とジェンダー	舘かおる

【資料】⑦国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則

（平成 27 年 3 月 25 日制定）

（趣旨）

第1条　この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構規則第4条第2項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所（以下「研究所」という。）に関し必要な事項を定める。

（目的）

第2条　研究所は、グローバル女性リーダー育成研究機構に附属する研究所として、ジェンダーに関する総合的、国際的な研究及び調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資することを目的とする。

（研究及び業務）

第3条　研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる研究及び業務を行う。

(1) ジェンダーに関する国際的研究及び調査
(2) ジェンダー研究に関する教育研修
(3) ジェンダー研究に関する文献・資料の収集および整理
(4) ジェンダー研究に関する情報の提供
(5) その他前条の目的を達成するために必要な業務

（組織）

第4条　研究所に、次に掲げる職員を置く。

(1) 研究所長
(2) 教員
(3) 特別招聘教授
(4) 研究員
(5) その他学長が必要と認めた職員

2　研究所に、次に掲げる職員を置くことができる。

(1) 特任教員
(2) 客員研究員
(3) 研究協力員

（研究所長）

第5条　研究所長は、基幹研究院人文科学系、人間科学系及び自然科学系の系会議構成員である教授のうちから学長が任命する。

2　研究所長は、研究所の業務を掌理する。

3　研究所長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

4　研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

（研究員）

第6条　研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に従事する。

2　研究員は、基幹研究院に所属する教員のうちから、学長が任命する。

3　研究員の任期は2年とし、その終期が研究員となる日の属する年度の翌年度の末日を超えることとなる場合は、翌年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

（客員研究員）
第7条　客員研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に参画する。
2　客員研究員は、本学専任の教員以外の者を、学長が委嘱する。
3　客員研究員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

（研究協力員）
第8条　研究協力員は、第3条に掲げる研究及び業務に協力する。
2　研究協力員は、本学専任の教員以外の者を、研究所長が委嘱する。
3　研究協力員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

（運営会議）
第9条　研究所に、研究所の運営並びに研究及び業務に関する事項を審議するため、ジェンダー研究所運営会議（以下「運営会議」という。）を置く。
2　運営会議は、次に掲げる者をもって組織する。
(1)　研究所長
(2)　第4条第1項第2号に掲げる教員
(3)　第4条第1項第3号に掲げる特別招聘教授
(4)　第4条第1項第4号に掲げる研究員
(5)　その他グローバル女性リーダー育成研究機構長が必要と認めた者
3　運営会議の議長は研究所長をもって充て、議長は運営会議を主宰する。
4　運営会議の構成員は、第2条の目的を達成する上で必要な事項について、運営会議での審議を求めることができる。
5　研究所長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。
6　本条に定めるほか、運営会議に関し必要な事項は、別に定める。

（事務）
第 10 条　研究所の事務は、企画戦略課が行う。

（雑則）
第 11 条　この規則に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、別に定める。

附　則
1　この規則は、平成 27 年4月1日から施行する。
2　国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究センター規則は、廃止する。

【資料】⑧国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則

（平成 27 年 3 月 25 日制定）

（趣旨）

第 1 条　この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則（以下「職員就業規則」という。）第 4 条第 5 項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学（以下「本学」という。）のグローバル女性リーダー育成研究機構に置く研究所において雇用する特別招聘教授に関し必要な事項を定める。

（定義）

第 2 条　この規則において「特別招聘教授」とは、国際的に著名な研究者又は顕著な業績を有する研究者で、グローバルな視野から本学の教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることを目的として、本学が常勤の教員として採用する者をいう。

（選考）

第 3 条　特別招聘教授の選考は、教員人事会議の議を経て、学長が行う。ただし選考に係る審査は、基幹研究院長に付託するものとする。

2　前項の規定にかかわらず、学長の戦略的人事による選考は、役員会の議を経て、学長が行うものとする。

3　前 2 項の選考にあたっては、国立大学法人お茶の水女子大学教員選考基準第 1 条の規定を準用する。

（定年・雇用期間）

第 4 条　特別招聘教授の定年は 65 歳とし、当該定年に達した日以降における最初の 3 月 31 日（以下「定年退職日」という。）に退職するものとする。ただし、学長が特に必要があると認める職員については、この限りでない。

2　前項の規定にかかわらず、学長が必要と認める場合には、5 年以内の期間を定めて雇用することができる。

（給与及び退職手当）

第 5 条　特別招聘教授の給与は、国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則第 4 条第 4 項の規定に基づき年俸制を適用して雇用する教員の就業に関する規則（以下「年俸制適用教員の就業に関する規則」という。）第 2 条第 1 号の規定に基づき採用された教員に関する同規則第 6 条から第 13 条の規定を適用する。

2　特別招聘教授の退職手当は支給しない。

（赴任及び帰国旅費）

第 6 条　特別招聘教授には、赴任及び帰国のための旅費を支給する。ただし、帰国のための旅費は退職後 3 か月以内に本邦を出発する場合に限り支給し、一時帰国のための旅費は学長が必要と認める場合に支給するものとする。

（就業等）

第 7 条　特別招聘教授の就業に関し、この規則に定めのない事項については、職員就業規則の定めるところによる。

2　特別招聘教授の給与に関し、この規則に定めのない事項については、国立大学法人お茶の水女子大学職員給与規程の定めるところによる。

（雑則）

第 8 条　この規則に定めるもののほか、特別招聘教授に関し必要な事項は、別に定める。

附　則

1　この規則は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

2　この規則の施行後最初に採用される特別招聘教授は、この規則に基づき選考されたものとみなす。

附　則（平成 27 年 10 月 23 日）

この規則は、平成 27 年 10 月 23 日から施行する。

附　則（平成 28 年 2 月 19 日）

この規則は、平成 28 年 2 月 19 日から施行する。

【資料】⑨『ジェンダー研究』編集方針・投稿規程

《編集方針》

1.『ジェンダー研究』(以下、本誌)は、学際的・国際的なジェンダーに関する最新の研究成果を発信し、グローバルなジェンダー研究の発展に寄与する。

2. 本誌は、特集記事・投稿論文・書評からなる。

3. 本誌は特集記事を企画し、時宜にかなったもの、国際的な関心の高いもの、新領域を開拓するものなど、現在のジェンダー研究にとって重要であるテーマで、質の高い論文を掲載する。

4. 投稿論文は、国内外・学内外を問わず公募し、厳正な審査を経て掲載することで、質の高い学術論文の国内外への頒布を進める。

5. 書評は、国内外のジェンダーに関する書籍を厳選し、最先端の研究動向の紹介およびそれについての考察を加えた論評を行う。

6. 本誌の刊行により、国内外・学内外のジェンダーに関する研究の発展を促進し、グローバルかつ有機的な研究交流の構築を目指す。そして、国立大学法人として、男女共同参画社会の実現に貢献する等の、社会的要請にも応える。

《投稿規程》

1 投稿する論文は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。

2 投稿者は、国内外を問わず、学際的に女性学・ジェンダーに関する研究に従事する者とする。

3 投稿する論文は、未発表の論文に限る。

4 論文執筆における使用言語は、原則として日本語または英語とする。日本語／英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。

5 投稿論文は原則として、
日本語の論文は、注・図表・参考文献を含めて 20,000 字以内
英語の論文は、注・図表・参考文献を含めて 8,000 ワード以内

6 論文の提出時には、本文・図表・参考文献のほかに、以下についても提出すること。
6-1 表紙。論文タイトル(副題も含む)と投稿者氏名・所属を、日本語と英語とで記す。
(タイトル等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある。)
6-2 日本語要旨。400 字以内。
6-3 英語要旨。200 ワード以内。ネイティブチェック済のもの。
6-4 キーワード。日本語・英語ともに 5 語以内で、それぞれの要旨の後に記載する。

7 投稿論文は、ジェンダー研究所ウェブサイト上の、以下のいずれかの投稿フォームより、必要事項を入力したうえで、メール添付にて送付すること。

日本語投稿フォーム
https://form.jotform.me/72482244933459

英語投稿フォーム
https://form.jotform.me/72488720633461

8 本文と要旨などのテキストのデータは Word と PDF のファイルにし、図、表のデータは Word または Excel と PDF にし、写真は JPEG と PDF のファイルにして提出すること。

9 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。その際の費用に関しては投稿者が負担する。

10 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める＜『ジェンダー研究』執筆要項＞に従う。英語の投稿論文は Harvard Referencing System とする。

11 投稿論文の掲載の可否は、査読者による審査のうえ、編集委員会が決定する。

12 編集委員会は、査読者の審査にもとづき、投稿者に論文の修正を求めることがある。求められた投稿者は、速やかに論文を修正し、メールにて提出しなければならない。

13 投稿者による校正は原則 2 回までとする。

14 投稿後、投稿論文を取り下げる場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。

15 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表・写真などが多い場合には、執筆者による自己負担となることがある。

16 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、編集委員会の許可を必要とする。

（2017 年 10 月 27 日改訂）

【資料】⑩ジェンダー研究所ウェブサイト　プライバシー・ポリシー

1. 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所（以下、本研究所）ウェブサイトでは本研究所のイベント開催に際して、イベント参加申込者の個人情報（氏名等により特定の個人を識別できるもの）を、本ウェブページ上にて収集することがあります。

2. 収集した個人情報はイベント開催における会場手配や安全確保、配布資料作成の参考として利用するものであり、本研究所のイベント開催通知以外では利用することはありません。

3. 収集した個人情報の管理は、ウェブ担当者が漏洩、紛失、改竄等に対する安全対策を行うことで保護し、その責任は本研究所所長が最終的に負います。

4. 本研究所では、プライバシー・ポリシーを改定することがあります。改定する場合は、当ウェブサイトでお知らせします。

附　則
このプライバシー・ポリシーは、2015 年 7 月 1 日から施行します。

国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構
ジェンダー研究所（IGS）
2018（平成 30）年度事業報告書

編集担当：申琪榮・和田容子

発行：お茶の水女子大学ジェンダー研究所
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
Tel: 03-5978-5846
igsoffice@cc.ocha.ac.jp
http://www2.igs.ocha.ac.jp

2019 年 7 月作成

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
お茶の水女子大学 ジェンダー研究所

Institute for Gender Studies, Ochanomizu University
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610 Japan

TEL: 03-5978-5846　FAX: 03-5978-5845
igsoffice@cc.ocha.ac.jp
http://www2.igs.ocha.ac.jp

iGS
Institute for Gender Studies
Ochanomizu University